

**2023年度**  
**授業の自己評価報告書**

**奥羽大学 歯学部**



## 2023年度 授業の自己評価報告書科目一覧

学年	授 業 科 目	科 目 責 任 者	頁
1～4	エレクトティブスタディー (SE)	玉 井 利代子	1
1	統計数学	菊 地 尚 志	2
1	情報リテラシー I	古 山 昭	3
1	英語基礎	長 峯 英 樹	4
1	英語 I	長 峯 英 樹	5
1	心理学	佐 藤 歩	6
1	経営学	長 峯 英 樹	7
1	日本語学 I	本 多 真 史	8
1	医療倫理学	長 岡 正 博	9
1	基礎物理学	荒 木 威	10
1	物理学実験	菊 地 尚 志	11
1	基礎化学	斎 藤 昇太郎	12
1	化学実験	阿 部 匡 聡	13
1	基礎生物学	今 井 元	14
1	生物学実験	今 井 元	15
1	歯科医療概論	瀬 川 洋	16
1	基礎歯学概論 I	安 部 仁 晴	17
1	臨床心理学	佐 藤 歩	18
1	医療人間学 I	中 川 敏 浩	19
2	情報リテラシー II	宇佐美 晶 信	20
2	英語 II	長 峯 英 樹	21
2	日本語学 II	本 多 真 史	22
2	物理学	菊 地 尚 志	23
2	化学	阿 部 匡 聡	24
2	生物学	前 田 豊 信	25
2	基礎歯学概論 II	遊 佐 淳 子	26
2	口腔解剖学	宇佐美 晶 信	27
2	口腔解剖学実習	宇佐美 晶 信	28
2	解剖学	宇佐美 晶 信	29
2	解剖学実習	宇佐美 晶 信	30
2	口腔組織学	安 部 仁 晴	31
2	口腔組織学実習	安 部 仁 晴	32
2	口腔生理学 I	川 合 宏 仁	33
2	口腔生理学実習	川 合 宏 仁	34
2	口腔生化学 I	加 藤 靖 正	35
2	口腔感染免疫学 I	玉 井 利代子	36
2	歯科薬理学 I	鈴 木 礼 子	37
2	生体材料・歯科材料学 I	石 田 喜 紀	38
2	公衆衛生学	小 林 美智代	39
3	社会歯科学	南 健太郎	40
3	口腔生理学 II	川 合 宏 仁	41
3	口腔生化学 II	加 藤 靖 正	42
3	口腔生化学実習	加 藤 靖 正	43
3	口腔病理学	遊 佐 淳 子	44
3	口腔病理学実習	遊 佐 淳 子	45
3	口腔感染免疫学 II	清 浦 有 祐	46
3	口腔感染免疫学実習	玉 井 利代子	47
3	歯科薬理学 II	柴 田 達 也	48
3	歯科薬理学実習	鈴 木 礼 子	49
3	生体材料・歯科材料学 II	石 田 喜 紀	50
3	生体材料・歯科材料学実習	石 田 喜 紀	51

学年	授 業 科 目	科 目 責 任 者	頁
3	口 腔 衛 生 学	廣 瀬 公 治	52
3	口 腔 衛 生 学 実 習	廣 瀬 公 治	53
3	保 存 修 復 学 I	山 田 嘉 重	54
3	冠 橋 義 歯 補 綴 学 I	羽 鳥 弘 毅	55
3	有 床 義 歯 補 綴 学 I	山 森 徹 雄	56
3	有 床 義 歯 補 綴 学 I 実 習	山 森 徹 雄	57
3	口 腔 外 科 学 I	金 秀 樹	58
3	口 腔 内 科 学	高 田 訓	59
3	歯 科 放 射 線 学 I	原 田 卓 哉	60
3	高 齢 者 歯 科 学 I	鈴 木 史 彦	61
3	災 害 歯 科 医 学	板 橋 仁	62
3	総 合 臨 床 医 学	風 間 咲 美	63
4	保 存 修 復 学 II	山 田 嘉 重	64
4	保 存 修 復 学 実 習	山 田 嘉 重	65
4	歯 内 療 法 学	木 村 裕 一	66
4	歯 内 療 法 学 実 習	木 村 裕 一	67
4	歯 周 病 学	高 橋 慶 壯	68
4	歯 周 病 学 実 習	高 橋 慶 壯	69
4	冠 橋 義 歯 補 綴 学 II	羽 鳥 弘 毅	70
4	冠 橋 義 歯 補 綴 学 実 習	羽 鳥 弘 毅	71
4	有 床 義 歯 補 綴 学 II	山 森 徹 雄	72
4	有 床 義 歯 補 綴 学 II 実 習	山 森 徹 雄	73
4	口 腔 イ ン プ ラ ン ト 学	山 森 徹 雄	74
4	口 腔 イ ン プ ラ ン ト 学 実 習	山 森 徹 雄	75
4	口 腔 外 科 学 II	川 原 一 郎	76
4	口 腔 外 科 学 III	高 田 訓	77
4	歯 科 麻 醉 学	山 崎 信 也	78
4	歯 科 矯 正 学	福 井 和 徳	79
4	歯 科 矯 正 学 実 習	福 井 和 徳	80
4	小 児 歯 科 学	島 村 和 宏	81
4	小 児 歯 科 学 実 習	島 村 和 宏	82
4	歯 科 放 射 線 学 II	原 田 卓 哉	83
4	高 齢 者 歯 科 学 II	鈴 木 史 彦	84
4	障 害 者 歯 科 学	吉 田 健 司	85
6	臨 床 総 合 講 義 ( 歯 科 麻 醉 学 )	山 崎 信 也	86

# 2023年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	エレクトィブスタディ (ES)	第1～4学年
科目責任者 (記載者)	玉井 利代子	

調査実施年月：2024年6月

## I 到達目標

### 1) 科目の到達目標に対する現状説明

到達目標は

1) 主体性をもって、興味・関心を持つ分野・科目を選択できる 2) 主体性をもって、テーマ・目標を決めることができる  
3) 主体性をもって、テーマ・目標に対する方針を検討し、実行できる 4) 成果・結果をまとめ、発表することができる  
である。授業評価結果では、「自由度が高い点が良かった」等と到達目標に達したと考えられる学生と、「本科目は何のためにやるのか分からない」という学生の差が出ていた。

### 2) 自己点検・評価

上記の他に、「いろんな分野に触れてもらえて興味が湧いた点」、「また来年も参加したいです」、「苦手な教科の自習が出来るので、復習が出来て助かります」など授業評価結果が得られたので、到達目標を概ね達成したと考えられる。

### 3) 改善方策

各分野・科目の事情から、希望する分野・科目に出向できない学生がどうしても出るが、次年度進級で空きが出たら優先的に配属する。

## II 教育方法

### 1) 教育方法の現状説明

出向した分野・科目において、テーマ・目標を考えながら、生涯学修を継続できるよう個人または少人数グループ指導体制の形態で履修する。各分野・科目ごとの特色やルールがあるので、担当教員とよく相談しながら進める。

### 2) 自己点検・評価

学生が出向する分野・科目をユニバーサルパスポートのアンケート形式で希望を調査し、出向先を決定した。その通知をする時、課題管理を用いたが、若干手間がかかったため次回は掲示登録を介して通知する予定である。

### 3) 改善方策

「当初の説明よりも、時間が短く実習のようなものも少なかった。研究に関するものも少なかった」という回答があった。回答結果を各科目に周知することで改善協力を求める。

## III 成績評価

### 1) 成績評価の現状説明

各自が得ようとする成果を決定する科目であるため、教員からの成績評価は無い。毎回出席を確認する。80%以上の出席がなければ総合試験の受験資格を失う。

### 2) 自己点検・評価

欠席限度を超える学生は出なかったので、良好である。

### 3) 改善方策

授業評価結果で「本科目の存在が不明」という回答があったので、各自が得ようとする成果を決定する科目であることを周知する。

# 2023年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	統計数理学	第1学年
科目責任者（記載者）	菊地 尚志	

調査実施年月：2024年6月

## I 到達目標

### 1) 科目の到達目標に対する現状説明

母集団の変量の統計資料を整理して、その分布を特徴づける平均値と分散の計算ができる。それらの量が表す分布の特徴を説明する。標本を抽出して母集団に関しての分布の統計量の推定と検定ができる。そのために必要となる確率分布を理解する。

### 2) 自己点検・評価

到達目標についての効果的な授業内容を系統的に組み立てられている。

### 3) 改善方策

到達目標の設定については現状で十分と考えている。

## II 教育方法

### 1) 教育方法の現状説明

母集団の母平均、母分散を具体的に計算させている。またそれらの量が、分布を可視化したグラフの何に対応しているかを実習して教えている。母集団から標本を取り出して、母平均、母分散についての推定、検定を具体的に手を動かして実習させている。

### 2) 自己点検・評価

到達目標を達成すべく、具体的に授業を進めている。やり方としては十分と考える。

### 3) 改善方策

この2年ほどで学生の学力は著しく下がった。単なる暗記を中心に学習を進めてきた今の学生にとって、思考することの大事な数学や物理学を理解させることはとても難しいと感じている。しかし単に簡単にして合格させよという訳にもいかない。とても頭を痛めている。

## III 成績評価

### 1) 成績評価の現状説明

前期後期の定期試験によって合否を判定する。また定期試験に至るまでに宿題を出して自習的学習習慣がつくように努めている。

### 2) 自己点検・評価

現状で十分と考える。

### 3) 改善方策

特には考えていない。

# 2023年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	情報リテラシー I	第 1 学年
科目責任者（記載者）	古山 昭	

調査実施年月：2024年 6 月

## I 到達目標

### 1) 科目の到達目標に対する現状説明

インターネットを利用して課題やメールの提出を行わせる。Word、Excel、PowerPointも最低限の技術を習得させる。GIMPを用いた画像処理技術を習得させる。

### 2) 自己点検・評価

I C Tに関しては学生ごとに習得度の開きはあるが、最低限の技術を習得させるという講義の目標は概ね達成されており、ほぼ問題はないと考えている。ただし、学生が講義で用いるパソコンがMacの場合、やや操作に難がある場合がある。特に、大学のwifiにMacの機器が繋がらないケースが頻出した。

### 3) 改善方策

新たに科目担当に加わったMacユーザーの教員も所属研究室の事情で講義に参加できなかったため、Macユーザーの学生に十分な対応ができなかった。今年度は、wifiへの接続指導に関してすでに改善が見られており、Macユーザーの学生への対応は向上していると考えている。

## II 教育方法

### 1) 教育方法の現状説明

テキストに沿って説明している。不慣れな学生については、教員の個別指導も行っている。

### 2) 自己点検・評価

講義では折に触れて、質問がないか、演習について来れているかを学生に問うている。しかしながら、作業に忙しくて質問できないことや、やや進度が早く、教員に質問しにくいと感じた学生もいるようである。

### 3) 改善方策

講義について来れていないことを言い出せない学生もいるので、教員の側からついてこれているかどうか個別に確認するなどの措置を行う。

## III 成績評価

### 1) 成績評価の現状説明

前期後期1回ずつの試験（40点）、単元ごとに提出するまとめ課題の提出（40点）、各講義前に提出する予習課題（20点）による、100点満点の評価である。

### 2) 自己点検・評価

予習課題やまとめ課題を提出することがおおきな評価基準になっており、I C Tに不慣れな学生も大部分は良好な評価が得られた。評価の低い学生はこれらの提出物が未提出となっており、その場合評価点が低くなるのは妥当である。

### 3) 改善方策

提出物が未提出の学生に対しては、3度以上、未提出であることを通知することとする。

# 2023年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	英語基礎	第1学年
科目責任者（記載者）	長峯 英樹	

調査実施年月：2024年6月

## I 到達目標

### 1) 科目の到達目標に対する現状説明

当科目の到達目標は、英文の理解スピードと精度を向上させ、自分の意見を述べるために役立つ表現を習得することである。そのために、国内外の社会問題に関する英文を題材に、(1) 基礎英文法の復習、(2) 語彙・構文、時事表現の増強、(3) テーマに関する多様な意見とそれぞれの根拠の理解、(4) 英語で発信するための基礎スキルの習得、の4つを具体的目標とした。

### 2) 自己点検・評価

入学時の各学生の能力格差も確かにあるものの、大多数の学生の英語力（とくに基礎文法力）向上に貢献できたのではないと思う。一方で、上記(4)の英語による発信スキルの向上については、当講義内で十分な時間が確保できなかった。

### 3) 改善方策

英文法に関してであるが、例年、「英文法不要派」が一定数存在する。しかし、前年同様、本年度（2023年度）でも英文法に対する否定的な考えをもつ学生が少なく、むしろ熱心に学ぼうとする学生も多かった。学生のニーズも年々多様化しているので、自主学習時間をしっかり確保し、学生一人一人から疑問点を聞き出し、ヒントを与え、学生自身が解決できるように助言する、といった地道な努力が必要だと考える。

## II 教育方法

### 1) 教育方法の現状説明

学生全員に順番で英文の音読とサイトトランスレーションをしてもらい、頻出語彙や時事表現、基礎文法を解説しながら、様々な社会テーマに対する自分の意見を論理的に表現するための重要表現を覚えてもらう。学生間の英語能力格差にいかに対処するかが毎年の課題である。

### 2) 自己点検・評価

全般的に英語に対する苦手意識の軽減に役に立てたのではないと思う。一方で、学生間の能力や意欲の格差も前年以上に大きく、一方通行的な講義では対処が難しいことも痛感している。授業時間内に自主学習の時間をできるだけ確保し、個々の質問に対応する形式をとった。それでも、学生の授業評価から質問のしやすさと予習と復習の時間確保という点で改善の余地がまだまだあると認識している。

### 3) 改善方策

「解説は講義で、復習は自宅で」という学習を学生に期待するよりも、解説・質疑応答と復習もできるだけ講義内で行うようにしたい。具体的には、2つのテーマごとに、解説（60分+60分）⇒授業内での復習と疑問点解消（60分）⇒確認テスト前復習（40分）⇒確認テスト、というパターンを確立したい。

## III 成績評価

### 1) 成績評価の現状説明

筆記試験（100%）により評価し、65点以上で合格とする。

### 2) 自己点検・評価

講義で解説したテーマ2つごとに確認テストを実施。前年度同様、テスト前に40分間の自習時間を設けたことで多くの学生に成績の改善が認められた。また、前年度はテストが多すぎると感じた学生が数名いたが、本年度はむしろ学んだ内容の確認のために有効であることを理解し、積極的に取り組む学生が多かった。

### 3) 改善方策

学んだ知識やスキルをテストという形で確認するプロセスの重要性を理解してもらいながら、上記の取り組みパターンを継続し、英語力の向上につなげていきたいと考えている。



# 2023年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	英語 I	第 1 学年
科目責任者（記載者）	長峯 英樹	

調査実施年月：2024年 6 月

## I 到達目標

### 1) 科目の到達目標に対する現状説明

本講義は「英語基礎」で学んだテーマについて、①テキスト以外の資料を読むことで理解を深めること、②大手メディアや海外の時事ニュースに慣れること（とくにボリュームとスピード）、③グループで調査し、英語で発表すること、を目標としている。③の英語での発表に関しては、苦手意識が強い学生が数名いたため、残念ながら割愛した。

### 2) 自己点検・評価

テキスト以外の資料を読み理解を深める点については例年以上に熱心に取り組む学生が多かった。②の時事ニュースに慣れるといった目標は、前年度よりも効果的に進めることができた。また、授業評価項目 8 の必要性の理解に関しては70%以上の学生が理解してくれた。英語の理解スピードの向上では、英語学習の習慣化が必要で、各個人が行動に移せるかが今後も課題である。

### 3) 改善方策

英文理解のスピード向上のためには、英語学習の習慣化が不可欠であり、やはりある程度の強制力をもった学習機会が必要であると思う。全学生を対象にすることは困難であるが、希望者を対象にしたオンラインTOEIC勉強会を今後も継続し、参加者の数を増やしていくことで全体のレベルを向上させることも一つの方法だと考えている。

## II 教育方法

### 1) 教育方法の現状説明

「英語基礎」で学んだ知識をもとに、ライティングやスピーキングといった発信力の向上を目的とした講義内容である。本年度もグループプレゼンテーションを割愛したため、ライティングを中心とした指導となった。

### 2) 自己点検・評価

英文のライティングに関しては、「英訳」にとどまらず、基本構文やパターンを覚え、文法事項に注意しながら自分の文章にしていくことが一番効果的な方法である。しかし、前年同様、「丸暗記は役に立たない」といった考えが根強い学生も少なくない。暗記を基本とした方法の有効性をいかに理解して実践してもらえるかが課題である。

### 3) 改善方策

スピーキングやライティングは講義内容の理解だけでは上達が望めないスキルである。各学生の自宅学習に任せるよりも、基本構文を確実に覚えてもらうように、授業内で自習時間を確保する。

## III 成績評価

### 1) 成績評価の現状説明

定期試験(80%)、課題提出(20%)により評価し、65点以上で合格とした。試験としては、単なる知識を問うのではなく、あるテーマについて自分で調べて、基本構文とパラグラフの構成をしっかりと意識しながら英文を構成できているかを問う内容とした。

### 2) 自己点検・評価

今後も改善し続ける必要はあるが、試験および評価の方向性としては妥当であると考えている。

### 3) 改善方策

学生の自主性に任せるだけでなく、授業内で重要語句や構文を最低でも10回書いてもらうなど、ある程度の強制力をもつような課題を出す。英語への苦手意識をもつ学生からは不満が出てくることが予想されるが、有効性を実感してもらうには継続していくしかないと考えている。

# 2023年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	心理学	第1学年
科目責任者（記載者）	佐藤 歩	

調査実施年月：2024年6月

## I 到達目標

### 1) 科目の到達目標に対する現状説明

歯科には虐待やいじめ、依存症等の問題を抱える患者も来院する。患者がチェアに座った時、アザが見られたら歯科医師はそのアザからどんなことを想像するのか。その時ただ単に“ケガをしたのか”と捉えるのと“もしかしたら虐待ではないか”と捉えるのではわけが違う。現代の心の問題を取り入れた心理学を学ぶことで、人間性豊かな歯科医師として幅広い視点で患者を診る力がつくよう達成目標が作られ、授業が構成されている。

### 2) 自己点検・評価

シラバス通りに授業を進めたことで、学生は設定した達成目標は概ね身に付けたと考える。特に、学生評価において、授業はシラバスに沿って進化したと思いますか、という質問に対して学生は、そう思う・どちらかと言えばそう思うに全員が回答している。しかし、自らシラバスやカリキュラムを確認しましたかという質問に対して、そう思わない・どちらかと言えばそう思わない、に回答した学生が3名いた。

### 3) 改善方策

オリエンテーションや各授業の際、シラバスやカリキュラムを確認し、それらの重要性について積極的に声をかけていく。

## II 教育方法

### 1) 教育方法の現状説明

各到達目標を達成するために、参考書の使用だけでなく、科目担当者が作成したレジュメ・資料を配布している。特にレジュメは穴埋め式になっており、学生にとって何が重要なワードなのか理解できるように工夫している。また、その目標一つ一つが歯科医師国家試験や医療とどう繋がりがあのかについても毎時間説明してから、授業を開始している。

### 2) 自己点検・評価

教育方法について概ね実行できたと捉えている。学生の授業評価では、教員での重要項目や特殊性、必要性を理解できましたか、の質問に対し9割の学生がそう思う・どちらかと言えばそう思うと回答した。また、自由記載においてもレジュメがまとまっていて分かりやすいし復習しやすいといった回答があった。また学生からは優しい語り口調のため聴こうと思った、板書や話すスピードが配慮されていた、といった評価があった。

### 3) 改善方策

予習・復習をしていない学生が一定数いることが問題点である。学生自身が教本等を使用し、各授業のポイントを調べる・復習するようなレポートを求めるようにしたい。また、質問できないことがあったと感じている学生も一定数いることから、積極的に科目担当から声をかけていきたい。

## III 成績評価

### 1) 成績評価の現状説明

定期試験で65点以上の者を合格としている。試験内容は、到達目標レベルに達しているかどうかを確認するため、記述・選択式で作成している。試験前に、①成績評価について具体的に学生に説明②練習問題を実施、テスト内容や出題範囲を理解できるように工夫している。不合格者に対しては、再テスト実施前に個別に声をかけ理解できないところがないように工夫している。

### 2) 自己点検・評価

成績評価においては誤解のないように、具体例を交えながら数回説明を行った。結果、学生の授業評価において、自由記載欄等に成績評価についての記載は全くなかった。今後も、細心の注意を払い、誤解がないように丁寧に説明する機会を作っていきたい。

### 3) 改善方策

成績が振るわない学生、留年生、科目担当に不信感を抱いているような態度をとる学生については特に注意をし、科目担当から積極的に声をかけて、成績評価について誤解がないようにしていきたい。

# 2023年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	経営学	第1学年
科目責任者（記載者）	長峯 英樹	

調査実施年月：2024年6月

## I 到達目標

### 1) 科目の到達目標に対する現状説明

企業経営に興味を持ってもらうことが第一の目標である。具体的には、①基礎的な分析フレームワークの理解、②ビジネスモデルの概要理解、③論理的考察の基礎習得、④将来の経営イメージの構築、の4点である。多様な業界の事例を学ぶことにより、歯科業界にいかに応用できるかについて考察する。

### 2) 自己点検・評価

興味深い企業事例を紹介でき、昨年度ほどではないが、授業外でも質問や参考図書などの問い合わせが寄せられるなど、多くの学生の好奇心を高めることができたと思う。時間が限られているため、マーケティングや組織管理といった各分野を掘り下げることはできなかったが、歯科業界にも応用できそうな事例を数多く紹介することができた。一方、なぜ医療業界に特化せず、他業種から学ぶ必要があるのか疑問をもつ学生もいた。

### 3) 改善方策

インドのアラビンド眼科がマクドナルドから、メイヨークリニックがトヨタから学んだように、医療機関が他業種から学んだイノベーションの事例を数多く紹介し、学生の関心をさらに高めたい。

## II 教育方法

### 1) 教育方法の現状説明

理論や分析フレームワークを学び、いくつかの事例に応用してみることで、様々な視点が存在することを学ぶ。単なる講義形式に終始することなく、各設定テーマに関する分析と議論を行い、自分の考察をまとめるように課題提出などで促す。

### 2) 自己点検・評価

学生による授業評価によると、本年度も気軽に質問できる雰囲気を提供する努力がまだまだ不足しているようである。また、知的好奇心をもっと刺激できるように授業内容も改善し続ける必要があると思う。やはり、医療機関への応用可能性に関する考察が必要であることを痛感した。

### 3) 改善方策

本学部には、歯科クリニックの経営者として活躍する将来像をもつ学生が多い。普段、英語には苦手意識が強い学生達からも経営学に関しては多くの興味深いアイデアや問題提起があった。ただ、それらは授業外に寄せられることから、できれば授業内で活発に意見交換できるような工夫をしたい。グループワークはもちろん、通常の授業でも発言を活発化させる機会を設けたい。また、医療機関の事例も増やしたい。

## III 成績評価

### 1) 成績評価の現状説明

定期試験（80%）、課題提出およびグループ発表（20%）により評価。知識を問うよりも、学んだ内容をもとに将来の経営イメージを論述してもらう試験内容とした。

### 2) 自己点検・評価

出題の方向性としては間違っていないと思う。一方で、本年度においても授業で学んだビジネスモデルやフレームワークを意識できていない学生も数名いたため、この点に関する指示が不十分であったと思う。

### 3) 改善方策

授業で学んだ内容を意識した経営イメージができているか、最終講義時に確認する時間を確保したい。

# 2023年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	日本語学 I	第 1 学年
科目責任者（記載者）	本多 真史	

調査実施年月：2024年 6 月

## I 到達目標

### 1) 科目の到達目標に対する現状説明

大学での学習・研究および歯科医師としての実務において必要となる日本語運用能力の基盤を確立するため、読む、聞く、話す、書く」の基本姿勢、知識、技能および書籍・論文・資料の読解の能力を修得することを目標としている。授業内容は、これに沿う形で行われている。

### 2) 自己点検・評価

目標と授業内容は合致している。また、受講生全員（休学者を除く）が合格したことから、科目の目標は達成されたと考える。「学生による授業評価アンケート」でも、大きな問題点を指摘する意見はなかったことから、現在の到達目標を変更する必要はない。

### 3) 改善方策

到達目標についての問題はないと判断し、2024年度も同様の目標を設定する。

## II 教育方法

### 1) 教育方法の現状説明

大学で学ぶことに必要な、「読む、聞く、話す、書く、考える」の基本態度、知識、技能を身につけさせている。また、図書館利用術や書籍・論文・資料の読解法、資料の整理法といったリサーチ・プレゼンテーション技法、さらには論理的な文章・レポートの書き方の技能も教授している。加えて、日本語コミュニケーション能力、日本語運用能力、文章表現能力などを高め、まとめる力、伝える力をも向上させている。

### 2) 自己点検・評価

同アンケートの項目 5「教員は授業の準備をしっかりとっていましたか」では、多数の者が「そう思う」・「どちらかといえばそう思う」と回答している。また、項目 6「教員の熱意や工夫は感じられましたか」でも、上記同様の者が「そう思う」・「どちらかといえばそう思う」と回答している。教員が持つべき「基本的な姿勢」は、授業の充実・向上を図る上で大切な要素であり、それらは十分に満たしていると考えられる。

### 3) 改善方策

アンケートから、日本語運用能力を軽んずる学生がいると判断される。受講者自身の意識に問題があり、むしろそれが日本語運用能力を伸び悩ませている原因であると考え。歯学の専門学習の基礎となる「日本語運用能力を養うことの重要性」を、よりわかりやすく、かつ具体的に学生へ働きかけていこうと考える。

## III 成績評価

### 1) 成績評価の現状説明

定期試験（70%）、課題等の提出状況およびその内容（30%）として、総合的に評価した。課題は採点后に返却し、次回の授業で解説を行った。

### 2) 自己点検・評価

評価方法については、問題がないと考える。

### 3) 改善方策

成績評価について、特筆すべき問題はないと考える。

# 2023年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	医療倫理学	第1学年
科目責任者（記載者）	長岡 正博	

調査実施年月：2024年6月

## I 到達目標

### 1) 科目の到達目標に対する現状説明

目標として、医療行為の特殊性の理解・全ての医療従事者の職業上の義務・社会における医療のあり方・問題解決のための具体的指針を考えることができるようになるを設定したが、医療の特殊性を鑑み高い倫理観が必要とされることは理解して頂いたと考えている。しかし、社会における医療のあり方・問題解決のための具体的指針に関して、第1学年という時期であることもあり自分自身のこととしては見られていないように感じた。

### 2) 自己点検・評価

一般的な倫理と医療倫理の違いを医療の特殊性を解説した上で、その必要性を理解し習得して頂いたと考えている。到達目標として④現代医療の倫理問題について説明できる。⑤臨床現場で直面する倫理的問題を説明できる。とあるが、自分自身が当事者であり身に降りかかる問題として考えてもらいが、授業評価を観ると個人で差が大きく全体としては伝わっていなかったように思える。

### 3) 改善方策

医療行為の特殊性の理解・全ての医療従事者の職業上の義務に関しては、一律に話すのではなく特に重要となる箇所を強く伝えることでより印象に残るようにしていきたいと考えます。現代医療の倫理問題・臨床現場で直面する倫理的問題については、トピックスとして日々のニュースで取り上げられるような話題をテーマとして出すことで学生の興味や関心を引くことが必要になるかなと思います。

## II 教育方法

### 1) 教育方法の現状説明

目標として、医療行為の特殊性の理解・全ての医療従事者の職業上の義務・社会における医療のあり方・問題解決のための具体的指針を考えることができるようになるを設定してある。倫理学の成り立ちから丁寧に解説しているがどうしてもプリントを文字が占めてしまい、学生にとってはわかりづらい資料になっていたかもしれない。

### 2) 自己点検・評価

本科目を担当するに当たり学生に国家試験や模試などでどのように取り上げられているか検討し講義資料を作成し伝わりやすい形式を模索し実施した。しかし、医療倫理学という科目名で講義を行い、学問的に重要な内容であっても国家試験の上では出題されない内容に対してどのように重要性を伝えればいいのかで伝わり難い表現になってしまった点がいくつかあった。

### 3) 改善方策

スライドやプリントといった講義資料のなかで特に覚えて欲しい内容には太字や色を変えることで視覚的に重要であることを意識して賞えるように構成する。学生からの要望として「内容が難しいため、グループワークなどで考える時間があってもいい気がした。」とあった。教えなければいけないが先に立ち考える時間を与えることが出来なかったと思うのでグループワークの機会を作る。

## III 成績評価

### 1) 成績評価の現状説明

しっかりと言葉を理解・把握して頂きたいので記述式で試験を行っている。定期試験の結果は平均80.6、中央値87.5と点数の分布にバラツキがある点は改善が必要であるが悪い結果ではないと考えている。不合格者の答案用紙を確認したところ一切埋められてはおらず、勉強しないと点数が取れない試験になっていたと思う。

### 2) 自己点検・評価

試験結果は妥当と考えています。しかし、学生の授業評価では予習と復習に関する項目で期待している結果ではなかった。予習に関しては学生の興味を引き出すことは出来なかった受け止める必要がある。復習に関しては講義で学んだ内容を考える時間を誘導することが出来なかったことを意味する。講義内での取り上げ方と興味を引く話題作成に対策が必要であると感じました。

### 3) 改善方策

学問としての医療倫理学の重要性と、国家試験における医療倫理学で習得すべきことしっかりと試験問題に落とし込んで作問する必要があると考えております。

# 2023年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	基礎物理学	第1学年
科目責任者（記載者）	荒木 威	

調査実施年月：2024年6月

## I 到達目標

### 1) 科目の到達目標に対する現状説明

歯学部学生にとって重要となる「力、エネルギー、熱、電磁波、放射線」にテーマを絞って授業を進めている。基本的な知識を習得させるとともに、演習問題を通じて (1) 問題文を読み解く力、(2) 論理的思考に基づいた問題解決能力、(3) 初等関数を含む計算力、を養うことを目標としている。

### 2) 自己点検・評価

講義テーマに関しては問題なかった。不満の声もなかった。難易度に関しては「適度だった」と「難しすぎる」の両方の意見が聞かれた。例年と比べ平均点が大幅に下がったという事実もなく、難易度は適切であったと考える。学生から「計算が多すぎる」「問題文が分かりづらい」という指摘があった。技巧的な計算に傾倒し過ぎている、問題設定を複雑にし過ぎている、など反省すべき点があった。

### 3) 改善方策

講義テーマと難易度は現状を維持する。現状説明で挙げた (1) ~ (3) のバランスを見直す。高度な数学公式や膨大な計算量を必要としないような問題作成を心がける。問題設定を簡潔に説明できないような問題は出題を控える。問題ごとに正答率と識別指数を算出し、不適切な問題がないか事後確認を実施する。

## II 教育方法

### 1) 教育方法の現状説明

プロジェクターを用いた講義を行った後、その内容に沿った演習を実施している。復習が円滑に行えるように、講義資料と演習問題は全て授業開始時に配布している。演習問題の題材にできるだけ医療、人体、健康に関するものを取り上げ、学生が興味を持ちやすいようにしている。演習中は教員への質問や学生同士の議論を推奨している。正答率の低かった問題は次回授業で解説を行っている。

### 2) 自己点検・評価

講義資料とその解説には問題がなかった。学生から「分かりやすい」「見やすい」など好意的な意見が聞かれた。正答率の低かった演習問題の解説が好評であった。一方、講義と演習の配分について「講義が伸びて演習の時間が短くなるのはやめて欲しい」という意見があった。

### 3) 改善方策

問題解説は今後も実施する。またその際、学生からの要望を取り入れるようにする。当該科目の単位区分は「講義」であるため解説の時間を長めにとっている。時間内に解き切らなかった演習問題は宿題として放課後に取り組むべきであり、その旨を学生に認識させる。

## III 成績評価

### 1) 成績評価の現状説明

授業毎に行う演習課題、中間試験、定期試験の点数をもとに、演習20%、中間試験40%、定期試験40%の割合で評価している。進級基準に満たなかった学生には、前期末と後期末に再試験を実施している。

### 2) 自己点検・評価

特に問題はなかった。不満の声も聞かれなかった。

### 3) 改善方策

特になし。次年度も現状を維持する。

# 2023年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	物理学実験	第1学年
科目責任者（記載者）	菊地 尚志	

調査実施年月：2024年6月

## I 到達目標

### 1) 科目の到達目標に対する現状説明

歯科医学でも必要となる自然現象を理解する、そのための実験の機器を正しく使う、報告書を分かりやすく書く、ことを目標にしている。

### 2) 自己点検・評価

報告書を分かりやすく書くことはこれからの医療従事者に要求される「説明と患者の同意」を正に実地に練習する場になる。この点も具体的な実習に加えて大事と考えている。

### 3) 改善方策

現状では良いと考えている。ただいくつかの実験機器があまりに古くなっているのでそれらの更新も考える。

## II 教育方法

### 1) 教育方法の現状説明

学生たちも積極的に実験に関わっていると感じる。また二人の教員も授業とは違った学生へのより密接な指導ができています。

### 2) 自己点検・評価

学生に寄り添った指導ができていていると考える。

### 3) 改善方策

現状で良いと考える。

## III 成績評価

### 1) 成績評価の現状説明

毎回の実験の結果を報告書で提出させてその結果を踏まえて、全部で十回の実験を毎回10点満点で採点して合否を判定する。

### 2) 自己点検・評価

一部の学生からレポートの採点基準がよく分からないという意見が見られたが、レポートに関しては試験とは異なり正解があって丸バツをつけるものではない。その点を学生にもしっかりと説明し、また「説明と同意」という観点からも文章をしっかり書くように指導している。

### 3) 改善方策

過去のよいレポートを参考例として次回からの実験では学生に提示する。

# 2023年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	基礎化学	第1学年
科目責任者（記載者）	斎藤 昇太郎	

調査実施年月：2024年6月

## I 到達目標

### 1) 科目の到達目標に対する現状説明

高等学校レベルの化学的知識を理解・習得し、さらに基礎科目・臨床科目の理解・習得に必要な知識を得ることにある。化学に苦手意識のある学生にとって困難すぎる到達目標とならないよう、高等学校の初等レベルの内容を到達目標の一部とし、また、既習者にとって平易すぎる到達目標とならないよう、大学の一般レベルの内容をも到達目標の一部としている。これによって講義内容のバランスを確保している。

### 2) 自己点検・評価

シラバスに記載した到達目標は定期試験の解答や概ね毎週化している課題の提出状況から、学生のレベルに応じて、講義内容を調整した。多くの学生において達成されているものと考えられる。

### 3) 改善方策

他の教養系科目や基礎系科目との連動性の高い内容の取扱いを重点化に取り組み、取り扱う項目を一部削除した。しかし、講義内容が多すぎると感じる学生がまだ多くあることから、学生個々に必要な学習分量を検討させるように促す。

## II 教育方法

### 1) 教育方法の現状説明

学生にはシラバスを参照しながら予習するように指導し、主に板書により教科書の内容を中心に説明、配布する課題によって復習できるようにしている。

### 2) 自己点検・評価

配布課題によって週ごとに学生の理解状況を把握しつつ、学生誤解答にはすべて修正を加えることで、双方向性を確保した。これについては、学生からも評価を得ている。また、化学を苦手とする学生向けに自由参加の少人数制補講を実施することで個々に理解が足りない部分を聞き取り、解説した。

### 3) 改善方策

板書と口頭説明において、より学生に親しみやすい事項に触れる方策を取り、授業評価における「教育を受け知的好奇心が刺激されたり、興味が高まりましたか」という内容において、全体の78%が、「そう思う」または「どちらかといえばそう思う」と回答した。引き続き、特に口頭説明において、興味関心が高まるような内容を取り込むこととする。

## III 成績評価

### 1) 成績評価の現状説明

定期試験を75点、提出課題を25点満点とし、100点満点としている。

### 2) 自己点検・評価

提出課題点は、解答内容が不良である場合には追加課題を与え、ほとんどの学生が20点以上を獲得できるように努めている。評価方法に問題はないと考えているが、一部の学生より、課題点を無くして中間試験にして欲しいとの要望があった。

### 3) 改善方策

高校等で化学系科目が未履修の学生にとっては、中間試験は負担となりえる上、毎週の提出課題は、各講義の復習の位置づけであるため、概ね現状を維持しつつ、定期試験と提出課題の評価割合を80点と20点に改める。



# 2023年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	化学実験	第1学年
科目責任者（記載者）	阿部 匡聡	

調査実施年月：2024年6月

## I 到達目標

### 1) 科目の到達目標に対する現状説明

教本を読み実験操作・手順を理解し、定量分析・有機定性分析についての基本的知識、基本的技能を習得するため、①教本に示された手順通りに実験を行う ②実験器具を正しく取り扱う ③精密測容器具の目盛りを正確に読み取る ④実験の過程で進行した反応を説明する ⑤測定データや観察結果を正確に記録する ⑥記録に基づいて正確なレポートを作成する、を到達目標としている。

### 2) 自己点検・評価

目標としては、適切であると考えている。

### 3) 改善方策

修正・変更は特にしない。

## II 教育方法

### 1) 教育方法の現状説明

始めに、その回の実験内容の重要事項と実験操作上の注意事項を説明し、その後、個人で、あるいは3～4人のグループで実験を進めていく。正確で安全な実験操作が行われているか、常にチェックし、適宜、指導を行う。結果を正確に記録させるとともに、結果のもつ意味を考えるよう導く。

### 2) 自己点検・評価

試薬類・機器の配置、実験進行の流れ、指導法は、適切であると考えている。

### 3) 改善方策

グループで行う実験では、適切な役割分担・連携ができているかチェックし、必要に応じて指導する。実験の進行が極端に遅い学生がいる場合、作業を効率的に進められるよう誘導する。

## III 成績評価

### 1) 成績評価の現状説明

レポート 69%、演習 21%、受講態度 10% により評価した。

### 2) 自己点検・評価

評価法としては、適切であると考えている。

### 3) 改善方策

評価法の修正・変更は特にしない。欠席すると、その回のレポートの得点を放棄することになるので、安易に欠席しないよう、その点の周知徹底を図る。

# 2023年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	基礎生物学	第1学年
科目責任者（記載者）	今井 元	

調査実施年月：2024年6月

## I 到達目標

### 1) 科目の到達目標に対する現状説明

一般目標は、「歯学部基礎科目で修得する学習項目」を理解し、「動物の体制（構造と機能）」について「個体の階層性（細胞→組織→器官→器官系）」の順に系統的に修得し、「その成り立ち」について理解することである。到達目標は、1. 細胞 2. 組織 3. 器官 4. 器官系の基本構造と機能、5. 刺激の受容と反応 6. 体内環境の調節と恒常性の維持、7. 系統発生と個体発生及び多様性を説明できることである。

### 2) 自己点検・評価

成績上位（80%）の学生は、①「歯学部基礎科目で修得すべき学習項目」②「個体の階層性」③「細胞・組織の構造と機能」、④「器官・器官系における刺激の受容と反応・体内環境の調節」⑤「系統発生と個体発生及び多様性」などを系統的に説明できるようになった。成績下位の（15%）の学生は、1年生のうち上記①～⑤の人体の構造の全体像とその機能の概要を系統的に理解する重要性を認識していないように思われる。

### 3) 改善方策

来年度は、補講時間を用いて、理解できない学生に対して、もっと丁寧に説明することとする。

## II 教育方法

### 1) 教育方法の現状説明

履修方法は、学習効果ピラミッドに準じて行なっている。  
具体的には、「細胞の構造」・「脊椎動物の組織」・「刺激の受容と反応」・「体内環境の維持」・「生物の個体発生と系統発生」・「生態と行動」についての講義を聴講・理解し、各講義に対する課題（問題形式）について討議した後、課題の解答をサブノートにまとめ、教え合うことによって長期記憶を形成する。

### 2) 自己点検・評価

以下の良い点と悪い点の2点ずつ、指摘があった。  
良い点：1) 全範囲教えてくれる。2) 講義の説明、国家試験に問われやすい重要事項を記載している。  
悪い点：1) 自分で書く量がおおすぎて、写経になってる。2) 授業資料がみにくい。

### 3) 改善方策

良い点の継続：引き続き、HRなどで補講を行い、人体の正常構造と機能の全体像と国家試験に問われやすい重要事項について説明する。  
悪い点の改善：サブノートの作成は、学生の自由意思であり、学修支援用であることを説明する。但し、ノートを作成できる学生は成績が良く、作成できない学生は成績も悪いこと説明し、書いて覚えることの重要性を根気よく説明する。授業資料の文字小さいものに関して、拡大して配布する。

## III 成績評価

### 1) 成績評価の現状説明

前期・後期の中間試験と定期試験（計4区分）で評価している。すなわち、第1区分：前期中間「細胞の構造・脊椎動物の組織」（細胞と四大組織）／第2区分：前期定期「刺激の受容と反応（神経系と内分泌系）」／第3区分：後期中間「体内環境の維持（各器官系の調節）」／第4区分：後期定期「生物の個体発生と系統発生」「生態と行動」を行い、各区分毎の試験の得点にて評価し、最終評価はその平均としている。

### 2) 自己点検・評価

4人、不合格者を出してしまった。1D総合試験では、正答率70%程度だった。

### 3) 改善方策

来年は全員合格させられるように、さらに努力したい。1D総合試験では、正答率80%以上を目指す。

# 2023年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	生物学実験	第1学年
科目責任者（記載者）	今井 元	

調査実施年月：2024年6月

## I 到達目標

### 1) 科目の到達目標に対する現状説明

本科目においては、動物愛護の精神（3R）を学んだ上で、植物、動物、微生物を材料とした顕微鏡観察から生命体の基本構造（細胞・オルガネラ・組織・細胞分裂）を把握する。また、カエルを用いた肉眼解剖により、個体（脊椎動物）における各器官の構造と配列など基本的体制、発生過程を把握する。また、これらの実験を通して、実験の心構え、ルール、レポート作成法を修得することにより、科学論文の構成を学ぶ。

### 2) 自己点検・評価

ほとんどの学生に、1) 動物愛護の精神（3R）の理解・心構え 2) 顕微鏡・解剖器具の使用法 3) 化学染色法などの試料作成法 4) 細胞構造・細胞分裂・胚発生の過程 5) 器官と各器官系の分類 6) 実験結果のまとめ方（レポートの作成法）などを修得させることができた。しかし、一部の学生は、『提出が遅れる、訂正後の再提出ができない』など、実習の心構えとレポートの重要性について理解させられなかった。

### 3) 改善方策

『レポート提出が遅れる学生』に対して、学修する順番の重要性について説明して、期日までに提出させる。

## II 教育方法

### 1) 教育方法の現状説明

ガイダンスにおいて、動物愛護の精神を強調した上で、扱う生物の基礎知識・実験の目的・手順・関連する基礎医学的知識を説明する。

顕微鏡と実験器具との適正な使用法を学んだ上で、様々な細胞やオルガネラ構造などを詳細に観察し、スケッチする実習を行う。また、カエルの解剖を行い、各器官の構成や配列などを詳細に観察し、スケッチする実習を行う。実験に関するレポート作成し、論文の読み方や作成法の基礎を学ぶ。

### 2) 自己点検・評価

本年度、下記のような指摘を受けた。

- 1) 毎時間学習部を返却して欲しい。返却されないと学習としての効率が低くなると考えられる。
- 2) GWの答えを全員に配ってもらえたら助かります。勉強をしたいときに答えがないと勉強できない。

### 3) 改善方策

- 1) 学習部は、レポートの一部であることを強調して、事前でコピー、または、スキャンして置くことが必要であることを説明する。
- 2) GWの解答は、講義プリントと同じであり、講義プリント中に記載してあるが、学修しない学生は、それにすら気がつかないことが多い。  
毎回、GWの答えは、このスライドですと説明していく。

## III 成績評価

### 1) 成績評価の現状説明

レポート点で100%評価する。評価は、40点満点のレポートを12回提出し、最低点から2回分を削除し、全10回で評価する。提出期限に遅れた場合は4点/1日が減ぜられる。未提出+無断欠席がN回の場合、Nが1で90点満点、2で80点満点、3で70点満点となる。評価の計算式は、 $\text{評価点} = \{ (12回 - N回) \text{の総点} - \text{最低2回削除} \} \times 2.5 \div 10回$ 。これで基準点に達しない学生には、課題の提出で加点している。

### 2) 自己点検・評価

レポートを期限を守って提出することができない学生（不合格者）に対して実習試験を行ったが、基準点（65点）をとってこれず、合格させられなかった。

### 3) 改善方策

順序良く学修する重要性についてを根気よく説明し、レポートを遅れずに出す必要性を納得させ、レポートの提出遅延を守らせる。

# 2023年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	歯科医療概論	第1学年
科目責任者（記載者）	瀬川 洋	

調査実施年月：2024年6月

## I 到達目標

### 1) 科目の到達目標に対する現状説明

歯科医療概論を通じて、これから学ぶ歯科医学・医療の本質を正しく理解するとともに、歯科医学を学ぶ意欲と歯科医師としての基本的態度を身につけることを修得させる。

### 2) 自己点検・評価

入学後のまもない時期に座学のみで歯科医学・医療の本質を正しく理解させることは困難を窮めるが、人間性豊かな歯科医師としての心構えと目標設定の糸口につながると考えている。

### 3) 改善方策

座学による知識の付与のみならず、入学後のまもない時期に附属病院で実際の医療現場を体験学修することにより、歯科医師となる使命感と魅力に目覚めることからコロナ禍で中断している病院見学を早期に再開する必要性を痛感している。

## II 教育方法

### 1) 教育方法の現状説明

主に投影視覚媒体を用いての講義を行い、適宜、テーマに即した受動型学習から能動型学習への切り替えを行う問題解決型の演習を行っている。授業の最後に「本日の振り返り」として講義内容や要望を200字以内で記載・提出をさせ、授業の改善点をに努めている。

### 2) 自己点検・評価

スライド中心の講義はわかりやすいという評価の反面、単調になりこともあり、双方向性の講義に努める必要がある。

### 3) 改善方策

スライドは文字だけではなく、動画を取り入れるなど、学生が興味を持つよう、教育方法の改善に努めます。

## III 成績評価

### 1) 成績評価の現状説明

動画を視聴後、その内容に即した質問などの筆記試験にて評価し、65点以上を合格としている。

### 2) 自己点検・評価

体調不良などにより、欠席している学生にはWebによる提出を行ない、全員合格となった。出席した学生は元より、欠席した学生にも不利益が生じることもなかった。

### 3) 改善方策

# 2023年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	基礎歯学概論 I	第 1 学年
科目責任者（記載者）	安部 仁晴	

調査実施年月：2024年 6 月

## I 到達目標

### 1) 科目の到達目標に対する現状説明

一般目標を『病態を解析するための基礎となる第2学年時の履修科目である専門基礎科目を中心に、その知識を習得する。』として、各科目における最重要項目に焦点をあて、到達目標を設定し、基本的な知識の習得を心がけた。口腔解剖学、口腔組織学、口腔生理学および口腔感染免疫学の各分野より、講義内容に沿った到達目標を設定し、複数の教員で分担して講義を行った。

### 2) 自己点検・評価

次年度に履修する教科で構成したが、重要項目を解りやすく説明することで、一定の知識を習得し、次年度以降の基礎をつくることができた。また、歯科医療との関連性や国家試験の問題例を提示することで、学生の授業評価にもあるように『知的好奇心が刺激されたり、興味が高まった』『重要項目や特殊性、必要性を理解できた』の項目が93～96%の高評価につながったものとする。

### 3) 改善方策

集計項目のすべてで平均を上回っており、到達目標と講義内容は、次年度も概ね変更する点はないと考える。しかし、科目間で達成度に差がみられるため、1コマで講義する内容、重要事項を量的に限定する必要性があり、具体的には1コマで選択肢問題で5問作成できる量とすることを各担当者に周知徹底する。

## II 教育方法

### 1) 教育方法の現状説明

口腔解剖学、口腔組織学、口腔生理学および口腔感染免疫学の各分野、各担当者により教育方法は異なる。講義内容のプリントを作成、スライドまたは板書による重要事項の解説、問題演習と多岐にわたっていた。

### 2) 自己点検・評価

教育方法を単一化しなかったことで、各担当者により様々なバリエーションが生まれ、学生の好奇心を刺激し、歯科医学に興味を持たせることができていると考える。教本を指定していないため予習する手段として、授業資料の事前配布や授業資料提示システムに事前に講義プリント等の資料をアップロードしていただくよう担当者に進言した結果、以前のように『予習を行わない』との意見は減少してきた。

### 3) 改善方策

概ね良好に教育されていると考えるが、予習のための手段として、事前に講義プリント等の資料をアップロードしていただくよう担当者に進言する。

## III 成績評価

### 1) 成績評価の現状説明

成績評価は、前後期の定期試験のみで評価した。

### 2) 自己点検・評価

定期試験と追再試験で、ほぼ全ての学生は合格基準に達していた。しかし、基準に達しなかった学生も5名いた。

### 3) 改善方策

定期試験と追再試験で、多くの学生は合格基準に達していたため、評価方法を変更する必要性はないと考える。しかし、追再試験を実施する前に、フィードバックする時間を設け、習熟度を向上させたい。

# 2023年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	臨床心理学	第1学年
科目責任者（記載者）	佐藤 歩	

調査実施年月：2024年6月

## I 到達目標

### 1) 科目の到達目標に対する現状説明

歯科治療を求める患者には、精神疾患や神経発達症といった患者も多数来院するため、各疾患について正しい知識を身に付ける必要がある。さらに患者に思いやりを持った言動を心がけると共に、患者を尊重することの重要性を理解しなければならない。上記内容を踏まえ到達目標を作成し、授業を構成している。

### 2) 自己点検・評価

学生評価では、授業はシラバスに沿って進行したか、について全体の7%（2名）の学生が“そうは思わない・どちらかと言えばそうは思わない”、と評価している。授業内容が1時間のうちに終わらなかったことが原因であると推測する。

### 3) 改善方策

精神疾患等の診断基準や表記が時代と共に変更されつつある。変更されたものはすぐに学生に伝えることが教員の役目の1つであるとする。パニック障害がパニック症に表記が変更された背景の1つに、患者さん自身や保護者が不快にならない伝え方（患者に対する思いやりや尊重することの重要性につながる）が大切であることを、決められた1時間の中で伝えられるように時間配分に気を付けたい。

## II 教育方法

### 1) 教育方法の現状説明

各到達目標を達成するために、参考書の使用だけでなく、科目担当者が作成したレジュメ・資料を配布している。特にレジュメは穴埋め式になっており、学生にとって何が重要なワードなのか理解できるように工夫している。また、その目標一つ一つが歯科医師国家試験や医療とどう繋がりがあのかについても毎時間説明してから、授業を開始している。

### 2) 自己点検・評価

教育方法について概ね達成したと考えている。学生の授業評価では、教員での重要項目や特殊性、必要性を理解できましたか、の質問に対し9割の学生がそう思う・どちらかと言えばそう思うと回答した。また、自由記載においても「国試に問われやすい重要事項が説明している」、「レジュメに資料があり分かりやすい」といった回答があった。

### 3) 改善方策

予習・復習をしていない学生が一定数いることが問題点である。学生自身が教本等を使用し、各授業のポイントを調べる・復習するようなレポートを求めるようにしたい。また、質問できないことがあったと感じている学生も一定数いることから、積極的に科目担当から声をかけていきたい。

## III 成績評価

### 1) 成績評価の現状説明

定期試験で65点以上の者を合格としている。試験内容は、到達目標レベルに達しているかどうかを確認するため、記述・選択式で作成している。試験前に、①成績評価について具体的に学生に説明②練習問題を実施、テスト内容や出題範囲を理解できるように工夫している。不合格者に対しては、再テスト実施前に個別に声をかけ理解できないところがないように工夫している。

### 2) 自己点検・評価

成績評価においては誤解のないように、具体例を交えながら数回説明を行った。結果、学生の授業評価において、自由記載欄等に成績評価についての記載は全くなかった。今後も、細心の注意を払い、誤解がないように丁寧に説明する機会を作っていきたい。

### 3) 改善方策

成績が振るわない学生、留年生、科目担当に不信感を抱いているような態度をとる学生については特に注意し、他の学生以上に科目担当から積極的に声をかけて、成績評価について誤解がないようにしていきたい。

# 2023年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	医療人間学 I	第 学年
科目責任者（記載者）	中川 敏浩	

調査実施年月：2024年6月

## I 到達目標

### 1) 科目の到達目標に対する現状説明

一般目標である『基本的なコミュニケーションや日常習慣の重要性を認識する態度、知識および技能を修得する』ことを最重要として、複数の教員で分担し行った。

### 2) 自己点検・評価

講義毎に重要項目についての留意させながら、一般的コミュニケーションのみならず、医療現場との関連させていけるよう、事例を交えまたシュミレーショナルな実技も含め行った。当初は全体の前での発言、発表にはとまどうような場面もみられたが、進めるにつれて学生の意識も高まり、授業評価アンケートでは高い満足度が示された。

### 3) 改善方策

コミュニケーションを育成してゆくとのグループセッションや自己表現パフォーマンスを高めることなどでは苦手あるいは不慣れな学生も見受けられたが、医療人間学は1年生から3年生までの継続科目でもあり、性急にではなく長い目で、「育てる」という意識で接してゆきたい。

## II 教育方法

### 1) 教育方法の現状説明

講義のみでなく、挨拶から始まり、自己表現、対人対応状況などをビデオ撮影して客観的にも自覚・向上をめざす。将来の患者対応を見据え、要点をまとめ伝える力、傾聴能力を高め相手の主張、ポイントをつかむことができるよう模擬会話なども行っている。

### 2) 自己点検・評価

学生からの授業アンケートからは高い満足度が得られたと評価された。  
コミュニケーションということに主眼をおく本科目の特殊性から、一部、学生においても積極的な者、消極的な者と温度差がみられた。

### 3) 改善方策

全体に向けた講義のほかに学生個人個人とより深く接することで人間性を豊かに育てるようにしたい。

## III 成績評価

### 1) 成績評価の現状説明

筆記試験  
自己表現のビデオ撮影

### 2) 自己点検・評価

ほぼ全ての学生は合格基準に達していた。

### 3) 改善方策

コミュニケーション能力には個人差が大きく、不十分と思われる学生に対しては個々に時間外も利用し対応してゆきたい。

# 2023年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	情報リテラシーⅡ	第2学年
科目責任者（記載者）	宇佐美 晶信	

調査実施年月：2024年6月

## I 到達目標

### 1) 科目の到達目標に対する現状説明

歯科基礎医学の知識をより深く習得するために、コンピュータを用いて問題作成し、相互にブラッシュアップを行うとともに、教員からの問題解説をおこなっている。

### 2) 自己点検・評価

学生による授業評価アンケートでほとんどの項目で良い結果が得られている。

### 3) 改善方策

予習の時間を増やすためにも、教員からの問題解説の講義資料を事前にポータルサイトに提示するようにしたい。

## II 教育方法

### 1) 教育方法の現状説明

問題作成、ブラッシュアップ、問題解説の3回を1つのセッションとしている。「問題作成」は教員より出された課題についてグループごとに学生個人で問題を作成し、「ブラッシュアップ」は他グループの作成した問題について行っている。「問題解説」として作成した問題に対して最終的に教員からの解説を行っている。

### 2) 自己点検・評価

各セッションにおける指導は担当教員にお任せしてあるので、セッションごとに微妙な差異が生じている。「配布資料を前日ではなく可能な限り早くユニパにアップして欲しい」とのコメントがあった。

### 3) 改善方策

初回講義時に、学生にはセッションの概要についてしっかり説明していきたい。  
科目責任者には講義担当時期が近付くとリマインドメールで課題準備などをしてもらっているが、講義資料の提示を可能な限り早くするように依頼したい。

## III 成績評価

### 1) 成績評価の現状説明

3コマごとに小テストをおこない合計が65点以上を合格としている。

### 2) 自己点検・評価

学生のブラッシュアップ問題に対する教員からの解説を行った後にテストをおこなっているので理解を深められていると考えるので現状の評価を続けていきたい。

### 3) 改善方策

答えだけを覚えるような小テストではなく、学習した範囲内で自力で答えを導き出して解答するような小テストを実施していきたい。テストを行う回の講義を欠席すると20%の評価がなくなる点を早い時期から周知したい。



# 2023年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	英語Ⅱ	第2学年
科目責任者（記載者）	長峯 英樹	

調査実施年月：2024年6月

## I 到達目標

### 1) 科目の到達目標に対する現状説明

本科目の到達目標は、①歯科医療分野の英語表現への慣れ、②基礎文法の復習、③英文を「訳せる」だけで満足せず、知識を英語で「吸収できる」スキルの習得、④英語によるグループ・プレゼンテーションの経験、⑤自分の意見を英語と日本語の両言語で論理的に発信するスキルの習得、の5つである。このなかで、④と⑤に関する目標については、2022年度も新型コロナ感染防止の観点から割愛した。

### 2) 自己点検・評価

「読む」「聞く」「話す」「書く」といった4スキルのなかでも、しっかり「読む」ために語彙力と読解力の強化を強く望む学生が多く、そうした学生に対してはかなり貢献できたのではないかと思う。一方で、英語学習に対するニーズも意欲も多様であるため、学習方法も含め、学生からの質問に対し柔軟にアドバイスすることを心掛けた。

### 3) 改善方策

大多数の学生が、国家試験を意識した英語授業を強く希望しているため、歯科医療分野の語彙力や読解力強化に特化することが有効であると感じた。また、将来的に有用かどうかについても強く意識していることから、今後も、WHOやメイヨークリニックといった海外医療機関のHPなども教材として積極的に講義に取り入れていく必要がある。

## II 教育方法

### 1) 教育方法の現状説明

①基礎文法力・読解力の向上を図りつつ、専門用語や頻出語彙表現の習得、②各語彙の接頭辞や接尾辞を意識した語彙力強化、③英語でのグループプレゼンテーションの体験、の教育方法を示した。①と②は「解説は講義で、予習や復習は自宅で」という方法ではなく、授業内に覚える方針に変更。具体的には、講義60分、自主学習100分、確認テスト20分の時間配分とパターンを実施した。③は新型コロナ感染防止の観点から割愛。

### 2) 自己点検・評価

文法・語彙、そして読解の基礎については、範囲を限定し、重要ポイントを明示したため、大部分の学生に集中的かつ効率的に学んでもらうことができた。その一方、語彙力強化には「書いて覚える」プロセスが不可欠だが、強い拒否感を示す学生がいた。また、「(確認テストの)合格基準が高すぎる」といったコメントがあったが、基準を上げたテストの場合、同一問題を1週間前には配布し、テスト直前にも復習時間を確保していた。

### 3) 改善方策

国家試験合格が第一の目標である学生にとって、英語に貴重な自宅学習の時間を割くのは困難である。また、学習方法がわからないといった学生も少なくない。そのため、一方通行的な講義ではなく、授業内に主体的に学ぶ時間を確保し、必要に応じて学習方法を提案し、重要表現を確実に覚えてもらう方法を今後も模索する。具体的には、講義60分、自主学習100分、確認テスト20分の時間配分で授業内に覚えてもらう。

## III 成績評価

### 1) 成績評価の現状説明

筆記試験（100%）により評価し、65点以上で合格とした。

### 2) 自己点検・評価

確認テストや定期試験の範囲と出題意図をはっきりと明示したことから、大多数の学生は取り組みやすかったのではないと思う。一方、確認テストの基準点を下回った学生への対処方法としては、好むと好まざるにかかわらず、「書いて覚える」ことの重要性を理解し、実践してもらう工夫が必要である。方法論よりも、辛抱強く継続的に行う覚悟が必要と考えている。

### 3) 改善方策

基準点を下回った学生に対しては、定期試験を除き、再試を行うよりも、覚える必要がある重要語彙表現を語尾や接頭辞の意味を強く意識しながら、何度も書いて覚えてもらうことを継続するしかないと考えている。

# 2023年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	日本語学Ⅱ	第2学年
科目責任者（記載者）	本多 真史	

調査実施年月：2024年6月

## I 到達目標

### 1) 科目の到達目標に対する現状説明

歯科医師国家試験問題を解く際に必要となる読解力の基盤を確立するため、問題を正確に読み、内容をきちんと理解し、自らの考えを整理し、正しく答えられる力を修得することを目標としている。授業内容は、これに沿う形で行われている。

### 2) 自己点検・評価

目標と授業内容は合致している。また、受講生全員（休学者を除く）が合格したことから、科目の目標は達成されたと考える。

### 3) 改善方策

到達目標と授業内容は一致しており、変更の必要はないと考える。

## II 教育方法

### 1) 教育方法の現状説明

講義では、資料（A4冊子6枚程度を毎回配布）をもとに「参加型・実践形式」で展開した。受講者が問題文を読み（インプット）、理解し、思考して（プロセッシング）、まとめる（アウトプット）という一連の行為が円滑に行うことができるようになるための機会を設けた。受講者が問題を解いた後、教員がそれについて解説を行った。また、パワーポイントで作成した資料を毎回ユニバにあげ、復習しやすい環境を整えた。

### 2) 自己点検・評価

授業評価アンケートでは、「好奇心が刺激されたり、興味が高まったりしたか」の評価が低かった。日本語は外国語のように「使えない」と実感されることはないためか、「この科目は必要ない」との声も聞かれる。その認識を打ち壊すことができなかったことに加え、学生の知識欲に応えられなかったと思われる。

### 3) 改善方策

臨床の現場で必要とされる「想起＞解釈＞問題解決」というプロセスは、歯科医師国家試験問題を解く際に必要な読解力と通ずるものがあるなど、受講生の関心により近い内容を盛り込むようにする。

## III 成績評価

### 1) 成績評価の現状説明

形成的評価の結果のみで評価した。

### 2) 自己点検・評価

本講義の合格率は100%であり、成績評価に関して問題ないとする。

### 3) 改善方策

成績評価の改善は要しない。

# 2023年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	物理学	第2学年
科目責任者（記載者）	菊地 尚志	

調査実施年月：2024年6月

## I 到達目標

### 1) 科目の到達目標に対する現状説明

歯科医学の知識の習得においてもそうであるが、一般の自然科学に基づく学問分野では、物質が原子でできていることとそれらの物理的な性質を知っていることで確実な理解が進むことは間違いない。材料学での弾性や放射線学でのX線は、より具体的な原子の構造を知ることではっきりと分かることになる。記憶にだけ頼った学習ではなく、このような思考を理解に基づく学習を目指している。

### 2) 自己点検・評価

以前は「基礎物理学」を担当していた。数年前より「物理学」を担当してより歯科医学に直結した内容に講義を改訂できている。

### 3) 改善方策

基礎や臨床の専門科目の授業を参考にしながらより学生にとっても有効な歯科医学に結びつく物理学をめざす。

## II 教育方法

### 1) 教育方法の現状説明

今の歯科医療者にとっては説明に基づく患者の同意が治療を始める上での必須の条件になっている。そのためには学生自身が問題文を理解する以上に自分で文章を作れる能力が必要となっている。板書を中心にした、学生が自分の手を動かすことで文章を書く能力も養う学習ができるようにしている。

### 2) 自己点検・評価

現状でいいと思っている。

### 3) 改善方策

とは言っても現在はパソコンの普及に伴って、そのソフトを使った授業を行う教員が大部分だ。その点を基礎や臨床の専門科目の授業を参考にしながらより学生にとっても有効な歯科医学に結びつく授業のための方策を探るつもりでいる。

## III 成績評価

### 1) 成績評価の現状説明

前期終了科目であり、前期の定期試験で合否を決める。

### 2) 自己点検・評価

授業の初めに到達目標に沿った具体的な試験問題例のプリントを配っている。その基づいて毎回の試験問題を作っているため、試験についてなんらかの不満を述べる学生の意見は筋違いと考えている。

### 3) 改善方策

歯科大学で物理学の授業であることをしっかり自覚して改善に努める。

# 2023年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	化学	第2学年
科目責任者（記載者）	阿部 匡聡	

調査実施年月：2024年6月

## I 到達目標

### 1) 科目の到達目標に対する現状説明

基本的な有機化合物の構造・性質・反応についての知識・概念を習得するため、①化合物の官能基による分類と性質・反応 ②異性体 ③誘起効果と共鳴効果 ④置換反応、付加反応、脱離反応、転位反応 ⑤反応進行過程での求核剤、求電子剤の働き ⑥芳香族化合物の性質・反応と脂肪族化合物との違い、を説明できることを到達目標としている。

### 2) 自己点検・評価

目標としては、適切であると考えている。

### 3) 改善方策

修正・変更は特にしない。

## II 教育方法

### 1) 教育方法の現状説明

講義93%、演習7%で、資料として、教科書と、教科書の内容を補充するためのプリントを用いた。適宜、レポート提出を課した。

### 2) 自己点検・評価

授業内容の質を維持しつつ、より平易な解説を行うよう努めてきた。適宜課した、レポート提出、問題演習は、授業内容の理解向上、復習、問題への対応力強化に有効であった。これに関連し授業評価では、図と記述の組み合わせが良く板書が見やすくレイアウトが良い、課題プリントがあり理解しやすい、という記載があった。

### 3) 改善方策

口頭試問による双方向的要素の導入機会を一層増やし、一定の緊張感と、能動的に考える姿勢を持たせる。授業でとったノートを有効に活用して、復習するよう、意識づけをする。

## III 成績評価

### 1) 成績評価の現状説明

中間試験（45%）と定期試験（55%）により総括的評価を行った。レポートにより形成的評価を行った。

### 2) 自己点検・評価

評価法としては、適切であると考えている。

### 3) 改善方策

中間試験と定期試験では、選択式問題と記述式問題の配分比が、最適なものとなるよう、配慮する。

# 2023年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	生物学	第2学年
科目責任者（記載者）	前田 豊信	

調査実施年月：2024年6月

## I 到達目標

### 1) 科目の到達目標に対する現状説明

歯科医療を行う上で必要不可欠な生物学の知識の修得と、遺伝子工学の現状を理解することで生命倫理について考えることを目標としている。そのために、①細胞の構造と機能、②代謝、③細胞間情報伝達、④中心命題と例外などを到達目標としている。

### 2) 自己点検・評価

本科目が歯学部2年生のカリキュラムに編成されていることをふまえ、歯学部の生命科学を学習していく上で、特に必要になる生物学の知識について、重点的に講義を行っている。しかしながら、昨年度からの課題である「基礎的知識定着の部分が欠如している学生への対応」が十分にこなせていない点が問題である。

### 3) 改善方策

さらなる講義資料のブラッシュアップを行う事で、上記課題に努めたい。

## II 教育方法

### 1) 教育方法の現状説明

配付資料と、一部web資料を中心に講義を行っている。重要な項目に対しては、知識の定着と理解を深めるために問題演習を用意している。

### 2) 自己点検・評価

範囲が広く、内容が難しくなる傾向にある。一部の生徒からは、web資料について好評を得ているが、十分に浸透していない。

### 3) 改善方策

web資料の充実を図る。

## III 成績評価

### 1) 成績評価の現状説明

客観形式問題の定期試験のみを実施して、65点以上を合格と判断している。その結果、本試験もしくは追再試験を受験をしたすべての学生を65点以上と評価（単位付与）した。平均は86点（うち満点3名）であった。

### 2) 自己点検・評価

六年間一貫教育の中の教養科目として位置づけされる当該科目を考えると、評価方法は現状と照らし合わせると妥当であるとする。

### 3) 改善方策

# 2023年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	基礎歯学概論Ⅱ	第2学年
科目責任者（記載者）	遊佐 淳子	

調査実施年月：2024年6月

## I 到達目標

### 1) 科目の到達目標に対する現状説明

2年時の後期から3年時の履修科目となる専門基礎科目（口腔衛生学、歯科薬理学、口腔病理学、口腔生化学、生体材料・歯科材料学）を中心に、履修前の予備知識として知っておくべき概論や要点について講義している。

### 2) 自己点検・評価

歯科医師として身につけなければならない知識を習得する上で、専門基礎科目は特に重要である。そのため履修前に予備知識として講義することは妥当であると考えます。

### 3) 改善方策

基礎歯学概論の必要性を明確にする。また、各科目講義担当者が概論であることを認識し予備知識や要点を講義する。

## II 教育方法

### 1) 教育方法の現状説明

講義担当者により異なるが、講義主体でスライド投影、プリント、板書により適宜進めている。

### 2) 自己点検・評価

授業評価で、たくさんの内容を理解するために授業プリントがあったので良かったとの意見があり、プリント配布は有用であった。

### 3) 改善方策

複数の科目担当の講義であるため、講義スタイルが様々であるが、学生にわかりやすいスライド作成やプリント配布を再認識する。

## III 成績評価

### 1) 成績評価の現状説明

定期試験（100％）で評価し、65点以上を合格とする。試験問題は多肢選択式である。

### 2) 自己点検・評価

試験問題の出題範囲は講義した内容であり、定期試験で65点以上で合格するというのは妥当であると考えます。

### 3) 改善方策

出題範囲は各科目の授業内容であることを学生に周知する。

# 2023年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	口腔解剖学	第2学年
科目責任者（記載者）	宇佐美 晶信	

調査実施年月：2024年6月

## I 到達目標

### 1) 科目の到達目標に対する現状説明

ヒトの歯の形態、歯列咬合および口腔周囲の解剖学的構造について知識を獲得するための講義をおこなっている。

### 2) 自己点検・評価

学生による授業評価アンケートでほとんどの項目で良い結果が得られている。

### 3) 改善方策

予習・復習の環境は整えているので、活用する学生の比率を上げていきたい。

## II 教育方法

### 1) 教育方法の現状説明

口腔解剖学分野作成のプリントに従い講義をおこなっている。また毎回の授業前に小テストをおこない前回の範囲の知識の定着を確認している。  
予習用の資料（穴埋めの解答）と復習用の資料（確認事項）をポータルサイトに入れている。  
確認事項については復習の習慣獲得のためにも翌日までの提出に関しては添削と模範解答のフィードバックを行っている。

### 2) 自己点検・評価

科目責任者（宇佐美）の説教が長いとのコピーペーストによる長文が、担当しているすべての科目で有った。  
本学のC B Tの現状は第2学年から始まっていると思い注意喚起をしていたが、反省して今後の対応に反映させたい。

### 3) 改善方策

質問9の回答については、オフィスアワーの活用やメールでの質問受付をアナウンスしていきたい。

## III 成績評価

### 1) 成績評価の現状説明

前期後期の各定期試験の平均が65点を超えたものを合格としている。小テスト分は各期の10%として評価している。

### 2) 自己点検・評価

毎週の小テストを評価の中に入れてしているので、学習習慣の修得にも効果があると考えます。

### 3) 改善方策

小テストの実施を継続してにより、低学年のうちに学習習慣を獲得するようにしていきたい。

# 2023年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	口腔解剖学実習	第2学年
科目責任者（記載者）	宇佐美 晶信	

調査実施年月：2024年6月

## I 到達目標

### 1) 科目の到達目標に対する現状説明

歯や骨の形態を理解するために、前半は歯の形態を2次的に理解するためのスケッチと3次的に把握するための石膏彫刻をおこない、後半は頭蓋骨と体幹、四肢を含む全身の骨学実習をおこなっている。

### 2) 自己点検・評価

前期唯一の実習であるので、他との比較もないためコメントが少ないと考える。  
教材として頭蓋骨模型を購入してもらっているが、口腔解剖学実習で「資料が見やすかった」との回答があったので実物の骨の観察は有意義であると考えられる

### 3) 改善方策

解剖学（骨学）の座学と口腔解剖学実習後半の骨学実習に関して、座学の進捗状況との連携を注意していきたい。

## II 教育方法

### 1) 教育方法の現状説明

歯の形態を理解するために前半7回にスケッチおよび石膏彫刻をおこなっている。骨学実習では骨標本の各部位の確認をおこなっている。

### 2) 自己点検・評価

ほぼすべての項目で、評価点は高い結果であった。

### 3) 改善方策

専門科目最初の実習として、苦手意識などを生じさせないようにしたい。

## III 成績評価

### 1) 成績評価の現状説明

歯の解剖における彫刻と骨学実習における該当箇所の「口腔顎顔面解剖ノート」の提出物と態度点で評価した。

### 2) 自己点検・評価

評価基準についての説明をおこなっているため、成績評価に関して否定的な意見はみられなかった。

### 3) 改善方策

提出物の管理が苦手な学生に対する配慮を検討していきたい。



# 2023年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	解剖学	第2学年
科目責任者（記載者）	宇佐美 晶信	

調査実施年月：2024年6月

## I 到達目標

### 1) 科目の到達目標に対する現状説明

人体の正常な形態と構造に関する知識を講義している。

### 2) 自己点検・評価

学生による授業評価アンケートのほぼすべての項目で高い結果が得られている。

### 3) 改善方策

時代の変化に合わせて、講義の内容や形式を適応していくようにしたい。

## II 教育方法

### 1) 教育方法の現状説明

口腔解剖学分野作成のプリントに従い講義をおこなっている。また、毎回の授業前に小テストをおこない前回範囲の知識の定着を確認している。  
予習用の資料（穴埋めの解答）と復習用の資料（確認事項）をポータルサイトに入れている。  
確認事項については復習の習慣獲得のためにも翌日までの提出に関しては添削と模範解答のフィードバックを行っている。

### 2) 自己点検・評価

科目責任者（宇佐美）の説教が長いとのコピーペーストによる長文が、担当しているすべての科目で有った。  
本学のC B Tの現状は第2学年から始まっていると思い注意喚起をしていたが、反省して今後の対応に反映させたい。

### 3) 改善方策

質問9の回答については、オフィスアワーの活用やメールでの質問受付をアナウンスしていきたい。

## III 成績評価

### 1) 成績評価の現状説明

前期、後期の定期試験の平均で65点を超えたものを合格としている。小テスト分は各期の定期試験結果に加点している。

### 2) 自己点検・評価

従来、小テストで勉強する習慣がついたとのコメントがあるが、今年度は特に無かった。しかし、復習すべきことをため込まないようにするためにも小テストは継続していきたい。

### 3) 改善方策

現在の評価方法を継続していきたい。  
評価方法については、シラバスに書いてるが講義中にも繰り返しアナウンスしていくようにしたい。

# 2023年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	解剖学実習	第2学年
科目責任者（記載者）	宇佐美 晶信	

調査実施年月：2024年6月

## I 到達目標

### 1) 科目の到達目標に対する現状説明

人体を用いた解剖実習により解剖学の講義で学んだ知識を深めるだけでなく「医の倫理」や「死者への尊厳」を修得めざしている。

### 2) 自己点検・評価

学生アンケートでは全項目で平均よりも高い結果が得られている。良かった点で「説明が分かり易かった」とのコメントがあった。

### 3) 改善方策

解剖学の知識だけでなく、プロフェッショナリズムについても理解してもらえる実習を今後も維持していく。

## II 教育方法

### 1) 教育方法の現状説明

特に頭頸部を中心とした人体解剖実習をおこなっている。

### 2) 自己点検・評価

改善して欲しい点として、「刃物の使い方をしっかり指導して欲しい」という記述がみられた。

### 3) 改善方策

本学も様々な学生がおり、それぞれの特性に対する指導についてこれまでも考えてきたが、模範解答は無いのでこれからも考え続けていきたい。  
刃物の扱いについては実習説明時におこなっているが、繰り返していくこととする。

## III 成績評価

### 1) 成績評価の現状説明

各回の実習内容を次回の小テストを80%、各班が実習期間中に1回行う発表と態度点を各10%として評価を行い、総計が65点以上のものを合格としている

### 2) 自己点検・評価

否定的なコメントはみられなかった。

### 3) 改善方策

現状維持を前提として、必要な改良点が見いだされた場合には対応していく。

# 2023年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	口腔組織学	第2学年
科目責任者（記載者）	安部 仁晴	

調査実施年月：2024年6月

## I 到達目標

### 1) 科目の到達目標に対する現状説明

一般目標を『疾病を治療対象とした基礎知識を得るために、細胞と組織、人体諸器官、さらに歯と歯周組織をはじめ口腔諸器官の正常構造と微細構造を機能と結びつけ、それらの発生過程、加齢変化を理解する。』として、4つの到達目標を設定し、基本的な知識の習得と他の基礎系科目や臨床系科目と結びつけることが出来るような思考の修得を心がけ、複数の教員で分担して講義を行った。

### 2) 自己点検・評価

集計項目の多くは肯定的な意見であり、否定的な意見は少なかったことから、到達目標と講義内容は次年度も概ね変更する点はないと考える。しかし、成績評価や総合試験の結果から、到達目標に合致した講義内容であるか考える必要がある。

### 3) 改善方策

集計項目の結果から、到達目標と講義内容は、次年度も概ね変更する点はないと考える。しかし、講義担当者間で、コアカリや国家試験基準に沿った到達目標の内容であるか、到達目標に合致した講義内容となっているか、話し合い検証する。

## II 教育方法

### 1) 教育方法の現状説明

教員によって細かな教育法は異なるが、基本的に配布資料（講義プリント）の作成、予習と復習のために授業資料提示システムを使い、資料をアップロードすることを講義担当者に統一していただいた。また、教育内容では、形態学を理解しやすくするために、写真や模式図を数多く取り入れて講義するよう心がけた。

### 2) 自己点検・評価

集計項目の多くは肯定的な意見であり、否定的な意見は少なく、『わかりやすい』との意見が多かったことから、教育方法は、次年度も概ね変更する点はないと考える。しかし、自由記載欄にある講義者の態度については、改善したい。

### 3) 改善方策

昨年度まで予習する学生の割合が少なかった点は、講義資料を授業資料提示システムに事前にアップロードしてある事を学生に周知したため、今年度は減少した。また、自由記載欄にある講義者の態度については、改善する。

## III 成績評価

### 1) 成績評価の現状説明

講義時間数に応じて、前期中間試験、前期定期試験、後期中間試験、後期定期試験の4回の記述試験を設定した。各試験では、不合格者と希望者に対して、再試験を1回行った。この4回の試験の平均をもって成績評価とした。

### 2) 自己点検・評価

上記の成績評価方法で、多くの学生が合格基準に達しており、平均点も78点であった。しかし、合格基準に達しなかった学生も約10%（4名）いた。この学生に対する対処として、科目選択ゼミの時間を使い、試験のフィードバックを行った。

### 3) 改善方策

上記の成績評価方法で、多くの学生が合格基準に達しており、平均点も高かったことから、次年度も変更する必要はないと考える。しかし、合格基準に達しなかった学生に向けて、試験のフィードバックのみならず、再度、重要事項を説明する機会を設ける。

# 2023年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	口腔組織学実習	第2学年
科目責任者（記載者）	安部 仁晴	

調査実施年月：2024年6月

## I 到達目標

### 1) 科目の到達目標に対する現状説明

一般目標を『人体と口腔諸器官における特徴と機能を理解するために、光学顕微鏡を用いて、細胞、組織の正常構造、歯と歯周組織をはじめとする口腔諸器官の正常微細構造、それらの発生過程の知識を修得する。』として、6つの到達目標を設定し、基本的な知識の習得と他の基礎系科目や臨床系科目と結びつけることが出来るような思考の修得を心がけ、複数の教員で分担して実習を行った。

### 2) 自己点検・評価

集計項目の多くは肯定的な意見であり、否定的な意見は少なかったことから、到達目標と実習内容は、次年度も概ね変更する点はないと考える。しかし、成績評価や総合試験の結果から、到達目標に合致した実習内容であるか考える必要がある。

### 3) 改善方策

集計項目の結果から、到達目標と実習内容は次年度も概ね変更する点はないと考える。しかし、担当インストラクター間で、コアカリや国家試験基準に沿った到達目標の内容であるか、到達目標に合致した講義内容となっているか、話し合い検証する。

## II 教育方法

### 1) 教育方法の現状説明

実習開始時に、その日の課題の説明（標本の顕鏡ポイント、講義内容の復習と実習内容の関連性等）を行い、学生全員が当日の課題に取り組みやすくなるようにした。また、学生を少人数のグループに分け、各グループに担当インストラクターを配置することで、学生一人ひとりにきめ細やかな指導が出来るようにした。

### 2) 自己点検・評価

集計項目の多くは肯定的な意見であり、否定的な意見は少なく、『わかりやすかった』との意見も多く、教育方法は、次年度も概ね変更する点はないと考える。

### 3) 改善方策

特に改善する点はないと考えるが、自由記載欄にあるインストラクターの態度については、改善する。

## III 成績評価

### 1) 成績評価の現状説明

実習内容から一般組織学と口腔組織学に分け、記述式の試験を行った。各試験では、不合格者と希望者に対して、再試験を1回行った。この2回の試験の平均点（80%）と実習課題の終了状況をリクワイアメント票（20%）とし、合わせて成績評価とした。

### 2) 自己点検・評価

上記の成績評価方法で、多くの学生が合格基準に達しており、平均点も88点であった。しかし、合格基準に達しなかった学生も4%（2名）いた。この学生に対する対処として、科目選択ゼミの時間を使い、試験のフィードバックを行った。

### 3) 改善方策

上記の成績評価方法で、多くの学生が合格基準に達しており、平均点も高かったことから、次年度も変更する必要はないと考える。しかし、合格基準に達しなかった学生に向けて、試験のフィードバックのみならず、再度、重要事項を説明する機会を設ける。

# 2023年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	口腔生理学 I	第 2 学年
科目責任者（記載者）	川合 宏仁	

調査実施年月：2024年 6 月

## I 到達目標

### 1) 科目の到達目標に対する現状説明

1) 生命現象を営む生態の機構を説明できる、2) 各器官の協調活動を説明できる、3) 歯科疾患の病態生理を説明できるという到達目標をたて、定期試験や中間試験で到達度をはかっている。その結果、及第点に達した学生の多くは、生体機能とそれを営む各器官の協調、さらに歯科疾患に関係する病態生理を理解し、ある程度説明できるようになった。

### 2) 自己点検・評価

重要事項を説明できるようにするという到達目標では、与えられた選択肢の中から選んだり、ヒントが与えられれば何とか答えられる（説明できる）という学生が大半であった。講義では基本事項の修得に努めさせているので、授業を聞いている学生はある程度の学力の向上が認められる。

### 3) 改善方策

基本的事項をさらに絞って重点的に学習させることでより深い内容理解につなげるようにする。毎週の課題を積み重ねることで、生理学の最終的な到達目標を達成できるように講義と課題をデザインしている。

## II 教育方法

### 1) 教育方法の現状説明

黒板への板書を基本とし、補助教材としてプリントを配布した。また、より効率的内容を理解させるため、双方向性で、講義中に質問を行った。講義ごとの復習課題では、各講義の到達目標について記述させ、次回の講義開始時に選択問題でチェックする。講義内容について、帰宅後に資料を見直し、ある程度理解できていることを確認させるための課題を出している。

### 2) 自己点検・評価

学生が集中して講義に入り、講義中も折に触れて講義に追いつけるよう工夫しているが、学生によっては不要と感じているかもしれない。また、学習した内容について忘れてしまう学生が多く、履修すべき内容が多いので、説明に重点を置きがちである。課題を出すことで、帰宅後に学習する目標ができていようである。しかし、課題の提出を強制していないため、課題を提出しない学生も多い。

### 3) 改善方策

講義の合間に問題演習で、学生との双方向性の関係を作り、学生の意識を高めることと、アウトプットの機会を増やすようにする。講義内容が多岐にわたり、多様な内容が詰め込まれているイメージを与えているようなので、「詰め込まれている」と感じさせないように努力する。

## III 成績評価

### 1) 成績評価の現状説明

前期定期試験、後期中間試験、後期定期試験の3回の試験の平均が65点以上を合格とする。3回の試験では、本試験で不合格となった学生を対象に、最高点65点の再試験を実施している。

### 2) 自己点検・評価

年間で3回の試験で、各試験の不合格者に再試験を課しているため、成績不良者への配慮としても十分と考える。また、前期は定期試験、後期は中間試験と定期試験を行い、その総合成績で合否を判定するが、中間試験を入れることで、1回毎の試験範囲が絞られるので、学生の負担はある程度減らすことができていると思う。

### 3) 改善方策

問題を解くために必要な思考や知識の要素を説明させ、それを試験に出題する。また、学習内容が高学年になっても記憶に残るように、実習で関連課題をこなしたり、イメージ図を描かせる課題の提出を行わせる工夫を行う。

# 2023年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	口腔生理学実習	第2学年
科目責任者（記載者）	川合 宏仁	

調査実施年月：2024年6月

## I 到達目標

### 1) 科目の到達目標に対する現状説明

生命現象を営む生体の機能について説明できるよう生物物理学的、細胞生物学的、組織学的、解剖学的知見を解説した。各器官の協調活動、歯科疾患の病態生理およびそのトピックスを説明できるように総合的に実習を行った。

### 2) 自己点検・評価

重要事項を説明できるようにするという到達目標に対し、与えられた選択肢の中から選んだり、ヒントが与えられれば何とか答えられる（説明できる）という学生が大半であった。ヒトを使った実験では、自分の体の中で神経や筋が実際に働いていることを実感させ、動物を使った実験では、実際の神経や筋を観察することで知識の定着を図っている。

### 3) 改善方策

実習を行って、座学の知識とその基本的事項を、体験しながら学習させることでより深い内容理解につなげるようにする。

## II 教育方法

### 1) 教育方法の現状説明

学生には方法など説明を一通りしてから実際の作業に入るようにしている。また、特に注意すべきことは作業の途中でも手を止めさせて説明している。

### 2) 自己点検・評価

実習と座学を行うことで、学習内容の定着がより強くなると思われる。一つので複実習室で、複数の実習単元が並行して行われているために、隣の座学の解説の声が大きくて学生の集中力を妨げることがあった。

### 3) 改善方策

端的に説明しても、説明すべき項目が多いため、説明にはある程度時間がかかり、注意力が散漫になる学生もいた。しかし、一度、自分なりのレポートを手書きにして出させ、自分の言葉で理解することが必要である。

## III 成績評価

### 1) 成績評価の現状説明

実技点40%、レポート点30%、知識点30%の合計で、65点以上で合格としている。

### 2) 自己点検・評価

各実習について、学生の熱意や努力の度合いが反映された評価であると思う。

### 3) 改善方策

現在のところ、特に問題ない。

# 2023年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	口腔生化学 I	第 2 学年
科目責任者（記載者）	加藤 靖正	

調査実施年月：2024年 6 月

## I 到達目標

### 1) 科目の到達目標に対する現状説明

生体を構成する成分や機能について、個々の理解と相互作用について理解する。疾患の成因についても理解を深める。下記項目について説明できるようになることを到達目標とする。

- ・生体を構成している主な物質の分子構造と機能について説明できる。
- ・遺伝情報の保存と発現
- ・代謝における酵素の働き
- ・糖代謝と脂肪酸代謝によるエネルギー産生機序
- ・糖新生性、脂質合成の機序
- ・代謝の破たんと疾病の成り立ち

### 2) 自己点検・評価

35%（2022年度は40.3%）の学生が予習しておらず、30%（2022年度は43.8%）の学生が復習していない結果となった。ただ、両方ともに改善されており、授業に対する姿勢が向上したように見受けられる。一方で知的好奇心については、38%が肯定的に評価していたが前年度は70.2%から大幅ダウンとなった。漫然と受講している学生が増加していることを反映しているかもしれない。

### 3) 改善方策

興味がなければ学習意欲は上がらないので、具体例を多用して知的好奇心の向上に努める。

## II 教育方法

### 1) 教育方法の現状説明

パワーポイント主体で練習問題を提示した教員 1 名と板書主体の教員 1 名で分担した。

### 2) 自己点検・評価

パワーポイント主体の講義は好評で、板書主体の講義については、板書量など面から批判的な意見が見られた。授業の熱意や工夫については78%肯定的であったのは評価される。一方、本試験での回答個数指定を守らない学生が、2022年度から突然20人を超え、2023年度も同様であった。延べの件数は、40件超である。分担者が練習問題の中から本試験に出題することを明言したことによる試験問題の丸覚えの弊害が出ている。

### 3) 改善方策

休み時間に質問対応で教室に残っているのだが、質問してくる学生はごくわずかである。また、本試験、追再試験の問題は、毎回持ち帰りなので学生が入手することは容易である。国家試験問題も入手可能である。それらを丸覚えでなく、有効活用するよう促すようにする。

## III 成績評価

### 1) 成績評価の現状説明

予め個別出題項目について学生に知らせている。五肢選択問題による本試験で65点以上を合格とした。

### 2) 自己点検・評価

正答率30%未満の問題については、正答した学生は採点対象とし、誤答した学生に対しては、総問題数に含まない措置を講じて採点をしている。学生には事前に告知済みである。

### 3) 改善方策

点数分布として80点以上を取得した学生数が20人弱維持されており、評価としては適切と考えている。特に問題点は見いだせないなので、今後も継続していく。

# 2023年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	口腔感染免疫学 I	第 2 学年
科目責任者（記載者）	玉井 利代子	

調査実施年月：2024年 6 月

## I 到達目標

### 1) 科目の到達目標に対する現状説明

口腔感染症及び全身感染症の原因となる微生物とその病原微生物に対する免疫応答に関する知識を身につける。すなわち、学生が 1) 微生物の種類とその特性を説明する、2) 病原微生物の病原性を説明する、3) 滅菌、消毒及び化学療法について説明する、4) 微生物感染に対するヒトの免疫応答を説明することが出来るようになることが到達目標である。

### 2) 自己点検・評価

口腔感染免疫学 I（第 2 学年）では、週 1 時間、30 週かけて口腔感染免疫学の半分の内容を教えている。口腔感染免疫学 II（第 3 学年、週 2 時間 15 週）と比較すると、余裕があるのか試験結果の平均点は高く、大部分の学生が到達している。臨床専門科目が始まらないうちに、基礎専門科目をある程度終わらせるのは良いことと思われる。

### 3) 改善方策

到達目標「4）微生物感染に対するヒトの免疫応答を説明する」は第 3 学年にも含まれるが、進級前に春休みがあるので、第 2 学年でも「抗体」のみならず、「補体」を教えるのも良いと考えられる。

## II 教育方法

### 1) 教育方法の現状説明

講義形式で教科書・配布プリントを使用して履修する。講義中に学習者に質問し、それに対する応答を求めて授業の理解度を確認する。

### 2) 自己点検・評価

・講義後の質問から、プリントの改善点が見える。・コロナ禍で講義中に学習者に質問することが困難であった。

### 3) 改善方策

講義後の質問がなくなるぐらい、分かりやすい授業およびプリント配布を行う。また、講義中に学習者に積極的に質問する。

## III 成績評価

### 1) 成績評価の現状説明

定期試験（100点満点）で評価する。65点以上を合格とする。試験問題は記述式と多肢選択方式が含まれる。定期試験後に学生全員に模範解答を配布し、学生から意見があれば対応する。

### 2) 自己点検・評価

定期試験後に学生全員に模範解答を配布するのは、65点未満で再試験を受験しなくてはならない学生にとっては有効である。上記の通り、試験問題は記述式と多肢選択方式が含まれるので、多肢選択方式が苦手でも記述式は出来る学生がいることが分かる。

### 3) 改善方策

知識の定着には時間がかかるので前期定期試験の再試験は行わず、後期定期試験で挽回できる方法をとっているが、前期定期試験の結果平均が低すぎる場合は見直す。



# 2023年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	歯科薬理学 I	第2学年
科目責任者（記載者）	鈴木 礼子	

調査実施年月：2024年6月

## I 到達目標

### 1) 科目の到達目標に対する現状説明

歯科薬理学を学修する上で土台となる薬理学総論、すなわち、薬理作用（薬力学と薬物動態学）の基本的理論の修得を目指した授業と試験を実施した。

### 2) 自己点検・評価

後期15回の講義で、薬理学総論、特に2学年のうちに、しっかり修得してほしい事項は伝えることができた。「学生による授業評価」の結果からも、こちらが修得してほしいことは、大部分の学生にも伝わったと考えられる。しかしながら、同時に、「歯科薬理学」という科目そのものに全く興味・関心が持てなかった学生が3～4名程いたことも窺えた。この層の学生へのアプローチには、改善の余地がある。

### 3) 改善方策

講義の体系は現状を維持するが、授業実施の面で、より学生が歯科薬理学に親しみをもてるような実例などを盛り込むことや、学修している内容が歯科医師になる上でどのように重要なのかを伝えることなどを、更に意識していく。

## II 教育方法

### 1) 教育方法の現状説明

指定教科書の内容を、より平易に説明し、わかりやすい図などを補足した「解説プリント」と、「問題演習プリント」の2種類を配布した。授業では、「解説プリント」でインプットすべき重要知識を明示した後、「問題演習プリント」の例題で知識のアウトプットの仕方を伝えた。更に、「問題演習プリント」の例題の後ろに、その項目のポイントをまとめ、穴埋め方式で復習できるようにした。

### 2) 自己点検・評価

「学生による授業評価」では、「復習しやすいように資料が整えられている」、「解説がわかりやすい」との評価を得た。特に、授業中に項目毎に問題演習を挟み、インプットしたばかりの知識をスムーズにアウトプットできるように再確認・再整理したのが、好評だった。従って、こちらの狙いは大部分の学生に伝わっており、教育方法を大きく変える必要はないと考えている。

### 3) 改善方策

今後も改訂を重ねて、よりわかりやすい資料作成や、わかりやすい授業実施に努めていく。全体像を把握するため、あえてA3サイズで作成した「解説プリント」の大きさが「勉強しにくい」という声もあったが、一人の意見なので、今後、場合によっては個別対応することなども検討していく。ポータルサイトに事前に授業資料をアップしてほしいとの要望も1件あったが、引用している図の著作権の問題から難しいと考えている。

## III 成績評価

### 1) 成績評価の現状説明

後期15回の科目なので、後期定期試験100%で評価し、100点満点中65点以上で合格とした。追再試験終了後、最終的に、後期定期試験受験者46名中4名が不合格となった。

### 2) 自己点検・評価

最終的に不合格になった4名のうち、3名は2SD以上、1名は1SD以上2SD未満、平均点よりも低い最終成績点であった。従って、成績評価の基準（試験の難易度）は妥当であったと考えている。しかしながら、同級生に比べて、極端に成績不振の学生が生じてしまったことは、成績評価以前の段階に改善の余地があると考えている。

### 3) 改善方策

早い時期から「勉強の仕方」を明示し、かつ、「過去問の正答を試験直前に丸暗記しても、理解していなければ点数には結びつかない」ことを、今まで以上に繰り返し伝えていく。また、毎回の授業に出席して、しっかり説明を聞き、疑問点はその日のうちに解決することが重要である旨も、引き続き、繰り返し強調していく。

# 2023年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	生体材料・歯科材料学 I	第 2 学年
科目責任者（記載者）	石田 喜紀	

調査実施年月：2024年 6 月

## I 到達目標

### 1) 科目の到達目標に対する現状説明

「歯科医師となるうえで、治療に必要な機材、材料の知識を当該科目にて学修する」ことを一般目標とし、到達目標としては、1) 歯科修復物を構成する各種の生体材料を説明できる。2) 成形加工に用いる歯科材料と器具の特性および使用法について説明できる。3) さまざまな症例に適応した歯科材料や器具が選定できる。としている。

### 2) 自己点検・評価

到達目標はコアカリキュラムや国家試験出題基準等を参考にし、設定している。科目の特性上、特に臨床に繋がるよう意識している。問題点は到達目標に対して、講義実習では実際に取り扱わない材料器械が多いことである。

### 3) 改善方策

実際に取り扱う器材には限りがあるため、できるだけ視覚素材で理解を助けるようにする。

## II 教育方法

### 1) 教育方法の現状説明

教科書を基本とし、テキストの順番に合わせて講義を行う。要点はプロジェクターを活用し、視覚素材を多用することで極力図案として記憶出来るようにする。また、教科書およびレジュメにて理解を深める。各項目終了後に練習問題を配布し、各学生が自学自習後に知識の確認をさせるようにしている。

### 2) 自己点検・評価

問題配布は学生の学修の指標として役に立っていると思われる。レジュメのプリントも学習のまとめを促す効果があると考えている。学生からの評価として、齋藤講師の講義の方法が評価が高かった。

### 3) 改善方策

講義の方法について、全員で齋藤講師の手法を取り入れ、よりデジタル機器を使いこなし、より学生の集中を途切らせないように工夫をするよう全員で話し合った。

## III 成績評価

### 1) 成績評価の現状説明

定期試験（上限100点）、追試験（上限100点）、再試験（上限65点）で評価する。65点以上を合格とする。必要に応じて特別試験を行うことがある。試験問題は多肢選択式とする。

### 2) 自己点検・評価

多肢選択式にすることで客観的評価が行えていると考えている。半期で2単位（30コマ）なので、中間試験を設定してもよいかもしれない。

### 3) 改善方策

現在も行っているが、担当教員による定期試験のブラッシュアップを計測して行っていく、よりCBTや国家試験に準じた問題を作成することができるよう努力する。中間試験の設定については担当教員間で話し合いの上検討していく。

# 2023年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	公衆衛生学	第2学年
科目責任者（記載者）	小林 美智代	

調査実施年月：2024年6月

## I 到達目標

### 1) 科目の到達目標に対する現状説明

一般目標：学修者が歯科医師として必要な公衆衛生的な考え方を学び、社会や環境が求める必要性に対する的確に対応し解決できる能力を身に付ける。  
到達目標：①健康の概念と予防の段階を説明できる。②疫学の研究手法とその活用を説明できる。③感染症の成り立ちとその予防策を説明できる。④公害や地球環境破壊と健康との関わりを説明できる。⑤人口構造の変化と疾病構造との関連を説明できる。

### 2) 自己点検・評価

④のように覚える事柄がはっきりしているもの、②の疫学のように答えが一つで、計算で解答が得られるものは目標に達している。

それに対し、①のように概念的で複数の選択肢から一つに絞るのが難しいもの、毎年新しい概念が取り込まれていくもの、③のように感染免疫や外科など複数の科目の知識が必要なもの、⑤のように歯科との関連が想像しにくいものは到達目標に達していない。

### 3) 改善方策

①と②に関しては、問題を解いて解答を理解していくことが重要であると考え。問題を解き、正答を理解する時間を作っていく。

③に関しては、学習すべき範囲を広げず公衆衛生的に覚えることを明確にして学習を促していく。教科書にない必要な新しい知識は、教員が積極的に資料として配布する。

⑤に関しても、学習すべき範囲を広げすぎないようにして、覚えてほしいところを明確にして学習を促していく。

## II 教育方法

### 1) 教育方法の現状説明

2023年度授業評価集計結果から、満足度が高かった項目（80%以上）は以下の7点である。①シラバスに沿って進化したか。②授業の目的が説明があったか。③授業の準備がしっかりしていたか。④授業の工夫が感じられたか。⑤重要事項や必要性が理解できたか。⑥自らシラバスを確認したか。⑦興味が高まったか。

満足度の低かった項目は以下の3点である。⑧予習を行ったか。⑨質問はできたか。⑩復習を行ったか。

### 2) 自己点検・評価

2022年度授業評価集計結果も⑧～⑩に関して全体平均より低かった。比較すると、2022年の評価の結果は、若干の改善が認められた。

教育方法の現状の分析から、今後の問題として講義内容の向上はもちろんのこと「予習」「復習」「教員への質問」への心理的なハードルを下げて、学生に促すことが必要だと思われる。

### 3) 改善方策

2023年は対策として講義資料にシラバスの内容を記載した。さらにインターネットを利用し、匿名で気軽に質問できる環境を作り、さらに講義で行った問題を携帯電話で確認できるような工夫を行った。この試みは学生にも好評であった。その結果、2022年と2023年の集計結果を比較すると、⑩は改善された。引き続き「教員への質問」と「復習」をしやすい環境を構築していく。

## III 成績評価

### 1) 成績評価の現状説明

定期試験（100%）で評価し、65点以上を合格とする。2023年度の公衆衛生学定期試験の全体の平均点は75点であった。上位25%の平均は94点、下位25%の平均は49点であった。本試験で46名中13名が65点以下で追試験となったが、ほぼ同じ難度の再試験において平均は68点であり上位25%の平均が79点、下位25%の平均が54点であった。

### 2) 自己点検・評価

本試験の上位25%の（12人）の平均が94点であったことからして、試験問題の内容は講義に沿ったもので、適切であったと思われる。

また、再試験においても上位25%（4人）の平均が79点であったことから、本試験で基準に達しなかった学修者も勉強時間を確保できれば十分に学習目標に達することが期待できることがわかった。

### 3) 改善方策

定期試験前に十分な時間を取れば、本試験で不合格となった13人のうち2/3は合格点に達することが可能だと考えられる。

毎回の講義の知識の定着をはかるため、講義の冒頭での小試験等を検討していく。

# 2023年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	社会歯科学	第3学年
科目責任者（記載者）	南 健太郎	

調査実施年月：2024年6月

## I 到達目標

### 1) 科目の到達目標に対する現状説明

歯科医師として必要な歯科医師法、医療法を、C B T、国家試験に即した講義を目指した。

### 2) 自己点検・評価

3年生からはC B T対策、6年生からは歯科医師国家試験に講義と類似な問題がかなり出題されて好評であった。

### 3) 改善方策

次年度も同様な講義内容を実施。

## II 教育方法

### 1) 教育方法の現状説明

学生が歯科医師として必要な法的知識を、自宅でも復習できるように講義スライド資料と、C B T対策オリジナル問題をユニパにて配布。

### 2) 自己点検・評価

講義中に20問のオリジナル問題を解答させ、解説していく講義形式。6年生にはプレッシャーがかかるほどの良問であったらしく、卒業生が私を尋ねて「このレベルの問題を出題して頂き、感謝します。また、先生の問題が国家試験にかなり出題されました。」と挨拶にきたので、この講義形式は正解であると考えている。

### 3) 改善方策

今年もこの講義形式を継続する。但し、パワーポイントの文字を大きくするなど工夫している。

## III 成績評価

### 1) 成績評価の現状説明

3年生は定期試験65%以上で合格とする。

### 2) 自己点検・評価

3年生の定期試験はマルチプルチョイス。この形式で問題ないと考えている。

### 3) 改善方策

この試験形式で次年度も継続する。

# 2023年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	口腔生理学Ⅱ	第3学年
科目責任者（記載者）	川合 宏仁	

調査実施年月：2024年6月

## I 到達目標

### 1) 科目の到達目標に対する現状説明

1) 生命現象を営む生態の機構を説明できる、2) 各器官の協調活動を説明できる、3) 歯科疾患の病態生理を説明できるという到達目標をたて、日々の課題や試験で到達度を計っている。生命現象を営む生体の機能について説明できるよう生物物理学的、細胞生物学的、組織学的、解剖学的知見を解説した。ただ、定期試験が終わるとほぼ忘れてしまう学生が多い。

### 2) 自己点検・評価

履修項目が多いので、スライドとプリントで授業を進めることで板書の時間を減らし、その習得に努めさせたが、その反面、受け身になって授業への参加意識が下がる学生も認められた。学生にとってはイメージが湧きにくい科目だが、問題を解き、わからないことを調べ、まとめを作成するサイクルで少しずつイメージが湧く学生もいた。しかし、進級後は、学習内容を大幅に忘れていた学生も少なくない。

### 3) 改善方策

到達目標を学生にしっかりと認識させ、到達目標の達成度をきめ細やかに点検する必要がある。基本的事項をさらに絞って重点的に学習させることで、より深い内容理解につなげるようにする。講義中に関連する既習事項を、より多くとり上げることで効率的に学習できるようにする。

## II 教育方法

### 1) 教育方法の現状説明

スライドを使って授業を効率的に授業を進めている。板書する時間がなくなった分、考える時間を増やしたものの、その分授業への集中力が落ちた学生もいる。講義ごとの復習課題では、各講義の到達目標について記述させ、次回の講義開始時に選択問題でチェックさせている。講義内容について、帰宅後に資料を見直し、ある程度、理解できていることを確認させるための課題を課している。

### 2) 自己点検・評価

学生の理解を深めるため、難解なところは繰り返し説明するように心がけており、プリントを併用することで板書の負担も減らしているが、興味のない学生にはあまり効果がないようだ。課題を出すことで、帰宅後に学習する目標ができたが、個人的な理由により、課題を提出しない学生も多い。

### 3) 改善方策

問題演習を1回毎の講義の最後に行っていたが、前回の復習のために授業の最初と、授業のところで問題演習をさせてアウトプットを促すことで、理解を深めさせる。

## III 成績評価

### 1) 成績評価の現状説明

前期の定期試験の成績で合否判定を行っている。

### 2) 自己点検・評価

学生の学力、学習意欲を反映した評価となっているが、最終得点が65点から75点の学生については、国家試験合格のためには高学年での相当な努力が要求される。

### 3) 改善方策

問題を解くために必要な思考や知識の要素を説明させ、それを試験に出題するなど。また、高学年になっても、学習内容が記憶に残っているように、実習で関連課題をこなしたり、イメージ図を描かせる課題などを工夫する。

# 2023年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	口腔生化学Ⅱ	第3学年
科目責任者（記載者）	加藤 靖正	

調査実施年月：2024年6月

## I 到達目標

### 1) 科目の到達目標に対する現状説明

細胞外基質分子、硬組織、唾液及び齶蝕について、構造と機能について学修する。また、染色体異常、遺伝形式と病態の基本的事項について学ぶ。

下記項目について説明できることを到達目標とする。

・細胞外基質分子の構造と機能    ・硬組織の構造と機能    ・血清カルシウムの生体恒常性    ・唾液・プラーク  
・齶蝕の分子機構    ・細胞内情報伝達機構    ・DNAの損傷と修復機構    ・遺伝病・遺伝子病、生活習慣病の成因

### 2) 自己点検・評価

49%（2023年度は37.5%）の学生が予習しておらず、36%（2023年度は32.5%）の学生が復習していない結果となった。予習しない学生数は、対象学生が2年次に受講した口腔生化学Ⅰの時（40.3%）より増加した。知的好奇心を刺激された割合についても2年次70.2%から40%に低下した。漫然と受講している学生が増加したものと考えられる。

### 3) 改善方策

興味がなければ学習意欲は上がらないので、具体例を多用して知的好奇心の向上に努める。

## II 教育方法

### 1) 教育方法の現状説明

パワーポイント主体で練習問題を提示した教員1名と板書主体の教員1名で分担した。

### 2) 自己点検・評価

パワーポイントの講義は好評で、板書主体の講義は好意的な意見と批判的な意見が見られた。一方、本試験での選択個数指定を守らない学生数は毎年一桁であったのに対し、2022年度から突然増加し22人（延べ46件）となり2023年度は23人（延べ46件）となった。分担者が練習問題の中から本試験に出題することを明言したことによる試験問題の丸覚えの弊害が出ている。

### 3) 改善方策

丸覚えでは対応できないことを説明し、理解が必要であることを啓発する。自身の研究内容を説明したことはなく教科書内容に沿った範囲で講義をしているのだが、伝わっていないようなので改善を試みる。

## III 成績評価

### 1) 成績評価の現状説明

パワーポイント主体で練習問題を提示した教員1名と板書主体の教員1名で分担した。

### 2) 自己点検・評価

パワーポイント主体の講義は好評で、板書主体の講義については、肯定的な意見と批判的な意見が見られた。授業の熱意や工夫については78%肯定的であったのは評価される。一方、本試験での回答個数指定を守らない学生が、2022年度から突然20人を超え、2023年度は25人に達した。延べの件数は43件である。分担者が練習問題の中から本試験に出題することを明言したことによる試験問題の丸覚えの弊害が出ている。

### 3) 改善方策

休み時間に質問対応で教室に残っているのだが、質問してくる学生はごくわずかである。また、本試験、追再試験の問題は、毎回持ち帰りなので学生が入手することは容易である。国家試験問題も入手可能である。それらを丸覚えでなく、有効活用するよう促すようにする。

# 2023年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	口腔生化学実習	第3学年
科目責任者（記載者）	加藤 靖正	

調査実施年月：2024年6月

## I 到達目標

### 1) 科目の到達目標に対する現状説明

生体を構成する基本的な物質、医学的に重要な血液検査項目、さらに遺伝子の解析方法などについて理解を深める。次の項目についての修得を目標とする。  
測定機器の取り扱い方、測定法の原理と特異性の理解、生体構成物質の基本的な取り扱い方、測定した結果のまとめ方とその意味の考察など。

### 2) 自己点検・評価

教員の熱意・工夫に関しては、85%が肯定的で、教員の授業準備に関しては、88%が肯定的であった。しかしながら、質問できないことがあった学生が40%に達していたのは解決が必要である。

### 3) 改善方策

質問に対しては、いつでも対応しているのだが、なかなか質問しようとしてくる学生が少ない。気軽に質問できるように配慮する。

## II 教育方法

### 1) 教育方法の現状説明

新型コロナウイルス感染防止拡大防止対策として実際の実習は行わずに実験手順の動画を見たのち、演習を行う形式で進めた。動画については、大変好評であった。また、3回の実習試験の前には、関連事項の講義を行い、試験直前には振り返り学習の時間を設けた。実習日ごとにレポート提出を課した。

### 2) 自己点検・評価

ChatGTPに関して、登録しなければならないことが負担に思う学生がいたことは解決が必要である。

### 3) 改善方策

ChatGTP以外、基本的な進め方に問題は無いので、今後も継続していく。

## III 成績評価

### 1) 成績評価の現状説明

記述、多肢選択などによる出題形式の試験を3回実施し、その平均を70%、レポートを30%として65点以上を合格とした。

### 2) 自己点検・評価

65点に満たない学生に対しては、レポート提出をさせ、その成績をもって合格とした。

### 3) 改善方策

特に問題点は見いだせないので、今後も継続していく。

# 2023年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	口腔病理学	第3学年
科目責任者（記載者）	遊佐 淳子	

調査実施年月：2024年6月

## I 到達目標

### 1) 科目の到達目標に対する現状説明

疾病を総括的に理解するために病理学総論を講義し、それに引き続き歯科臨床における疾病を理解するために、病理学各論（口腔病理学）を講義している。

### 2) 自己点検・評価

口腔病理学は臨床歯学に深く関連するので、臨床歯学を学ぶ前には口腔病理学を充分理解している必要がある。そのために、口腔病理学を学ぶ前には病理学総論として疾病を総括的に講義し、それらを理解した後に口腔領域の疾患を講義することで、より理解度が高まると考える。

### 3) 改善方策

病理学総論を理解できたことを確認し、その後、病理学各論（口腔病理学）の講義を行う。そのために、授業の途中で問題の提示などを行い、知識の確認を試みる必要がある。

## II 教育方法

### 1) 教育方法の現状説明

講義の主体はスライド投影を用いて行っている。また、講義プリントを配布している。

### 2) 自己点検・評価

授業評価において、スライドの進むスピードが早いとの意見があり、改善が必要である。

### 3) 改善方策

スライドを進ませるときは一言かけるなどして学生の状況を把握し講義を進めるようにする。また、講義プリントを改良し、学生が記載する量を改善する。

## III 成績評価

### 1) 成績評価の現状説明

前期及び後期定期試験がともに65点以上で合格とする。最終評価は前期と後期の平均点としている。

### 2) 自己点検・評価

前期は病理学総論、後期は病理学各論が範囲であるため、それぞれが65点以上で合格とするのは妥当である。

### 3) 改善方策

通年科目であるため、前期試験範囲も後期定期試験後の再試験時に行うことになるため、前期試験で65点未満の場合は中間試験を行い、前期範囲を勉強するような状況にする。



# 2023年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	口腔病理学実習	第3学年
科目責任者（記載者）	遊佐 淳子	

調査実施年月：2024年6月

## I 到達目標

### 1) 科目の到達目標に対する現状説明

顎口腔領域の病変の病理組織診断に必要な基礎知識を得るために、諸病変の病理組織像を理解し、それを説明できるようになるための実習を行っている。実習前半では病理学総論で学んだ各病変を緒臓器において観察し、後半では病理学各論で学んだ顎口腔領域の病変の病理組織像を観察している。

### 2) 自己点検・評価

座学と同様に、病理学総論と病理学各論に分けて実習を行うことで、講義で説明された病変がどのような病理組織像を示すかを学ぶことができ、理解度を高めることができると思う。

### 3) 改善方策

実習時に座学との関連性をより明確に示しながら、実習を進めるようにする。

## II 教育方法

### 1) 教育方法の現状説明

病変部画像が印刷されたスケッチ用紙を配布し、その画像を用いて病理組織像の説明を書いたレポートを作成する。レポート作成のために、最初にスライド投影による説明を行っている。また、レポート作成で説明すべき内容をまとめたプリントを配布している。

### 2) 自己点検・評価

授業評価で、説明がわかりやすかった、実習最後の総復習で大事なポイントをまとめた事が良かったとの意見があった。レポート作成前に説明をしかつプリント配布をすることは良かったと思われる。

### 3) 改善方策

スライドや配布プリントを改良し、わかりやすく理解しやすい実習を行えるようにする。また、重要なことを繰り返して講義し、理解度を高められるようにする。

## III 成績評価

### 1) 成績評価の現状説明

実習試験（80%）とレポート提出（20%）で評価し、65点以上を合格とする。実習試験は2回（前半と後半）行いその平均点を実習試験の点数とした。実習試験は画像をスライド投影している。

### 2) 自己点検・評価

スライド投影により試験を行うことはCBT対策のためにも妥当であると思う。CBTや国試において病理組織像は非常に重要な内容であり、65点以上で合格とする評価方法に問題はないとみなされる。

### 3) 改善方策

鮮明な画像によるスライド作成をする。また、座席によりスライドの見え方に差があることを考慮し、スライド投影による試験だけでなく、画像を印刷した紙媒体での試験を行う。

# 2023年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	口腔感染免疫学Ⅱ	第3学年
科目責任者（記載者）	清浦 有祐	

調査実施年月：2024年6月

## I 到達目標

### 1) 科目の到達目標に対する現状説明

到達目標は「1) 微生物感染に対する免疫応答を説明する。2) 免疫応答に関係する細胞性因子を説明する。3) 免疫応答に関係する液性因子を説明する。4) 齲蝕と歯周病の原因菌を説明する。5) 齲蝕と歯周病の起こるメカニズムを説明する。」である。微生物に関して、学生は学名による理解に苦手意識を持つことから、その点に関して特に繰り返し丁寧な講義を行うことで到達目標の達成を目指した。

### 2) 自己点検・評価

学生の最終成績結果から、授業方法やその内容に大きな問題点はないと判断できる。授業後にさらに進んだ内容を積極的に質問する学生が毎回いることは、授業が学生の勉学意欲と研究心の向上に貢献していると考えられる。しかし、その一方で成績が伸び悩んでいる成績下位の学生に対する個別の改善策も必要となる。口腔感染免疫学は、広範な領域を含むので、より丁寧な授業が必要となる。

### 3) 改善方策

各回の授業では問題演習も行って知識の定着を求めているが、演習問題をブラッシュアップして授業内容の理解度を自身でも把握できるようにさせていく。さらに、成績下位者に対する科目選択ゼミナールの内容に関しても定期試験の成績向上につながる内容に大きく改良する必要がある。

## II 教育方法

### 1) 教育方法の現状説明

教科書・教科書の内容を分かりやすくしたプリント・板書の3つを基本に丁寧に分かりやすい授業を行っている。しかし、プリントに関して、今後はデジタル配信も行うこととする。また、配布プリントの内容と板書の記載については、さらに理解しやすい内容とする改善策を引き続き行っていく。

### 2) 自己点検・評価

到達目標の箇所で記載したように、成績下位の学生の成績向上への取り組みをさらに充実させる必要がある。科目選択ゼミナールの有効活用と共に成績下位者に対する丁寧な指導を継続して行う。

### 3) 改善方策

成績下位の学生も自ら積極的に学ぶような授業としていく。具体的には、次のようにする。①プリント記載の図は授業中に板書すると共に学生にも板書を求める。単にプリントを眺めるのではなく、自ら手を動かすことで理解を深める。②学生からの質問や授業中の討論から、学生が苦手意識を持つ項目を把握して、それに関しては繰り返し丁寧な指導を行う。科目選択ゼミナールの有効活用とその改善を行っていく。

## III 成績評価

### 1) 成績評価の現状説明

成績評価はシラバス記載に従って、中間試験（50点）と定期試験（50点）の平均点によって評価した。

### 2) 自己点検・評価

成績評価については、現状のままで特に大きな問題はないと考える。

### 3) 改善方策

成績評価では、特に改善すべき点は無いと考える。

# 2023年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	口腔感染免疫学実習	第3学年
科目責任者（記載者）	玉井 利代子	

調査実施年月：2024年6月

## I 到達目標

### 1) 科目の到達目標に対する現状説明

①細菌と真菌の取り扱いに関する手技を説明できる。②細菌と真菌の基本的な形態を説明する。③化学療法の原理を説明する。④齲蝕と歯周病の原因菌の性状を説明する。⑤ヒトの生体防御のメカニズムを説明する。以上の到達目標に向けて実習し、前期後期に分けて実習筆記試験を行っている。試験結果は概ね高得点であるので、大部分の学生が到達している。

### 2) 自己点検・評価

上記①、②および④はグラム染色法とコロニー観察、③はディスク法（抗菌薬感受性試験）、⑤はゲル内沈降法を用いて説明している。試験結果が良好なので、現状のままで良いと思われる。

### 3) 改善方策

可能ならば、ウイルスを用いた実習も行いたい。

## II 教育方法

### 1) 教育方法の現状説明

実習の内容に関する講義を行ってから、実習テキストに従って実習を行っていく。原則として、実習結果を指定されたレポート形式で記載し、次回の実習時に提出する。実習は3年生対象だが、内容は2年生の授業に含まれる項目が多いので、ある程度思い出してもらうように講義を行っている。

### 2) 自己点検・評価

授業評価結果で「実習講義が長い。普通の授業でやればいいのか。」という回答があった一方、「レジュメが分かりやすい。」「実習自体は簡潔に終わったこと。」が良い点として挙げられた。上記で述べたように内容は2年生の授業に含まれる項目が多いので、成績の良い学生には退屈であることが考えられる。

### 3) 改善方策

内容が同じでも新鮮味を感じられるプレゼンテーションを行う。

## III 成績評価

### 1) 成績評価の現状説明

筆記試験と実技試験の成績（40点）、提出されたレポートの採点結果（50点）、出席（出席率100%で10点）で評価する。65点以上を合格とする。筆記試験及び実習試験終了後、学生全員を対象に解説を行う。レポートは、採点後に記載内容についての講評を学生全員に対して行う。学生から意見があれば対応する。レポート提出がなかった場合は不可とする。

### 2) 自己点検・評価

レポート提出によってある程度の点数を確保できるのは、出席必須の実習科目においては良い点だと思う。

### 3) 改善方策

筆記試験の成績が悪かった学生に対しては補講を行う。

# 2023年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	歯科薬理学Ⅱ	第3学年
科目責任者（記載者）	柴田 達也	

調査実施年月：2024年6月

## I 到達目標

### 1) 科目の到達目標に対する現状説明

全身疾患の治療に用いられる薬物（末梢神経系・中枢神経系に作用する薬物、循環器系に作用する薬物、血液・造血器系に作用する薬物、抗腫瘍薬など）および歯科医療現場で使用する頻度が高い薬物（局所麻酔薬、鎮痛薬・抗炎症薬、抗菌薬、消毒薬など）の特徴を説明できることを到達目標にしている。シラバスに提示した項目はすべて講義した。

### 2) 自己点検・評価

令和5年版歯科医師国家試験出題基準に和漢薬が加わったため、教育する薬物の数が増加したものの、既存の薬物を少し減らした。到達目標の内容は達成できている。

### 3) 改善方策

歯科医師国家試験で出題された内容を確認し、引き続きそれを反映させる。

## II 教育方法

### 1) 教育方法の現状説明

前年度と同様に、30コマすべて柴田が担当した。プリントを作成して、スライドを用いて講義を行った。

### 2) 自己点検・評価

アンケートの自由記載で、プリントその他について肯定的意見が6件あった。基本的に現在のやり方で進める。

### 3) 改善方策

アンケートの自由記載で話し方の不明瞭さの指摘が1件あった。特に話すスピードは速くならないように心がけたい。「国試に必要な事だけを話しているようだが、もう少し深く作用機序や応用事項などを話して欲しかった。」との意見があった。成績がよい学生と思われるが、本学の現状では可能な限り基本的事項の徹底に努めるべきと考えている。今後ともC B Tや国試に必要なことを中心において進める。

## III 成績評価

### 1) 成績評価の現状説明

中間試験の得点と定期試験の得点の平均点で65点以上を合格としている。中間試験、定期試験ともに本試験は試験問題を返却して解説している。

### 2) 自己点検・評価

2023年度は中間試験の平均点は85.0点、定期試験の平均点は80.1点で2つの平均は82.6点であった。中間試験はこれまでと同様であった。定期試験は前年度の63.4点から大幅に上昇した。連問をとり入れたことがプラスに作用した可能性がある。

### 3) 改善方策

良好な成績が得られており、次年度も講義の量とスピードに留意しながら、基本的事項を修得してもらえるように努める。

# 2023年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	歯科薬理学実習	第3学年
科目責任者（記載者）	鈴木 礼子	

調査実施年月：2024年6月

## I 到達目標

### 1) 科目の到達目標に対する現状説明

動物愛護の3つのRに鑑みて、実際の患者データや、多数の実験動物の犠牲の元に蓄積された実験データをPC上で再現できるシミュレーション、及び、過去に骨粗鬆症モデル動物から採取した標本のデジタルデータを採用した実習を実施した。それによって、歯学生にとって重要な、薬物動態、薬物相互作用、循環器系に作用する薬物、硬組織の薬理について、客観的データと知識を統合し、論理的に考える姿勢を修得することを目指した。

### 2) 自己点検・評価

「学生による授業評価」の結果から、概ね、学生にとっても、歯科薬理学の座学で学んだ知識の理解を深める一助となったようである。従って、到達目標は概ね達成でき、実習の方向性として妥当であったと考えられる。

### 3) 改善方策

現状でも、歯科医師国家試験合格を目指す学生にとって有意義な実習となっていると考えられるので、実習項目自体は大きく変えずに、実習の導入ガイダンス（目的説明）において、学生の興味・関心を引き出せるよう、実習で取り扱う実験の意義・目的をより明確に説明するようにする。

## II 教育方法

### 1) 教育方法の現状説明

項目ごとに、(1) 導入講義（実習に関わる基礎的な知識の確認）、(2) 実習課題の実施（PCシミュレーションまたは標本データ解析）、(3) 問題演習（実習に関連する歯科医師国家試験問題等）のセットで実施した。なお、感染症対策として、実習課題実施においては、各人にデータを掲載した紙資料を配布し、そのデータを元に解析させた。更に、提出課題の正答は、当日中にポータルサイト上で確認できるようにした。

### 2) 自己点検・評価

「学生による授業評価」では、概ね、「興味が高まった」「理解が深まった」との評価であった。従って、たとえ机上の演習に近い実習形態であっても、目的や意義をしっかり説明できれば、学生の学修意欲の向上や、理解を深めることに有用であることを示せたと考えている。ただし、学生の興味・関心を高め、有意義な実習であったと受け止めてもらえるような改善を重ねていく必要はある。

### 3) 改善方策

歯科医師国家試験の傾向や、世間の歯科医療に対するニーズの動向をふまえた上で、なぜ、この実習が必要なのか、また、この実習から修得して欲しいことは何なのかを、より明確に提示していく。

## III 成績評価

### 1) 成績評価の現状説明

実習内容に関する筆記試験(60%)と提出課題(40%)の合計で、100点満点中65点以上で合格とした。なお、提出課題は、不備があった場合は差し戻してやり直させ、それが期日までに提出された場合は、満点とした。

### 2) 自己点検・評価

提出課題点が40%分あることにより、筆記試験の再試験を実施することなく、全員合格に至った。このことは、課題にきちんと取り組んでいるが、理解・アウトプットするのに少し時間がかかりがちな学生の、日頃の努力を評価できるという点では長所だと考えている。反面、既に提出課題点が蓄積した時期に筆記試験を行う都合上、最初から、試験勉強に身が入らないような学生も数名出てしまったのは、短所である。

### 3) 改善方策

実習なので、課題にきちんと取り組んでいるが、理解するのに少し時間がかかりがちな学生の、日頃の努力を評価できるという長所は、このまま生かしたい。一方、課題点があることによって、学修が疎かになりがちな学生に対しては、毎回の実習や講義に真剣に取り組み続けた学生が、結局は、最低年限ストレートで歯科医師国家試験に合格するという厳然たる事実を伝えて、意識向上を指導していく。

# 2023年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	生体材料・歯科材料学Ⅱ	第3学年
科目責任者（記載者）	石田 喜紀	

調査実施年月：2024年6月

## I 到達目標

### 1) 科目の到達目標に対する現状説明

「歯科医師となるうえで、治療に必要な機材、材料の知識を当該科目にて学修する」ことを一般目標とし、到達目標としては、1) 歯科修復物を構成する各種の生体材料を説明できる。2) 成形加工に用いる歯科材料と器具の特性および使用法について説明できる。3) さまざまな症例に適応した歯科材料や器具が選定できる。としている。

### 2) 自己点検・評価

到達目標はコアカリキュラムや国家試験出題基準等を参考にし、設定している。科目の特性上、特に臨床に繋がるよう意識している。問題点は到達目標に対して、講義実習では実際に取り扱わない材料器械が多いことである。

### 3) 改善方策

実際に取り扱う器材には限りがあるため、できるだけ視覚素材で理解を助けるようにする。

## II 教育方法

### 1) 教育方法の現状説明

教科書を基本とし、テキストの順番に合わせて講義を行う。要点はプロジェクターを活用し、視覚素材を多用することで極力図案として記憶出来るようにする。また、教科書およびレジュメにて理解を深める。各項目終了後に練習問題を配布し、各学生が自学自習後に知識の確認をさせるようにしている。

### 2) 自己点検・評価

問題配布は学生の学修の指標として役に立っていると思われる。レジュメのプリントも学習のまとめを促す効果があると考えている。学生からの評価として、齋藤講師の講義の方法が評価が高かった。

### 3) 改善方策

講義の方法について、全員で齋藤講師の手法を取り入れ、よりデジタル機器を使いこなし、より学生の集中を途切らせないように工夫をするよう全員で話し合った。

## III 成績評価

### 1) 成績評価の現状説明

定期試験（上限100点）、追試験（上限100点）、再試験（上限65点）で評価する。65点以上を合格とする。必要に応じて特別試験を行うことがある。試験問題は多肢選択式とする。

### 2) 自己点検・評価

多肢選択式にすることで客観的評価が行えていると考えている。半期で2単位（30コマ）なので、中間試験を設定してもよいかもしれない。

### 3) 改善方策

現在も行っているが、担当教員による定期試験のブラッシュアップを計測して行っていく、よりCBTや国家試験に準じた問題を作成することができるよう努力する。中間試験の設定については担当教員間で話し合いの上検討していく。

# 2023年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	生体材料・歯科材料学実習	第3学年
科目責任者（記載者）	石田 喜紀	

調査実施年月：2024年6月

## I 到達目標

### 1) 科目の到達目標に対する現状説明

各種歯科材料および器械の特性と操作法を理解するために、それらの操作法を実習書や動画を用いて説明し、実際に取扱いを経験し、正しく操作するために特性を理解することを目的とした。多くの学生が目標に対して良い結果を得られたと思われる。十分な準備の有無や理解度、また性格などにより学生ごとの実習の進捗に大きな差は出た。

### 2) 自己点検・評価

実習の工程ごとのチェック項目を指定することで、それらの重要度が理解できたのではないかと考える。問題点は上記の通り、学生の特性により進捗状況に大きな差が出ることである。

### 3) 改善方策

工程が早く終了した学生さんには口頭試問をする等、より深い理解を促してもよいかもしれない。

## II 教育方法

### 1) 教育方法の現状説明

上記目標に対して、実技は各段階でインストラクターがチェックを行い、製作物の提出およびデータの提出をもって実習の完了とし、実技試験を行った。また、特性の理解については動画や実習書の内容を各工程で説明を行った。到達目標をさらに細かく「実習の目標」として設定し、それらについて数回の小試験および最終試験を行った。

### 2) 自己点検・評価

動画については繰り返し確認できるので良い結果を生んでいると考えている。問題点としては、「インストラクターに質問をしにくい」という意見があった。

### 3) 改善方策

上手くコミュニケーションがとれなさそうな学生には、実習中に教員から実習の慎重状況などを質問し、学生からの質問を引き出せるように考えている。

## III 成績評価

### 1) 成績評価の現状説明

①実習の各項目に対するチェック、作品の提出および作品の評価（40%）、②小試験（20%）、③総合試験と実技試験（40%）により評価する。①+②+③の合計で65点以上を合格とする。

### 2) 自己点検・評価

実習の実技を各行程でチェックすることでその工程の重要度が理解でき、また、その場限りの理解にとどまらずMCQによる小テストにより理解の定着を促し、最終的なテスト（実技と筆記）を行うことでさらなる記憶の定着をさせることができると考えている。現状、問題点は特になく考えているが、項目のチェックが教員により難易度に違いがあるかもしれない。

### 3) 改善方策

項目のチェックについて、教員間で話し合いを行う。

# 2023年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	口腔衛生学	第3学年
科目責任者（記載者）	廣瀬 公治	

調査実施年月：2024年6月

## I 到達目標

### 1) 科目の到達目標に対する現状説明

歯科医師として具備すべき公衆衛生学・口腔衛生学の知識を修得することで、地域歯科保健支援及び予防歯科診療を根拠をもって対応できることを目標としている。

### 2) 自己点検・評価

2年次で公衆衛生学が開講されていることから、当該学年における公衆衛生学領域の教育は、国家試験で出題率の高い「疫学」、「環境衛生」、「食品衛生」に絞って実施していることは、科目間連携を考慮したものとして評価する。また、口腔衛生学・予防歯科領域においては、基本的内容を重視し、この領域の初学者にとって理解しやすい内容としていることも評価できる。

### 3) 改善方策

視覚素材を取り入れた教育内容に改める。

## II 教育方法

### 1) 教育方法の現状説明

国家試験問題の多くは教科書から出題されていることから、必ず教科書を傍用し、詳細な説明を行なっている。また、講義終了10分前には、講義内容の理解と浸透のため、MCQによる確認練習問題を実施している。

### 2) 自己点検・評価

過去の国家試験問題に頻出している事項を抽出し、その内容について講義・演習をしていることは、3年次のうちから国家試験を視野に入れる学修を促進するものとして評価する。

### 3) 改善方策

現状を維持する。

## III 成績評価

### 1) 成績評価の現状説明

定期試験で65点以上の者を合格と判定し評価を実施している。

### 2) 自己点検・評価

試験方式はMCQで実施し、問題のSBOsは、モデルコアカリ及び歯科医師国家試験出題基準に準拠したものを出题していることは、客観性と基本的事項を問う問題で成績判定しているものとして評価する。

### 3) 改善方策

歯科医師国家試験のみならず、医師国家試験など、関連職種の国家試験問題で良問があればそれを参考にする。



# 2023年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	口腔衛生学実習	第 学年
科目責任者（記載者）	廣瀬 公治	

調査実施年月：2024年6月

## I 到達目標

### 1) 科目の到達目標に対する現状説明

衛生学・公衆衛生学及び口腔衛生学の座学内容を実習において確認するため、環境要因測定、集団における歯科疫学指標の採取を行い、疾病予防の方策を立案するための基本的技能の習得を目標としている。

### 2) 自己点検・評価

環境要因測定においては、学生個人が、測定器具を操作し、その要因の意義を理解していることは評価できる。しかし、歯科疫学指標の採取にあつては、新型コロナウイルス感染症予防のため、相互診査ができなかったことは残念であった。

### 3) 改善方策

新型コロナウイルスに対する感染予防に十分配慮した実習構成が求められる。

## II 教育方法

### 1) 教育方法の現状説明

環境要因測定は、口腔衛生学講義に立脚した示説の後、学生各々が実際に操作を行なう。また、今年度は実施できなかったが、歯科疫学指標の採取にあつては、学生相互による口腔内診査を行なうことにしていた。このように、学生が自分で実施しなければ実習を完遂できない教育構成にしていることは、傍観者を作らない実習として評価する。

### 2) 自己点検・評価

新型コロナウイルス感染症に起因するが、口腔内相互診査ができなかったことに対する代替内容として、模擬症例を用いた演習を行なったが、内容としては不十分であった。

### 3) 改善方策

どのような状況においても、即応できるオプションをあらかじめ用意する体制を整える。

## III 成績評価

### 1) 成績評価の現状説明

出席（10%）、レポート（20%）、効果測定（70%）の合計で65点以上を合格としている。

### 2) 自己点検・評価

出席率ならびにレポート提出率はきわめて高く、学生の実習に対する意欲の表れとして評価する。また、試験はすべて実習で実施したことから出題し、また問題も歯科医師国家試験出題基準に準拠していることは評価できる。

### 3) 改善方策

不測の事態に対応できる体制を整える。

# 2023年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	保存修復学 I	第 3 学年
科目責任者（記載者）	山田 嘉重	

調査実施年月：2024年 6 月

## I 到達目標

### 1) 科目の到達目標に対する現状説明

齶蝕、非齶蝕性硬組織疾患による実質欠損に対して適切に治療を行うための基礎知識を身に着けることを一般目標とした。保存修復学 I での到達目標としては、齶蝕、非齶蝕性の硬組織疾患の違いを認識し、それぞれの病因と病態を説明できるようにすること。さらにそれぞれの治療法を手順を追って説明できることを目標とし、その目標に沿った授業を行った。

### 2) 自己点検・評価

今年度の講義で、次年度の基礎実習の準備を含む直接修復処置に対して基礎となる知識を持たせることができたと思われる。講義の内容をしっかりと理解できている学生が多かった半面、十分な知識の定着ができなかった学生もおり、学習内容の到達度に差が生じてしまった。

### 3) 改善方策

可能な限り多くの学生が到達目標に達することができるよう授業内容の改善を常に行っていく。

## II 教育方法

### 1) 教育方法の現状説明

講義はスライドおよびスライドに沿った配布資料を使用した。講義内容は指定教科書および参考教科書の両方の教科書の内容に沿うようにしている。学生には授業後には各回の講義プリントを基に指定教科書をみながら復習すること。講義内容が理解できるように必ず事前に予習すること、および週末までには復習をするように指示していた。

### 2) 自己点検・評価

教科書に沿って授業を進めたことから、教科書に記載されている内容は後日自分で復習する際に理解し易くなったものと思われる。しかし問題点としては、講義中で配布した資料を基に多くの学生が勉強をおこなっており、講義資料がある程度の勉強のツールとして効果があったものと思われる。しかし、配布資料に頼りすぎる傾向が強く、講義内容を教科書で復習する学生が少なかったものと思われる。

### 3) 改善方策

学生に教科書に沿った講義内容を理解してもらおうとするとどうしてもスライド内容が多くなってしまい、理解が不十分な学生には負担になるようなので、可能な限り講義内容をシンプルにする。講義の進め方、話し方のスピードをゆっくり行い学生の理解度が向上するよう心がける。

## III 成績評価

### 1) 成績評価の現状説明

成績は定期試験および、必要に応じて再試験を行い評価した。

### 2) 自己点検・評価

本年は定期試験、再試験のみで、中間試験を施行しなかったことから、学生が自己の理解度を図る機会は少なかったものと思われる。しかし多くの学生が試験で合格点を取得したことから今回の試験による評価は適正であったものと思われる。

### 3) 改善方策

授業内容を十分に理解できず、習熟の程度が低い学生もいたことから、基本的な事項、重要度の高い事項については繰り返し講義を行い学生の習熟度が向上するよう心がける。

# 2023年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	冠橋義歯補綴学 I	第 3 学年
科目責任者（記載者）	羽鳥 弘毅	

調査実施年月：2024年 6 月

## I 到達目標

### 1) 科目の到達目標に対する現状説明

「到達目標」を達成するために教科書、教科書をまとめた講義資料（講義に先立ちユニパに掲示）、講義ごとの確認テストなどを使用して講義を行った。この際「一般目標」の内容を反映させて講義を行った。本科目は冠橋義歯補綴学の必修～基礎内容の項目であることを学生にアナウンスし、授業内容が深く理解されるよう配慮している。

### 2) 自己点検・評価

「到達目標」はシラバス記載の通りに授業を行い、授業での「学習の目標」は教科書の内容を反映させた。アンケート結果より、「到達目標」は「可もなく不可もない状態」と自己点検します。

### 3) 改善方策

「到達目標」で高評価を得られるよう、「シラバスの記載」や「教科書の学習の目標」に沿って丁寧に講義を行うことに取り組みます。

## II 教育方法

### 1) 教育方法の現状説明

教科書、教科書をまとめた講義資料（講義に先立ちユニパに掲示）、講義ごとの確認テストなどを使用して講義を行った。必要に応じ、症例写真も取り組むことで視覚的に理解が進むよう配慮している。

### 2) 自己点検・評価

「教育を受け知的好奇心が刺激されたり、興味が高まりましたか。」では「そう思う（50%）」であったため教育方法の方向性は正しかったと推察される。「教員の熱意や授業の工夫は感じられましたか。」では「そう思う（60%）」であった。今後は熱意と工夫を伝えられるよう努力したい。

### 3) 改善方策

「授業資料」はしっかりとしていたために今後の資料作成は年度更新ごとに国家試験などの出題内容を追加することにより教育方法を改善していきたい。具体的には穴埋め式の講義資料、MCQでの演習問題を作成していきたい。

## III 成績評価

### 1) 成績評価の現状説明

後期の定期試験において点数が65点以上を合格とする。点数が65点未満の場合には再試験を行う。点数が65点未満の再試験該当者は、再試験の点数が65点以上でも65点の採点結果とする。

### 2) 自己点検・評価

長所は定期試験での不合格者がいないことである。問題点は採点結果が低い学生が一定の割合で存在することである。”想起→解釈⇒問題解決”のどこかで情報を整理仕切れていない学生が存在することと判断します。授業の進め方なども含めて改善する必要があります。

### 3) 改善方策

試験問題の正答（率）や識別係数などを判断材料として、授業資料と試験問題のブラッシュアップを行う予定です。

# 2023年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	有床義歯補綴学 I	第 3 学年
科目責任者（記載者）	山森 徹雄	

調査実施年月：2024年 6 月

## I 到達目標

### 1) 科目の到達目標に対する現状説明

本科目は、全部床義歯の臨床的意義を理解し、製作、装着するための理論修得を一般目標としている。そのために無歯顎の特徴、診察や検査、全部床義歯の製作過程やそれに関する理論、さらにはメンテナンスや術後経過を説明することを到達目標としている。

### 2) 自己点検・評価

臨床実習前に修得すべき全部床義歯学に関連する知識を網羅しており、適切な到達目標であると考えている。

### 3) 改善方策

到達目標としては、現行からの修正は不要であると考えている。

## II 教育方法

### 1) 教育方法の現状説明

到達目標を実践するため45時間の講義を行った。部分的に空欄とした講義プリントを作成して配布し、プロジェクターで提示したパワーポイントファイルから学生自身に空欄を埋めさせながら解説した。必要に応じて板書による説明を追加して学生の理解を図った。今年度から本学に赴任した高津匡樹教授を含め5名で講義を実施した。

### 2) 自己点検・評価

学生の講義に対する集中度は概して良好であったと思われる。学生の理解度を確認しながら講義を進めている。また学生による評価では概ね良好は評価であったが、講義資料の改善を求める意見もあったため次年度に向けて検討する。

### 3) 改善方策

当科目は講義全体を通して部分床義歯の臨床的、基礎的項目を網羅するため、欠席や集中不足などにより理解できない部分があると、わかりにくくなってしまふ。前回の講義を振り返りながら次の内容を説明することで対応する。また講義資料のブラッシュアップを実施する。

## III 成績評価

### 1) 成績評価の現状説明

毎回の講義での小試験で形成的評価を行い、理解不十分な箇所が明確になるよう配慮した。また中間試験と後期試験で客観試験、記述試験による総括的評価を行った。後期試験不合格者32名と欠席者2名に対して追再試験を実施し、さらに特待生の継続条件未達成者を含め特別試験を実施したが、9名は合格に至らなかった。

### 2) 自己点検・評価

これまでと同様の難易度の問題により総括的評価を行ったが、再試験、特別試験を実施してもなかなか合格に至らない。不合格の学生は複数の他科目でも不合格となっており、学習への取り組みが不十分と考えられる。

### 3) 改善方策

本科目の講義内容が多岐にわたるため、毎回の講義後に十分な復習を実施しないと内容の理解が難しくなる可能性がある。講義の欠席が多いものに成績不振な学生が多いことから、来年度は出席の推奨をさらに進めたい。

# 2023年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	有床義歯補綴学Ⅰ実習	第3学年
科目責任者（記載者）	山森 徹雄	

調査実施年月：2024年6月

## I 到達目標

### 1) 科目の到達目標に対する現状説明

本科目は、全部床義歯の臨床的意義を理解し、製作、装着するための理論修得を一般目標としている。そのために無歯顎の特徴、診察や検査、全部床義歯の製作過程やそれに関する理論、さらにはメンテナンスや術後経過を説明することを到達目標としている。

### 2) 自己点検・評価

臨床実習前に修得すべき全部床義歯学に関連する知識を網羅しており、適切な到達目標であると考えている。

### 3) 改善方策

到達目標としては、現行からの修正は不要であると考えている。

## II 教育方法

### 1) 教育方法の現状説明

到達目標を実践するための内容について60時間の実習を行った。少人数のグループに分かれ、チュータからの個別指導に従い、実習マニュアルに沿って全部床義歯製作の各過程を実践した。

### 2) 自己点検・評価

臨床実習前に必要な内容を組み込んでいるため、実習時間に余裕がない。学生の授業評価では、概ね良好であるものの、グループ間のインストラクター配置や指導内容の違いへの不満が提示されている。

### 3) 改善方策

スタッフの指導能力向上を目的としてデモ模型の製作に力を入れる。またインストラクターミーティングで学生への接し方、指導方法、到達目標などの統一を図る。

## III 成績評価

### 1) 成績評価の現状説明

実習中の口頭試問で形成的評価を行い、実習毎の小試験と実習終了時点の実技試験、製作物と出席状況により総括的評価を行った。

### 2) 自己点検・評価

全学生が形成的評価に基づき指導に沿った自学自習を実践し、総括的評価で合格に至った。

### 3) 改善方策

実習前半では講義に先行して実習する内容が含まれるため、事前の説明を詳細に行い学生の理解を高める。

# 2023年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	口腔外科 I	第 3 学年
科目責任者（記載者）	金 秀樹	

調査実施年月：2024年 6 月

## I 到達目標

### 1) 科目の到達目標に対する現状説明

歯学教育モデルコア・カリキュラムに則して顎・口腔領域の疾患に罹患した患者の健康維持・増進を図るために、1) 手術総論、小手術の知識、2) 症性疾患、3) 腔粘膜疾患、4) 血液疾患、5) 損傷、6) 全身疾患と口腔病態（口腔・顔面に症状を現す全身疾患）の基礎的および臨床的な知識を習得するために4名の教員で分担のもときめ細かくプリント、動画等を用いて講義を行っている。

### 2) 自己点検・評価

ある一定の教育目標は達成していると考ええる。

### 3) 改善方策

一定の目標は達成していると考ええるが、さらに学生がより理解を深められるようさらに工夫していく。

## II 教育方法

### 1) 教育方法の現状説明

各到達目標に対してプリント配布、PCを用いPCでも講義の際には学生の理解力を高めるために動画などを用いて解説を行っている。

### 2) 自己点検・評価

ある程度充実した教育効果が得られているものと判断する。

### 3) 改善方策

一定の目標は達成していると考ええるが、さらに学生がより理解を深められるようさらに工夫していく。

## III 成績評価

### 1) 成績評価の現状説明

講義終了後、講義内容についてMCQおよび記述式試験を実施し理解度を評価する。再試験は65点未満の不合格者に実施する。最終評価は本試験、追・再試験の全平均点で65点以上を合格とする。

### 2) 自己点検・評価

概ね問題ないと考ええる。

### 3) 改善方策

現段階では改善の必要性なし。

# 2023年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	口腔内科学	第3学年
科目責任者（記載者）	高田 訓	

調査実施年月：2024年6月

## I 到達目標

### 1) 科目の到達目標に対する現状説明

2022年の到達目標と同様、シラバスに記載された到達目標および「臨床との関連性を理解するための広い概念を知ること」を目標に加え授業を実施した。やはり、非常勤講師の新鮮な講義が望まれるところである。

### 2) 自己点検・評価

口腔内科学の教科書に沿って、具体的な到達目標に即した授業を行うことができた。

### 3) 改善方策

口腔内科学の教科書を熟知させ、臨床に直結させる必要があるが、改善対策は数年間の学力をみて判断する。積極的な非常勤講師との交流でモチベーションを上げたい。

## II 教育方法

### 1) 教育方法の現状説明

前期・後期とも教科書を用いて、スライドとプリント媒体で講義展開し、写真媒体と活字で臨床的な概念を講義した。

### 2) 自己点検・評価

国家試験出題基準に沿った教科書により、有意義な授業を進めることができた。重要点を提示することで、学習しやすくなり成績の上昇がみられた。

### 3) 改善方策

昨年から通じて、ほぼ、予定通りなので、現状このまま進める予定。

## III 成績評価

### 1) 成績評価の現状説明

前期・後期ともに授業内容の確認を主体とし、定期試験で行った。記述問題を充実させ、3Dは評価に加えなかった。

### 2) 自己点検・評価

総括的かつ重要項目については十分に正しい評価ができた。

### 3) 改善方策

教科書を用い、試験後にフィードバックしやすくする。昨年からの改善を継続し、このまま進める予定。

# 2023年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	歯科放射線学 I	第 3 学年
科目責任者（記載者）	原田 卓哉	

調査実施年月：2024年 6 月

## I 到達目標

### 1) 科目の到達目標に対する現状説明

シラバス記載内容通りに実施できていると理解している。

### 2) 自己点検・評価

担当者を換えてほしい。スライドで授業してほしいという意見が散見された。

### 3) 改善方策

担当者の交代は難しい。スライドを作るのは難しいので少しずつ進めていきたい。

## II 教育方法

### 1) 教育方法の現状説明

板書およびスライドを利用している。プリントを配布して、授業内容をまとめるように指導している。

### 2) 自己点検・評価

授業中は質問を受け付けるとあらかじめ述べているのにこの授業で国試に受かるのか不安です。問題対応力が身に付かず、これで国家試験に対応出来るのかは甚だ疑問である。  
何が悪いのか言わないのでどう改善したらいいのかわからない。  
スライドとレジュメの作成が必要と思われた。

### 3) 改善方策

スライドとレジュメの作成を少しずつ進めていきたい。

## III 成績評価

### 1) 成績評価の現状説明

多肢選択式の筆記試験とした定期試験で評価している。

### 2) 自己点検・評価

点数評価のため客観性があると考ええる。  
特に問題はない。

### 3) 改善方策

特に問題はない。



# 2023年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	高齢者歯科学 I	第 3 学年
科目責任者（記載者）	鈴木 史彦	

調査実施年月：2024年 6 月

## I 到達目標

### 1) 科目の到達目標に対する現状説明

高齢者歯科学 I では多職種連携を踏まえた歯科訪問診療・在宅歯科医療を安全に実施するために、多職種協働のしくみや高齢者に必要な口腔健康管理に関する知識を習得することを目的としている。主な到達目標は、老化に伴う心身および口腔の加齢変化、高齢者に多くみられる全身疾患と口腔疾患、歯科訪問診療、介護保険、急性期・慢性期・終末期での歯科の役割について学習する。

### 2) 自己点検・評価

シラバスの内容に沿って授業を実施した。長所は授業の開始時に「今回の重要 3 項目」を提示することで、その回で学習すべき内容のコアとなる部部を明確にしたことである。問題点は、項目によっては内容が多い点である。

### 3) 改善方策

現在の授業方式はかなり確立されたものであると考えている。重要 3 項目が適切なものであるかどうか、過去 5 年間の歯科医師国家試験出題基準と乖離した内容になっていないかを確認しながら、必要に応じてブラッシュアップをしていく所存である。

## II 教育方法

### 1) 教育方法の現状説明

前回の授業の復習をするために、最初に-googleフォームを用いた確認テストをしている。結果がすぐにグラフで反映されるため、授業内容に対する学生の理解度の確認にもなる。授業は使用している教科書をもとに、内容をまとめた講義資料とスライドを用いて実施している。また、その回と関連する歯科医師国家試験の過去問題を練習問題として解き方を解説している。

### 2) 自己点検・評価

講義資料は単にパワーポイントのスライド一覧ではなく、ワードファイルにしたものを別途準備し、字が読める資料を心がけている。-googleフォームでの確認テストにより、リアルタイムで作成される正答率グラフをもとに解説することで、双方向性も確保している。スライドには適宜動画を挿入することで、わかりやすいように工夫している。内容が多い場合に、授業の後半で説明が不足することが問題点である。

### 3) 改善方策

1 回の講義で内容が多いものに関しては、内容を 2 回に分けて実施するような見直しが必要と考えている。

## III 成績評価

### 1) 成績評価の現状説明

定期試験と追・再試験により 100 点満点で評価している。80 点は筆記問題で、授業で提示した重要 3 項目に関する問題を出題している。20 点は選択肢問題で、授業で提示した歯科医師国家試験の過去問題を改変した問題を出題している。筆記試験と選択肢試験の合計が 65 点以上の者が合格となる。なお、小テストの解答は 5 点満点に換算し、試験成績に上限 100 点で加点している。

### 2) 自己点検・評価

定期試験と追・再試験の終了後に正答を配布し、その場で学生からの疑義を受け付けている。また、定期試験と追・再試験は異なる範囲から出題することで、追試と再試の受験者に対する公正性を担保している。

### 3) 改善方策

採点開始前に学生からの疑義を受け付けることにより、模範解答に提示した以外の解答をどのように処理するかについて、客観性を担保している。今後もこの形式を継続し、適切な成績評価を継続していきたい。

# 2023年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	災害歯科医学	第3学年
科目責任者（記載者）	板橋 仁	

調査実施年月：2024年6月

## I 到達目標

### 1) 科目の到達目標に対する現状説明

社会における歯科医師の役割を理解し、個人の尊厳と個人情報を守り、将来起こり得る大規模災害等に際して社会に貢献できる歯科医師となるために、災害時の歯科医療について学び「1) 災害時における歯科医師の役割 2) 災害時の医療体制 3) 歯科的個人識別 4) 歯科法医学の基本 について説明できること」とシラバスに明記した。

### 2) 自己点検・評価

一般目標は、歯科医師として具備すべき理想像であり、また到達目標も明記している。しかし学生からは「明確な到達目標がなく、どうしたら良いのか分からなかった。」との意見があった。即ち「シラバスに掲載されていること＝学生が認識している」とは、必ずしもなっていない現状が問題点である。

### 3) 改善方策

この崇高な一般目標を常に意識して講義に臨み、個々の到達目標をクリアしていく過程が実感できるように、一般目標・到達目標を初回講義に止まらず折に触れて反復して示すようにする。

## II 教育方法

### 1) 教育方法の現状説明

スライドによる講義を行い、まとめのレジメを配布した。歯科法医学(外部講師:岩原香織 日歯大教授)の他、心理学(佐藤 歩 講師)や被災者支援(瀬川 洋 歯学部長)等、それぞれ分担担当をお願いして授業を行った。

### 2) 自己点検・評価

「写真を使って説明してくれるので、想像しやすい」との評価の一方、「教室が暗く手元が見えない」「レジメとスライドの順番が合っていない」「声が聞き取りづらい」などの意見があった。外部講師の招聘は高評価で「岩原先生の授業はわかりやすく興味を持てた」「法医学に詳しい外部の先生方の講義が聞けてすごくためになった」のコメントがあった。

### 3) 改善方策

「ノートを取れる明るさでスライドが読めること」を第一に、スライドの色・構図を再検討する。レジメは(本来コンパクトにまとめたいが、スライドと完全に一致しないと不満に思う学生にも配慮し)スライドの流れとの違和感が極力出ないように作成する。岩原教授には今後も外部講師を継続して頂き、自分も講義手法を学びながら学生評価が向上するように努力する。何より「大きな声で」講義することを心掛ける。

## III 成績評価

### 1) 成績評価の現状説明

到達目標に掲げた履修内容の理解度を、定期試験(100%)により評価し、65点以上で合格とした。定期試験の平均点は81.8点で不合格者は1名であった。再試験での合格を65点としたので、他全員に2点加点して最終成績を提出した。最終成績の平均点は84.8点であった。

### 2) 自己点検・評価

平均点からも、問題の難易度は「授業を聞いていればできる問題」である。しかしながら「コアカリキュラムにないようなものばかり話し講義ではなく講演会のように」「CBTや国家試験、定期試験に役立つ話がほとんどなかった」との意見があり、試験は出来ているがその手応えを感じていないことは問題である。

### 3) 改善方策

救急・災害時の歯科保健対策、法歯学に関して出題される事は出題基準に明記されており、それに従ってシラバスを組んでいる。それが学生に伝わらないのは、こちらの伝え方にも問題があると認識せざるを得ない。各回のコマはどの範囲に入るのか、もう少し講義と試験の繋がりを意識させるように、授業の中でも提示することを心掛ける。

# 2023年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	総合臨床医学	第3学年
科目責任者（記載者）	風間 咲美	

調査実施年月：2024年6月

## I 到達目標

### 1) 科目の到達目標に対する現状説明

「医の倫理について説明できる」については1年生で医療倫理学を修得しておりますので、行っておりません。「インフォームドコンセントについて説明できる」については行っておりません。「医療安全の意義について説明できる」については朝日大学の松塚先生が完璧に遂行して下さいました。「主要な症候と対処法について列挙できる」および「疾患の診断と治療について説明できる」に対しては、各回の講義で詳細に行っております。

### 2) 自己点検・評価

長所：「主要な症候と対処法について列挙できる」、「疾患の診断と治療について説明できる」について各講義で詳細に説明した点。また「医療安全の意義について説明できる」は松塚先生が適切なスライドを用いてわかりやすい講義を行って下さいました。

問題点：「倫理」および「インフォームドコンセント」についてあまり説明しなかった点。

### 3) 改善方策

長所をさらに伸ばさせるための方策：「主要な症候と対処法について列挙できる」、「疾患の診断と治療について説明できる」に対しては、現状を維持しつつ、最新の事項も取り入れたいと思います。問題を解決していくための方策：医療安全およびインフォームドコンセントについても講義時間に余裕があれば取り入れていきたいです。倫理は大切ですが、他学年で習得しているため、改めて組み込む必要はないと思います。

## II 教育方法

### 1) 教育方法の現状説明

スライドおよび配付資料を用いて、各疾患の主要な症候と対処法につき、列挙できるよう、また、それぞれの疾患につき自覚・他覚症状、検査成績、診断、治療を、学生が理解し、説明できるよう、講義を行っております。理解の補助となるよう、可能な限り視覚教材を用いて遂行しております。また、関連する項目についても可能な限り取り入れております。

### 2) 自己点検・評価

長所：配付資料により、家庭でも講義の内容を振り返ることができる点、視覚教材の多様により、理解がしやすかったと考えられる点などが挙げられると思います。

問題点の明示：国試出題基準やコアカリキュラムにおいて講義すべき項目が多く、学生が理解しきれなかった部分もあったかもしれないという点です。

### 3) 改善方策

伸ばさせるための方策：当講座の該当範囲の国家試験の正解率を上げるため、繰り返し演習を行うとともに、理解できているかを知るため、講義担当者にフィードバックする方策も考えていきたいです。

解決していくための方策：国試出題基準やコアカリキュラムで求められている内容をにつき、より、焦点を絞って講義を行ってまいりたいです。

## III 成績評価

### 1) 成績評価の現状説明

シラバスに記載されているとおり、定期（後期）試験で、65点以上を合格とし、不合格者に対し、追・再試は各々1回のみ行いました。追・再試において65点以上を合格とし、追々試験、再々試験は行いませんでした。試験方法はシラバスどおり、マークシート40問で、範囲は講義で行った内容としました。また、定期試験のフィードバックは正答をユニパで送付しました。

### 2) 自己点検・評価

長所：シラバス通りに遂行しました。問題点：シラバス通り行ったため、ありません。

### 3) 改善方策

今後も、現状を維持しつつ、さらに国試における、常に新しい傾向を探り、講義や試験において学生に還元する方策でおります。

# 2023年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	保存修復学Ⅱ	第4学年
科目責任者（記載者）	山田 嘉重	

調査実施年月：2024年6月

## I 到達目標

### 1) 科目の到達目標に対する現状説明

コンポジットレジン、メタルインレー、セラミックインレーなどC B Tや歯科医師国家試験に多く出題される項目について、各機器の特徴、術式を習得することを主な到達目標としていた。今年度はほとんどの学生が定期試験で合格していたことから、到達目標の達成はかなりできていたものと思われる。

### 2) 自己点検・評価

教科書に沿って授業を進め、授業に関連した試料の配布したことから、復習する際に理解し易くなったものと思われる。また模型実習と並行して講義が行われたことから、授業で学んだ内容を実習でさらに習得しやすくなったことも関係していると思われる。

### 3) 改善方策

授業内容に理解ができず、付いて行かない学生も少なからずいることから、基本的な事項、大切な事項については繰り返し講義を行い、学生の理解度と習得度を向上させていく。

## II 教育方法

### 1) 教育方法の現状説明

講義は主にスライド、配布資料を用いて行った。授業内容は指定教科書だけでなく、参考教科書の内容も加えて行った。

### 2) 自己点検・評価

教科書に沿って授業を進めたことから、教科書に記載されている内容は後日自分で復習する際に理解し易くなったものと思われる。また講義スライドを要約した資料を配布したことで、授業の復習の助けになったものと考えている。しかし講義内容についていけなかった学生もいたことから、どの程度の学生が、どの範囲についていけなかったかの評価が十分に出来ていなかったことが反省点である。

### 3) 改善方策

学生には配布資料を使用し、週末までには講義の復習をするよう指導を徹底する。また能な限り講義内容をシンプルにする。講義の進め方、話し方のスピードをゆっくり行い学生の理解度が向上するよう心がける。

## III 成績評価

### 1) 成績評価の現状説明

成績は定期試験および、必要に応じて再試験を行い評価した。

### 2) 自己点検・評価

定期試験でかなり多くの学生が合格したことから、理解度の把握のための試験内容やその評価法は適正であったと考えている。

### 3) 改善方策

本年は定期試験、再試験のみで、中間試験を施行しなかったが、必要に応じて中間試験による学生の習熟度の評価も検討していく。

# 2023年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	保存修復学実習	第4学年
科目責任者（記載者）	山田 嘉重	

調査実施年月：2024年6月

## I 到達目標

### 1) 科目の到達目標に対する現状説明

齲蝕、非齲蝕性硬組織疾患による実質欠損に対して適切に治療を行うための技能と態度を身に着けることを目標とした。

具体的には保存修復学領域の治療となるコンポジットレジン修復、メタルインレー修復、レジンインレー修復に対する窩洞形成と修復法を理解することを目標とした実習を行っている。

### 2) 自己点検・評価

到達目標達成のために4倍大石膏模型による形態の確認後に等倍大の人工歯を用いた模型実習を行っており、学生が各種材料の使用法、各種修復法を理解しやすいようにステップを踏んだ実習を行えたと評価している。

### 3) 改善方策

実習内容を理解・習得することより課題達成を優先とする学生が少なからずいたことから、学生が実習内容を理解しながら進めるよう、各インストラクターと協議しながら質の高い実習になるよう実習を進めていく。

## II 教育方法

### 1) 教育方法の現状説明

実習開始前に実習書を使用して、実習の進行手順と注意点をあらかじめしっかり注意を行い実習を開始するようにしている。また疑問点や問題点が生じた場合はすぐに担当インストラクターに確認と粗銅を仰ぐように逐一学生に指示をした。

### 2) 自己点検・評価

自分が行った実習内容が課題に沿って適切におこなわれたかを常に確認して進むように指導した。

### 3) 改善方策

学生はそれぞれの実習日の課題を早く履修することに重点を置く傾向がある。そのため各項目をフィードバックすることが殆どなく、教育効果が限定的になってしまった。今後は実習中に学生各自にフィードバックさせるような指導法を検討していく。また講義中に、その日の実習で行うことについての注意点や重要な点を説明し、実習が理解し易くなるよう環境づくりを行う。

## III 成績評価

### 1) 成績評価の現状説明

成績は、実習中に行った窩洞形成や修復物の評価（50%）と最終日に行う実技試験による評価（30%）、出席点（20%）を総合して最終評価とした。

### 2) 自己点検・評価

実習課題および実技試験の評価法はしっかり行ったと考えている。実習課題の施行内容や実技試験により、各学生の実習内容の習得度や苦手とする項目を把握できたと思われる。

### 3) 改善方策

実習の評価はどうしても課題の達成程度やその内容に依存してしまうが、実習がいかに上手くできたかということだけではなく、実習を通してどの程度講義で習った内容の理解度が深まったかも大変重要である。そのため実習作成物の良否だけでなく、知識の理解度の向上程度も評価できるような方法について検討していく。

# 2023年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	歯内療法学	第4学年
科目責任者（記載者）	木村 裕一	

調査実施年月：2024年6月

## I 到達目標

### 1) 科目の到達目標に対する現状説明

歯内療法学の科目における一般目標は、歯の硬組織・歯髄および根尖歯周組織などの疾病に対する予防と診断・治療そして予防を行うために基本的な知識、技能および態度を習得することである。また到達目標を大きく10項目に分けて示した。授業では全てを網羅したが、試験結果では81名中16名（19.8%）が不合格となったことから判断すると成績の下位の学生において到達目標は達成できていなかったと考えられる。

### 2) 自己点検・評価

試験結果では、16名が不合格であった。今後は学生のさらなる学力向上を図るためには到達目標をさらに綿密に立案することが必要である。また、現在示している到達目標は歯内療法学のすべての範囲を網羅していると考えられるが、学生にとってかなり漠然としていてわかりにくいことが推測されるため、より具体的に示す必要がある。各授業ごとでは要点を提示していたが、良く伝わっていなかったことが考えられる。

### 3) 改善方策

到達目標の全体の数が増えるが、シラバスの紙面が許す限り、より具体的でさらに細かな内容にして提示すべきであると考えられる。C B Tと国試の出題が広範囲に渡っているため、全てを網羅するためには数が増えるが、到達目標をより具体的に理解できるように示さなければならない。また試験直前だけでなく、毎回の講義終了ごとに復習して知識を積み重ねていくことが要求される。

## II 教育方法

### 1) 教育方法の現状説明

教科書を中心にして、特に重要なところを資料として配布している。また、教科書に掲載してある写真を利用して詳しく説明している。図または術式はP Cを用いて治療器具や症例を示している。また、写真を示すだけでは実感が湧きにくいので、外来から借りられる器具はできるだけ実物を示すようにしている。そして授業の最後にその授業と関連のある国試問題、C B Tパス問題を提示している。

### 2) 自己点検・評価

授業がわかりにくいとのアンケート結果から、授業中に板書して説明をさらに詳しく行う必要がある。長所として、写真を示すだけでは実感が湧きにくいので、外来から借りられる器具はできるだけ実物を示すようにしていることが挙げられる。また、まとめたプリントを配布したが、あまり効果がなかったようである。

### 3) 改善方策

教科書を中心に進めていくが、授業の資料としてさらに多くの症例をP Cを用いて視覚的に提示していく。そしてできるだけ黒板に書いて説明するようにする。さらに双方向性の授業を行うように心がける。写真を示すだけでは実感が湧きにくいので、外来から借りられる器具はできるだけ実物を示すようにする。器具を使用している臨床の場面はビデオ等を利用して説明し、理解が深まるように工夫する。

## III 成績評価

### 1) 成績評価の現状説明

前期においては前期の講義が終了した後に、後期においては後期の講義が終了した後にそれぞれ講義内容の理解度について筆記試験を行い、筆記試験のみで評価し、前期と後期の平均が65点以上を合格としている。現状では、形成的評価は行わず、総括的評価のみで行った。

### 2) 自己点検・評価

現在、行っている試験では65点を合格点としているが、国試が年々難しくなっている現状を考えると合格点をもう少し上げるべきであると考えられる。ただなかなか65点まで達していない学生が一定の割合いるのが現状である。前年と比較すると不合格者の割合が少し増加したことから考えると、筆記試験が苦手という学生がいるので、多肢選択式の問題を評価に入れるのを検討する。

### 3) 改善方策

現在の筆記試験による総括的評価法はそのまま一定の割合を残して継続し、今後多肢選択式の問題を組み入れる。中間試験を実施するのかどうか、また評価法もできるだけ多面的にして総合的な評価をする。

# 2023年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	歯内療法学実習	第4学年
科目責任者（記載者）	木村 裕一	

調査実施年月：2024年6月

## I 到達目標

### 1) 科目の到達目標に対する現状説明

臨床実習において根管治療を行うために根管形成および根管充填の術式と技術の基本的な知識、技能および態度を習得することを一般目標にして、また到達目標を細かく具体的に10項目に分けて示している。最終的評価では、全員が合格点に達していたことから判断すると一応、到達目標は達成できたと考えられる。

### 2) 自己点検・評価

最終評価では、全員が合格したことで最低限の目標には到達していたと考えられる。学生アンケート結果からは到達目標に関しては何も意見がなかったことから理解されて受け入れられているものと考えられた。しかし、今後、学生のさらなる学力向上を図るためには到達目標をさらに見直しをする。

### 3) 改善方策

到達目標をさらに細かく具体的に示して理解しやすいようにして、レベルの高いものまで含むようさらに綿密に改善していかなければならない。

## II 教育方法

### 1) 教育方法の現状説明

各課題の手順は実習書のなかにある写真（図）で示し、必要と思われる箇所については実際にデモを行っている。実習では一人のインストラクターが学生12～18名ぐらいを担当し、各学生の根管治療における到達度をステップごとにチェックをしている。

### 2) 自己点検・評価

実習書がわかりにくいとのアンケート結果より、実習書を再点検しなければならない。学生12～18名ぐらいの少人数を一人のインストラクターが担当したが、インストラクターの数が少ないとのアンケート結果から、インストラクターの数を増やすことも検討していかなければならない。他の分野（保存修復）から手伝ってもらってはいるが、インストラクターの数がまだ、十分ではないようである。

### 3) 改善方策

実習書は毎年、改正をしているが、今後、さらに修正、改訂を加えて学生にわかりやすいように書き直しをしなければならない。教員のさらなる確保ができれば各インストラクターが担当する学生数を減らすことができる。また、手技をわかりやすくするため、モニター等を活用してビデオや実演を示し、よりわかりやすくなるように工夫を行う。

## III 成績評価

### 1) 成績評価の現状説明

ステップごとの検印の時に、技術的に一定レベルに達していない場合にはその都度、指摘してフィードバックし、そして修正させて合格基準に到達するまでやり直しをさせている。また、それぞれの課題が終了するごとに途中経過の状態をチェックするために製作物を提出させて採点し、技能評価（60%）、実習試験（25%）、小テスト（15%）により評価し、65点以上の者を合格として評価を行った。

### 2) 自己点検・評価

途中経過、または最後の製作物のチェックは一人の採点者が行うので評価基準が一定であるが、ステップごとのチェックは各インストラクターによって行っているのでインストラクターによって技能に差があるため、評価基準にばらつきが生じやすい。学生の理解度がどの程度なのか判断しにくい、全員が合格点に達していたので、目標は一応達成されたと考えられる。

### 3) 改善方策

各ステップごとのチェックに関しては、時間が許す限りインストラクター間の打ち合わせを事前に行う必要がある。また、評価に関してはできるだけ総合的に評価することが望ましいので、技能評価の他に小テスト点も加味して行うようにしていたが、今後は範囲となる項目を絞ることを検討する。

# 2023年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	歯周病学	第4学年
科目責任者（記載者）	高橋 慶壮	

調査実施年月：2024年6月

## I 到達目標

### 1) 科目の到達目標に対する現状説明

シラバスに沿って行った。歯周病学では、1年間45コマで全範囲を講義するため、範囲が膨大になり、予習と復習が不可欠になる。

### 2) 自己点検・評価

教科書に指定している臨床歯周病学とザ・ペリオドントロジーの相違点を解説し、学生の理解を深める工夫をしている。一方、学生の自主的な学びの姿勢が不可欠であるため、講義中に集中していないあるいは寝ている学生は講義を理解できないのかもしれない。学生間の学力差は如何ともしたいので、中間よりやや上を意識して講義をしている。

### 3) 改善方策

特段の変更は必要ないと考えている。

## II 教育方法

### 1) 教育方法の現状説明

教科書に指定している臨床歯周病学とザ・ペリオドントロジーの相違点を利用しつつ、毎回の講義はpower pointを使用した講義スライドを用意し、事前にPDFをユニパで配信して予習ができるように配慮している。学生に学びの姿勢を身に付けさせる工夫をしている。

### 2) 自己点検・評価

試験結果（マルチプルチョイス形式）からは、おおむねCBTの学力と関連していると思われる。

### 3) 改善方策

特に変更する必要は感じていない。余談ですが、学生アンケートの質問9の日本語がおかしいので、修正が必要です。教員に質問できなかったことがありましたか。になっています。「い」が抜けてます。

## III 成績評価

### 1) 成績評価の現状説明

前期および後期試験をマルチプルチョイス形式の問題50問で行っている。学生は試験結果によって、2回から4回の受験をすることになる。前期試験は範囲が広いので、後期試験よりも平均点が低い傾向が続いている。これは、前期30コマ、後期15コマの設定であることから、いかんともしがたい。前年に正答率が9割以上の問題があれば、内容を変え、難易度の調整をしている。

### 2) 自己点検・評価

ここ数年の結果からは、学生の理解度を客観的に評価できていると考えてる。

### 3) 改善方策

特段の変更は考えていない。正答率の高い問題については微調整を継続する。



# 2023年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	歯周病学実習	第4学年
科目責任者（記載者）	高橋 慶壮	

調査実施年月：2024年6月

## I 到達目標

### 1) 科目の到達目標に対する現状説明

シラバスに沿って行った。歯周病学実習では、各治療手技に加えて、臨床における診断力、具体的には口腔内所見、歯周組織検査およびレントゲン写真の読影力を身に付けるトレーニングが重要になる。しかし、現状、歯周疾患や歯内疾患のレントゲン所見を読影して説明する実習は皆無であるため、症例検討の練習と口頭発表を通じて、一口腔単位の診断に基づく治療計画の立案を模擬経験してもらっている。

### 2) 自己点検・評価

一口腔単位の診断に基づく治療計画の立案を教える数少ない実習であるため、今後も、学生には「考えないで丸暗記」ではなく、理解して内容を把握する勉強を支援する必要がある。指導上、繰り返し各自の知識の定着を図ることを促しているが、どうも答えが分かればよいという考え方の学生にはこちらの意図が十分に伝わっていないかもしれない。

### 3) 改善方策

特段の変更は必要ないと考えているが、これまでと同様に、実習の到達目標と学生の実習に取り組む姿勢について繰り返し指導する。指導する教員の数が少ないので、保存修復と歯内療法科から応援を依頼する。

## II 教育方法

### 1) 教育方法の現状説明

実習帳に沿って15コマで実習を行っている。

### 2) 自己点検・評価

実習内容によって作業時間や片付けの煩雑さが異なるので、豚顎実習では特に時間がかかるが、これは仕方ないことで、あらかじめ実習の概要と予定を説明をしている。

### 3) 改善方策

特に変更する必要は感じていない。

## III 成績評価

### 1) 成績評価の現状説明

一般問題と治療計画に分けて実習試験を行っている。診断の基盤になる口腔内写真とレントゲン写真の読影および歯周組織検査結果との関連性を推測して考えるトレーニングが不足している学生がいる。換言すれば、理解度の浅い学生は答えの丸暗記を勉強と考えているようで、答えに行きつく思考過程を飛ばしている傾向が強い。そこを指導して考える力を要請するのが本実習の目的でもある。

### 2) 自己点検・評価

ここ数年の結果からは、学生の理解度を客観的に評価できていると考えてる。

### 3) 改善方策

特段の変更は考えていない。

# 2023年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	冠橋義歯補綴学Ⅱ	第4学年
科目責任者（記載者）	羽鳥 弘毅	

調査実施年月：2024年6月

## I 到達目標

### 1) 科目の到達目標に対する現状説明

「到達目標」を達成するために教科書、教科書をまとめた講義資料（講義に先立ちユニパに掲示）、講義ごとの確認テストなどを使用して講義を行った。この際「一般目標」の内容を反映させて講義を行った。本科目は冠橋義歯補綴学の各論内容の項目であることを学生にアナウンスし、授業内容が深く理解できるよう配慮している。

### 2) 自己点検・評価

「到達目標」はシラバス記載の通りに授業を行い、授業での「学習の目標」は教科書の内容を反映させた。「授業はシラバスに沿って進捗したと思いますか。」の項目では「そう思う（67%）」の評価を得た。「到達目標」は「可もなく不可もない状態」と自己点検します。

### 3) 改善方策

「到達目標」をさらに向上させる必要があると考えられるので、「シラバスの記載とシラバス熟読のアナウンス」や「教科書の学習の目標」に沿って熱意と工夫に満ちた講義を行うことでさらなる高評価を得られるよう取り組みます。

## II 教育方法

### 1) 教育方法の現状説明

教科書、教科書をまとめた講義資料（講義に先立ちユニパに掲示）、講義ごとの確認テストなどを使用して講義を行った。必要に応じ、症例写真も取り組むことで視覚的に理解が進むよう配慮している。

### 2) 自己点検・評価

教育方法では「授業前の予習」では「そう思う」と「どちらかと言えばそう思う」で67%、「授業後の復習」の項目では「そう思う」と「どちらかと言えばそう思う」で84%であった。これらのことから学生は自主的に勉強していたと考えられます。学生が自主的に勉強に専念していたことは長所であると思います。教員の熱意や授業の工夫によりさらに良い講義にしたいと思います。

### 3) 改善方策

今後の資料作成は年度更新ごとに国家試験などの出題内容を追加することにより教育方法を改善していきたい。CBTに出題される臨床推論問題なども指導していきたい。他には穴埋め式の講義資料、MCQでの演習問題を作成していきたい。

## III 成績評価

### 1) 成績評価の現状説明

前期の定期試験において点数が65点以上を合格とする。点数が65点未満の場合には再試験を行う。点数が65点未満の再試験該当者は、再試験の点数が65点以上でも65点の採点結果とする。

### 2) 自己点検・評価

長所は定期試験での不合格者がいないことである。問題点は採点結果が低い学生が一定の割合で存在することである。”想起→解釈⇒問題解決”のどこかで情報を整理仕切れていない学生が存在することと判断します。この結果がCBTでの失点につながってしまうと考えられます。授業の進め方なども含めて改善する必要があります。

### 3) 改善方策

試験問題の正答（率）や識別係数などを判断材料として、授業資料と試験問題のブラッシュアップを行う予定です。

# 2023年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	冠橋義歯補綴学実習	第4学年
科目責任者（記載者）	羽鳥 弘毅	

調査実施年月：2024年6月

## I 到達目標

### 1) 科目の到達目標に対する現状説明

「到達目標」を達成するために学生を4つの班に分け、各班には2名のインストラクターを配置して指導を行っている。ステップごとに各班でのデモンストレーションを行い、実習内容の説明を行っている。また講義時間中にもスライドを用いて、歯冠形態の復習を行っている。本科目は冠橋義歯補綴学の各論内容の項目であることを学生にアナウンスし、授業内容と実習が深く理解できるよう配慮している。

### 2) 自己点検・評価

「到達目標」はシラバス記載の通りに授業を行い、授業での「学習の目標」は教科書の内容を反映させた。アンケート結果より「そう思う」または「どちらかと言えばそう思う」が90%近いことから、「到達目標」は高評価と自己点検します。問題点としては、実習であることから学生の進捗が異なり授業の準備（時間配分や資料作成など）を行いにくいことです。

### 3) 改善方策

「到達目標」は高評価であると考えられる。当分野としての方策は、「実習内容の質」の向上に取り組みたい。具体的には「インストラクターの個々の能力」が向上することを期待し、学生からさらなる高評価を得られるよう取り組みたい。

## II 教育方法

### 1) 教育方法の現状説明

当分野で製作したオリジナル実習書を使用し教育している、実習に先立ち実習内容の小テストを行っている。小テストは解答後に回収し、回収後には試験の解説を行っている。伝統的に実習内容が非常に豊富であり、他大学に比べて丁寧な実習指導を行っていることは本学が他大学に誇れる教育方法の一つだと思います。

### 2) 自己点検・評価

10の評価項目のうちほとんどで「そう思う」または「どちらかと言えばそう思う」が90%近かったことから本実習の評価は高かったと思う。さらに学生と教員の信頼関係は厚かったと推察される。これは当分野のインストラクターの教育にかける情熱の賜物であり長所と考えます。問題点は、技工の指導に終始し、臨床術式との関連が少し不足したことである。

### 3) 改善方策

実習概要としては学生から高評価を得ているため実習教育方法は現状維持でよしいかと考えます。学生から改善してほしい点として、「教科書と実習書との相違」と「インストラクターの指導内容の均質化」を指摘されたので改善していきたい。

## III 成績評価

### 1) 成績評価の現状説明

前期の実習期間での実習製作物評価（25%）、小テスト結果（25%）、実習実技試験（25%）及び実習筆記試験（25%）を総合して評価する。

### 2) 自己点検・評価

長所は本実習での不合格者がいないことである。  
問題点は採点結果が低い（＝ほとんどが実技点での失点）学生が一定の割合で存在することである。

### 3) 改善方策

実習実技試験での不合格者に対しては、個別に再教育を行い再試験に臨ませることで合格点に達するよう配慮している。

# 2023年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	有床義歯補綴学Ⅱ	第4学年
科目責任者（記載者）	山森 徹雄	

調査実施年月：2024年6月

## I 到達目標

### 1) 科目の到達目標に対する現状説明

本科目は、部分床義歯の臨床的意義を理解し、製作、装着するための理論修得を一般目標としている。そのために、部分床義歯の構成要素、設計、製作過程に関する理論、さらにはメンテナンスや術後経過を説明することを到達目標としている。

### 2) 自己点検・評価

臨床実習前に修得すべき部分床義歯学に関連する知識を網羅しており、適切な到達目標であると考えている。

### 3) 改善方策

到達目標としては、現行からの修正は不要であると考えている。

## II 教育方法

### 1) 教育方法の現状説明

到達目標を実践するため45時間の講義を行った。部分的に空欄とした講義プリントを作成して配布し、プロジェクターで提示したパワーポイントファイルから学生自身に空欄を埋めさせながら解説した。必要に応じて板書による説明を追加して学生の理解を図った。他大学の非常勤教員による講義を4時間実施した。

### 2) 自己点検・評価

学生の講義に対する集中度は概して良好であったと思われる。学生の理解度を確認しながら講義を進めている。これには出席し講義に集中することを評価したことが有効であったと考える。ただし、講義が聴き取りにくかったという評価が複数みられた。

### 3) 改善方策

当科目は講義全体を通して部分床義歯の臨床的、基礎的項目を網羅するため、欠席や集中不足などにより理解できない部分があると、わかりにくくなってしまふ。前回の講義を振り返りながら次の内容を説明することで対応する。また講義の際の音量に注意する。

## III 成績評価

### 1) 成績評価の現状説明

毎回の講義での小試験で形成的評価を行い、理解不十分な箇所が明確になるよう配慮した。また中間試験と後期試験で客観試験、記述試験による総括的評価を行った。後期試験不合格者24名に対して追再試験を実施し、さらに特待生の継続条件未達成者を含め特別試験を実施したが、欠席者を除いて2名は合格に至らなかった。

### 2) 自己点検・評価

これまでと同様の難易度の問題により総括的評価を行ったが、再試験、特別試験を実施してもなかなか合格に至らない。毎回の復習などをシラバスにも記載し、自学自習を推奨しているが、取り組みに対する個人差が大きいと考える。

### 3) 改善方策

本科目の講義内容が多岐にわたるため、毎回の講義後に十分な復習を実施しないと内容の理解が難しくなる可能性がある。講義の欠席が多いものに成績不振な学生が多いことから、来年度は出席を積極的に推奨したい。

## 2023年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	有床義歯補綴学Ⅱ実習	第4学年
科目責任者（記載者）	山森 徹雄	

調査実施年月：2024年6月

### I 到達目標

#### 1) 科目の到達目標に対する現状説明

本科目は、部分床義歯を製作、装着するための理論の理解を深め、その技術を習得することを一般目標としている。そのために部分床義歯の製作に要する各過程を実践することを到達目標としている。

#### 2) 自己点検・評価

臨床実習前に修得すべき部分床義歯学に関連する知識を網羅しており、適切な到達目標であると考えている。

#### 3) 改善方策

到達目標としては、現行からの修正は不要であると考えている。

### II 教育方法

#### 1) 教育方法の現状説明

到達目標を実践するための内容について60時間の実習を行った。少人数のグループに分かれ、インストラクターからの個別指導に従い、実習マニュアルに沿って部分床義歯製作の各過程を実践した。

#### 2) 自己点検・評価

臨床実習前に必要な内容を組み込んでいるため、実習時間に余裕がない。学生の授業評価は概ね良好であったが、時間不足の意見があった。またインストラクターによる介入の度合いについての不満がみられた。

#### 3) 改善方策

学内スタッフの指導能力向上を目的としてデモ模型の製作に力を入れる。またインストラクターミーティングで学生への接し方、指導方法、到達目標などのさらなる統一を図る。

### III 成績評価

#### 1) 成績評価の現状説明

実習中の口頭試問で形成的評価を行い、実習毎の小試験と実習終了時点の実技試験、製作物と出席状況により総括的評価を行った。

#### 2) 自己点検・評価

欠席した学生を除くすべての学生は形成的評価に基づき指導に沿った自学自習を実践し、総括的評価で合格に至った。

#### 3) 改善方策

実習前半では講義に先行して実習する内容が含まれるため、事前の説明を詳しく行う必要がある。

# 2023年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	口腔インプラント学	第4学年
科目責任者（記載者）	山森 徹雄	

調査実施年月：2024年6月

## I 到達目標

### 1) 科目の到達目標に対する現状説明

本科目は、口腔インプラントによる欠損補綴治療のための理論を修得することを一般目標としている。そのために診察や検査、治療計画立案から一連の治療の他、関係する基礎的を学ぶ。

### 2) 自己点検・評価

臨床実習前に修得すべき全部床義歯学に関連する知識を網羅しており、適切な到達目標であると考えている。

### 3) 改善方策

到達目標としては、現行からの修正は不要であると考えている。

## II 教育方法

### 1) 教育方法の現状説明

到達目標を实践するための内容について15時間の講義を行った。講義プリントを作成して配布し、プロジェクターで提示したパワーポイントファイルおよび板書を用いて解説した。また今年度は非常勤教員による講義はリモート講義とした。

### 2) 自己点検・評価

学生の講義に対する集中度は概して良好であったと思われる。詳しい説明や繰り返して説明すると共に、学生の理解度を確認しながら講義を進めた。スライドの文字が小さいことと、講義の声が小さいとの意見があった。

### 3) 改善方策

スライドおよび講義の際の音量に注意する。

## III 成績評価

### 1) 成績評価の現状説明

シラバスに沿って、定期試験で総括評価を実施した。不合格者5名には再試験を行い、不合格者および希望者に特別試験を実施した。最終評価として欠席者以外は全員合格した。

### 2) 自己点検・評価

多くの学生は高得点を獲得していたが、一部の学生に成績不振を認めた。

### 3) 改善方策

一部の学生に成績不振を認めたため、講義内容の復習を指導する必要がある。

# 2023年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	口腔インプラント学実習	第4学年
科目責任者（記載者）	山森 徹雄	

調査実施年月：2024年6月

## I 到達目標

### 1) 科目の到達目標に対する現状説明

本科目は、口腔インプラントによる欠損補綴治療のための手技と理論を修得することを一般目標としている。そのために診察や検査、治療計画立案から一連の治療を学ぶ。

### 2) 自己点検・評価

臨床実習前に修得すべき全部床義歯学に関連する知識を網羅しており、適切な到達目標であると考えている。

### 3) 改善方策

到達目標としては、現行からの修正は不要であると考えている。

## II 教育方法

### 1) 教育方法の現状説明

グループごとにインストラクターを配置し、画像診断と治療計画立案、模型上での外科治療、補綴治療の実施を行った。

### 2) 自己点検・評価

学生の講義に対する集中度は概して良好であったと思われる。ただし、実習内容に対して時間があまったとの意見があった。

### 3) 改善方策

実習内容を見直し、時間内に追加できる事項を検討する。

## III 成績評価

### 1) 成績評価の現状説明

シラバスに沿って、実習筆記試験と提出物により評価し、全員が合格と判定された。

### 2) 自己点検・評価

多くの学生は高得点を獲得していたが、一部の学生に成績不振を認めた。

### 3) 改善方策

一部の学生に成績不振を認めたため、対象者を絞って実習内容の復習を指導する必要がある。

# 2023年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	口腔外科学Ⅱ	第4学年
科目責任者（記載者）	川原 一郎	

調査実施年月：2024年6月

## I 到達目標

### 1) 科目の到達目標に対する現状説明

顎・口腔領域の疾患に罹患した患者の健康維持・増進を図るために、①手術総論、小手術の知識 ②嚢胞および嚢胞性疾患 ③唾液腺疾患 ④腫瘍および腫瘍類似疾患 の基礎知識および臨床的な知識を習得させるために授業をおこなっている。

### 2) 自己点検・評価

学生の授業評価から判断すると、到達目標は達成できたと考える。

### 3) 改善方策

基本事項を強調し、よりわかりやすく理解させる授業に心掛ける。双方向性の講義スタイルを取り入れ質問しやすい授業に心掛ける。板書時に字が読みづらいとの指摘があり改善を心がける。

## II 教育方法

### 1) 教育方法の現状説明

教科書と教員の作成したプリントをもとに授業をおこなった。重要事項は板書し説明を加え、例え話を交えて理解しやすく工夫した。さらに投影視覚素材を使用しわかりやすい授業内容に心掛けた。さらに、プリントは学生に書いてもらえるように余白を多く設けて対応した。

### 2) 自己点検・評価

学生の授業評価から判断して、現在の教育方法で問題ないと考ええる。

### 3) 改善方策

基本的事項を強調し、基礎科目と関連させることで、わかりやすく理解させる授業に心掛ける。コロナ禍で実施出来なかった双方向性の講義スタイルを再開して質問しやすい授業に心掛ける。

## III 成績評価

### 1) 成績評価の現状説明

評価方法は定期試験（前期・後期）の結果で平均65点以上を合格とした。定期試験欠席者に対して追試験をおこない、65点未満必要の学生に対して再試験をおこなった。試験は多肢選択および記述式試験でおこなった。

### 2) 自己点検・評価

定期試験・追再試験を実施し、2名を除きその他合格とした。学生は授業内容を理解し到達目標に達していると考ええる。

### 3) 改善方策

今後とも同様の評価方法で成績評価を行うので問題ないと考ええる。C B T本試験の結果から判断すると、本当に理解して身につけているのか不安である。



# 2023年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	口腔外科学Ⅲ	第4学年
科目責任者（記載者）	高田 訓	

調査実施年月：2024年6月

## I 到達目標

### 1) 科目の到達目標に対する現状説明

後期のみ、15時間の授業で徹底した各論の詳細講義とし、臨床実習直結型の目標となっている。  
非常勤講師の講義を再会できたが、内容に不満が残った。

### 2) 自己点検・評価

到達目標の設定は具体的に理解し易く、目標に沿った授業日程を組むことができている。  
非常勤講師の講義に若干不満があるようだ。

### 3) 改善方策

非常勤講師とコミュニケーションを保ち、興味ある講義を行いたい。

## II 教育方法

### 1) 教育方法の現状説明

教科書を用いた基本的内容を講義し、臨床に直結させられる写真媒体を多く取り入れた講義を行っている。

### 2) 自己点検・評価

高いモチベーションを確保するためにフィールドワークを取り入れよと考えたが、現状は不可能であった。  
非常勤講師の貴重な資料、写真、症例を提示する機会を多く取り入れ、時間をかけて説明する必要がある。

### 3) 改善方策

成績不良者には、国家試験出題基準に沿った教科書の内容を十分理解できているか、それが卒業試験と国家試験に直結することを理解しているか、自学自習や予習、復習などの方法を教える必要がある。

## III 成績評価

### 1) 成績評価の現状説明

授業内容の確認を主体としたMCQと筆記の試験を行うとともに、記述の頻度を高くした。

### 2) 自己点検・評価

総括的かつ重要項目については十分に正しい評価ができた。  
昨年と同様、臨床実習に近い学年であるにもかかわらず、臨床実地に必要な知識を評価できたか否かは不明である。

### 3) 改善方策

試験の成績評価に下駄を履かせることや、追加試験、不要な適宜試験などを行い、無理矢理進級させる試験は絶対に行わない。

# 2023年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	歯科麻酔学	第4学年
科目責任者（記載者）	山崎 信也	

調査実施年月：2024年6月

## I 到達目標

### 1) 科目の到達目標に対する現状説明

広く基礎医学と臨床医学を理解することで、的確に患者の全身状態を評価し、その上で安全な患者の生体管理を実践するために必須である歯科麻酔学の知識を修得する。以上が到達目標である。講義はこの目標に沿って行われた。

### 2) 自己点検・評価

試験や実習の成績や、学生からの評価から、上記目標は十分に達成できたと考える。本年度も、一部、スライドで講義をしてプリントで渡してほしいという要望があった。

### 3) 改善方策

現在の目標は達成できているが、歯科麻酔学の国家試験問題は、徐々に問題数も増加し、範囲も広がってきている。今後も継続的に、高い目標を設定し、それに教育が追従できるように、教育体制を充実させていきたい。スライドで講義をしてプリントで渡してほしいという要望については、後で見れば良く、寝る学生を増やすので、変える必要はない。

## II 教育方法

### 1) 教育方法の現状説明

完成資料を配ると学生は講義を聴かなくなる傾向がある。また、スライドをこちらのペースで進めると、学生は講義に追従できなくなり、暗くて寝る者が多くなる。そのため、配るプリントはあえて完成度の低くし、プリントには板書を記入するスペースを設けた。講義のメインは板書とした。

### 2) 自己点検・評価

学生からの評価は、「分かりやすい」、などの回答が得られた。各点数も平均以上を上回っていた。配布したプリントのスペースを上手く使って、綺麗にノートを取ってくれる学生が多く、その点でも効果があったと考える。また、それが歯科麻酔学の定期試験やC B Tに反映されたと考える。

### 3) 改善方策

現在の講義体系を大きく変えるつもりはない。現在の講義がより学生にわかりやすい、親しみやすい、自然と覚えやすい内容になるように、要所所で工夫を加えたい。

## III 成績評価

### 1) 成績評価の現状説明

本年度は、前期も、後期も〇×式の客観試験（マークシート使用）に加え、5枝択一の問題および筆記試験とした。前期も後期も中間試験を設けたため追再試験を含めて8回の試験で最終成績が判定され、正確な成績評価ができたと思われる。

### 2) 自己点検・評価

85名中4名が休学となり、81名が定期試験を受験した。最終評価の平均点は77.6点で、最終評価で不合格となったのは2名であった。この2名は、他の科目も不合格点が多かったため、適切な評価であったと思われる。授業内容をわかりやすく、充実させたための結果だと考え、成果がみられたと考える。

### 3) 改善方策

従来まで行ってきた客観試験のみでは十分な評価ができなかった部分があるため、筆記試験を導入して理解を深めることができたと思われる。時間的にも余裕がみられたので、本年度も記述問題も追加し、従来通り中間試験も加えて、学習効果を高めたい。

# 2023年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	歯科矯正学	第4学年
科目責任者（記載者）	福井 和徳	

調査実施年月：2024年6月

## I 到達目標

### 1) 科目の到達目標に対する現状説明

矯正歯科治療に係わる総論、診断学、治療学について理解するため、10項目の到達目標を掲げて、通年にわたり教授した。前期は成長発育、正常咬合と不正咬合の基礎を重点に講義した。後期は治療ステップをメインに総合診断、治療計画立案までの一連の流れからスタートし、抜歯の必要性を説明した。その後、動的治療内容に関する固定の概念、装置の特徴、治療による偶発症、保定と共に再発防止策の講義を実施した。

### 2) 自己点検・評価

C B T対策も兼ねて診断学、特にセファロ分析に関する課題を体験型として宿題でまとめさせた。ただ単に教科書の例に限らず演習を行なったことで理解度を増す試みであったが、授業担当者で指導の統一が満足に得られなかった。

### 3) 改善方策

セファロの演習については授業担当者間で指導内容を統一させ、個人の評価をしっかりと行う。セファロに関しては4年で講義・演習・実習で基礎を固める方策を継続していく。

## II 教育方法

### 1) 教育方法の現状説明

授業形式は教科書を中心に板書・スライドにて講義を行った。授業毎に講義の最後に関連している範囲の国家試験の平易な問題をピックアップし、確認試験を行った。C B T、国家試験に頻出されるツイードの計算問題やセファロの計測については復習形式で宿題を課した。

### 2) 自己点検・評価

授業担当者毎のスライド形式が統一されていない。配布資料に印刷時の不具合があり、判読不能な箇所ある資料を配布していた。C B T、国家試験に頻出される計算問題やセファロの分析については復習形式で宿題とする事で理解力が向上できるため継続する。課題が多いとの評価が今年も見られた。

### 3) 改善方策

授業担当者でスライドの印刷方向を統一させること、印刷物の確認を行う。

## III 成績評価

### 1) 成績評価の現状説明

前期・後期の定期試験で評価した。セファロに関しては確認試験としてセファロトレース分析試験を12月に実施した。

### 2) 自己点検・評価

セファロの後期中間試験実施時期を早くに教示して欲しいとの要望があった。

### 3) 改善方策

セファロの後期中間試験については実施時期を早くに伝達する方向で検討する。

# 2023年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	歯科矯正学実習	第4学年
科目責任者（記載者）	福井 和徳	

調査実施年月：2024年6月

## I 到達目標

### 1) 科目の到達目標に対する現状説明

歯科矯正学に関する基本的な技能を身に付けさせる。特に歯が移動するための原理を理解するために、舌側孤線装置およびマルチブラケット装置の2種類で歯の移動シュミレートを行わせ、学習する。

### 2) 自己点検・評価

全員が歯の移動シュミレートを実施し、タイポドント模型上で矯正力が発現するメカニズムや歯の移動様式を理解できることが達成された。しかし、外部インストラクターの学生に対する態度が一貫性が無いことが挙げられていた。

### 3) 改善方策

実習指導については授業担当者間で指導内容を統一させ、一貫性を持った指導をしっかりと行う。セファロに関しては4年で講義・演習・実習で基礎を固める方策を継続していく。

## II 教育方法

### 1) 教育方法の現状説明

実習前に示説を行い、基本手技後に2種類の装置製作に入る。各班毎にインストラクターをおき、ステップ毎に確認を得ながら進行する。レポート、口頭試問をインストラクターが行う。

### 2) 自己点検・評価

ストレッチャー毎の指導内容は各実習前の会議で統一を図り、ほぼ一定の指導を行うことができた。こちらの都合で備え付けのカメラが使用できない状況にありながら、他の手段を講じない学生を叱責したケースがあった。

### 3) 改善方策

授業担当者への指導内容の統一は継続する。実習進行において学生への不利益が生じないように、指導員へ周知する。

## III 成績評価

### 1) 成績評価の現状説明

実習態度、小試験、総合試験（筆記・実技）、口頭試問により評価する。

### 2) 自己点検・評価

以前、口頭試問での難易度の差について今年度も評価に記載されていない。実習最後の総合試験での出題内容は国試出題基準に従い毎年調整を行なっている。

### 3) 改善方策

口頭試問での難易度の差については今年度も評価に記載されていないため、引き続き模型実習会議で試問内容の調整を行っていく。総合試験での出題内容は国試の出題基準をもとに毎年調整を行なっており、6年での理解度も得られていることから継続していく。

# 2023年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	小児歯科学	第4学年
科目責任者（記載者）	島村 和宏	

調査実施年月：2024年6月

## I 到達目標

### 1) 科目の到達目標に対する現状説明

小児の口腔の健康維持、歯列・咬合の育成をはかるために、成長発育（心身の発育・発達）について学び、小児の口腔発育・発達および種々の口腔疾患を理解して、その診断と治療法についての知識を習得する。大きな変更の必要性は感じていない。

### 2) 自己点検・評価

前年度の成績を踏まえ、初回講義の際に今後のCBT・OSCE・臨床実習試験・国家試験に向けて個々の目標設定の重要性と自主努力、ルール順守を指導した。公平公正に心掛けて指導し、一部学生には厳しいと捉えられているようだが、シラバス通りの講義スタイルや試験内容などに大きな問題はないと考えている。試験は前後期で行い、平均点は昨年度より若干上昇した。留年者も少なかった。

### 3) 改善方策

関連教科の担当者からの意見も参考に講義してきたが、あらためて他大学の状況も情報収集する。他大の教員と共同で作成した教科書も改編したため事前資料の見直しを図る。基礎科目に関連した項目も多く、虐待など近年の社会状況の知識も必要のため、そうした話題の解説も増やし、あらためて自主的準備の必要性を伝達する。

## II 教育方法

### 1) 教育方法の現状説明

各講義最初に重要ポイントを指摘し、該当する教科書記載場所を確認しながら講義した。CBTを見据えて画像を活用し、重要項目を記したプリントを配布した。特に重要な点はあらためて板書し図を描きながら学生自身にも確認させて授業を進めた。視覚素材として関係する症例、マネキン、顎模型等を提示し説明を加えた。実習時間の試問小テストも継続した。

### 2) 自己点検・評価

当日の授業項目・内容を板書し当日の授業目標を明確にした。常にCBTと国試問題を意識して講義を進めたことで、動機付けに繋がっていると感じている。視覚資料の改変を勧め、理解を深めさせた。実習時間のレポート作成・試問も行い講義と連動させていた。厳しいとの意見もあったが概ね理解を得られた。

### 3) 改善方策

基礎的問題への理解不足には、関連事項が出て来た際にこれからも繰り返し説明する。その際に関連他科の事例も取り入れる。事前準備と重要事項（ポイント）の指摘をさらに充実させ、よりわかりやすい講義を目標に配慮する。視覚資料等の点検充実を計る。実習時間の指導との関連強化。板書の量を減らし、講義に集中させつつ学生への質問を行う。

## III 成績評価

### 1) 成績評価の現状説明

前後期の定期試験により評価した。前後期それぞれで成績が十分でなかった者については、再試験と適宜試験を行った。その結果をシラバスに記載の評価基準に則って判定した。

### 2) 自己点検・評価

前後期定期試験の結果、合格点未満の学生に適宜試験と再試験を実施した。前・後期定期試験の内容は全講義項目の内容を網羅した出題となっており、学生の理解・習得度の評価には適切であった。試験前には重要項目を確認させているが、本試で合格基準に満たなかった者もおり、さらに理解度を高めさせたい。平均点や最高点は昨年度並みであった。

### 3) 改善方策

生理的特徴や解剖学的特徴など前期の基礎的項目が苦手なものが多かった。興味をひきやすい臨床的内容に関連づけて講義しているが、重要項目の理解を目標に画像を増やし講義内容の充実を計る。次年度はカリキュラム変更があるためCBTのためにも選択式問題を取り入れる。

# 2023年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	小児歯科学実習	第4学年
科目責任者（記載者）	島村 和宏	

調査実施年月：2024年6月

## I 到達目標

### 1) 科目の到達目標に対する現状説明

小児の口腔疾患の診断、処置ならびに口腔健康維持管理を遂行するために、小児のう蝕治療・咬合誘導処置・予防的処置の各項目の理論（知識）と技能、態度を習得する。実習では成長発育過程にある小児の歯科診療（治療）の特徴をよく理解することも重要となる。なおこれらは「モデル・コア・カリキュラム」に沿った内容を基本として実習を進める。

### 2) 自己点検・評価

共用試験OSCEの課題はなくなったが、臨床実習も見据えて「モデル・コア・カリキュラム」に準拠し、実習計画を立てて実践した。実習と演習が補完的役割も果たすため、復習がてら小テストを実施したが成績不良者は固定されていく。デモや視覚素材も利用したが留年者や編入者のなかに見ていない者がいたようで残念である。小テストの中止やレポート対象者について意見があった。

### 3) 改善方策

OSCE公的化に伴い育成系課題が一旦なくなったが、今後復活の可能性があるため臨床実習も見据えて時間配分を調整して対応する。実習が苦手な者もいるため、時間に余裕ができる者もいるが、ある程度余裕を持った配分とする。実習時間の中で円滑・効果的に進められるような実習を目指す。講義と連動したレポート提出、小テストを継続する。

## II 教育方法

### 1) 教育方法の現状説明

実習内容に沿った教室独自のサブテキスト2023小児歯科学実習を作成し全員に配布した。また全実習項目で実習開始時に視覚素材<ビデオ>による説明・解説後、各グループごとにデモンストレーションを行った。講義と連動したレポート提出、試問を行った。学生評価は高かった。

### 2) 自己点検・評価

各グループ担当教員が学生の質問・疑問点に積極的に対応したが、コロナの影響で休む者もあり全体のスケジュール進行と各自の進捗状況のバランスが難しかった。実習開始時に当日の実習内容に関する小テストを実施。各ステップごとに処置・製作物の段階的評価を行い学生にフィードバックしている。指導者の態度に関する意見があった。

### 3) 改善方策

OSCE課題から外れたが基本的実習形態・方法・内容は前年度を踏襲する。時間配分の見直しや、指導教員の態度含め一層の指導力向上を図り、非常勤講師とも連携し対応力を強化する。実習指導内容の標準化・統一化に努める。一定の検印待ち時間は必要のため、指示した学習項目の予習復習を徹底させる。科目間での指導基準について願います。

## III 成績評価

### 1) 成績評価の現状説明

各実習項目ごとに実習内容および製作物の評価、ならびに実習試験（筆記試験・課題試験）を実施し、これらを総合して実習の評価を行った。

### 2) 自己点検・評価

シラバスの記載通りに評価した。学生の知識・技能・態度を総合的、客観的に評価している。不合格者がいたがレポート対応した。実習日に不在の者への対応に苦慮した。適宜試験や追加口頭試問も実施し、知識の定着に努めたが、成績の低い学生には多少の重荷となったのはやむを得ないとする。

### 3) 改善方策

従来通り、実習内容に即した各実習項目・課題・実習試験を総合して評価する。臨床的手技に精通した非常勤講師の協力のもと、医局員と共に指導体制を強化する。学生には負担もあるが、口頭試問やレポートは継続する。

# 2023年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	歯科放射線学Ⅱ	第4学年
科目責任者（記載者）	原田 卓哉	

調査実施年月：2024年6月

## I 到達目標

### 1) 科目の到達目標に対する現状説明

シラバス記載内容通りに実施できていると理解している。

### 2) 自己点検・評価

### 3) 改善方策

## II 教育方法

### 1) 教育方法の現状説明

板書およびスライドを利用している。プリントを配布して、授業内容をまとめるように指導している。

### 2) 自己点検・評価

スライドを作れ、レジュメを作れ、C B T対策、国家試験対策をいろいろな言われてもすべてを実行するのは難しい。

### 3) 改善方策

スライドとレジュメの作成を少しずつ進めていきたい。

## III 成績評価

### 1) 成績評価の現状説明

多肢選択式の筆記試験とした定期試験で評価している。

### 2) 自己点検・評価

点数評価のため客観性があると考えます。  
特に問題はない。

### 3) 改善方策

特に問題はない。

# 2023年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	高齢者歯科学Ⅱ	第4学年
科目責任者（記載者）	鈴木 史彦	

調査実施年月：2024年6月

## I 到達目標

### 1) 科目の到達目標に対する現状説明

高齢者歯科学Ⅱでは摂食嚥下リハビリテーションに関する知識を習得することを目的としている。主な到達目標は、摂食嚥下に関する解剖と生理、摂食嚥下のモデル、原因疾患と合併症、摂食嚥下障害の評価とリハビリテーションの方法、嚥下補助床、栄養管理について学習する。

### 2) 自己点検・評価

シラバスの内容に沿って授業を実施した。長所は授業の開始時に「今回の重要3項目」を提示することで、その回で学習すべき内容のコアとなる部部を明確にしたことである。問題点は、項目によっては内容が多い点である。

### 3) 改善方策

現在の授業方式はかなり確立されたものであると考えている。重要3項目が適切なものであるかどうか、過去5年間の歯科医師国家試験出題基準と乖離した内容になっていないかを確認しながら、必要に応じてブラッシュアップをしていく所存である。

## II 教育方法

### 1) 教育方法の現状説明

前回の授業の復習をするために、最初にGoogleフォームを用いた確認テストをしている。結果がすぐにグラフで反映されるため、授業内容に対する学生の理解度の確認にもなる。授業は使用している教科書をもとに、内容をまとめた講義資料とスライドを用いて実施している。また、その回と関連する歯科医師国家試験の過去問題を練習問題として解き方を解説している。

### 2) 自己点検・評価

講義資料は単にパワーポイントのスライド一覧ではなく、ワードファイルにしたものを別途準備し、字が読める資料を心がけている。Googleフォームでの確認テストにより、リアルタイムで作成される正答率グラフをもとに解説することで、双方向性も確保している。スライドには適宜動画を挿入することで、わかりやすいように工夫している。内容が多い場合に、授業の後半で説明が不足することが問題点である。

### 3) 改善方策

1回の講義で内容が多いものに関しては、内容を2回に分けて実施するような見直しが必要と考えている。

## III 成績評価

### 1) 成績評価の現状説明

定期試験と追・再試験により100点満点で評価している。80点は筆記問題で、授業で提示した重要3項目に関する問題を出題している。20点は選択肢問題で、授業で提示した歯科医師国家試験の過去問題を改変した問題を出題している。筆記試験と選択肢試験の合計が65点以上の者が合格となる。なお、小テストの解答は5点満点に換算し、試験成績に上限100点で加点している。

### 2) 自己点検・評価

定期試験と追・再試験の終了後に正答を配布し、その場で学生からの疑義を受け付けている。また、定期試験と追・再試験は異なる範囲から出題することで、追試と再試の受験者に対する公正性を担保している。

### 3) 改善方策

採点開始前に学生からの疑義を受け付けることにより、模範解答に提示した以外の解答をどのように処理するかについて、客観性を担保している。今後もこの形式を継続し、適切な成績評価を継続していきたい。



# 2023年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	障害者歯科学	第4学年
科目責任者（記載者）	吉田 健司	

調査実施年月：2024年6月

## I 到達目標

### 1) 科目の到達目標に対する現状説明

障害者の法律から始まり、各々の症候群や病態について授業を行った。障害に重点を絞った。授業を行い、また、口腔内状況やそれぞれにあった行動調整について授業を行った。

### 2) 自己点検・評価

生理学や生化学の箇所は授業時間も少ないため、復習箇所を話す程度だったが、プリントを用意しても良いのではと感じた。

### 3) 改善方策

病態について理解するためには、低学年で学ぶ生理学や生化学の知識が必要であり、授業に取り入れる必要があると感じた。

## II 教育方法

### 1) 教育方法の現状説明

スライドを用いて説明し、プリントは穴埋め形式を用いて重要な個所を書いて覚えるように授業を行った。

### 2) 自己点検・評価

生徒によってはスピードが追い付かないとの声もあったので、しっかり時間をとる必要があると感じた。

### 3) 改善方策

スライドの穴埋め形式では止まっていたが、それでももっと時間がほしいとの声があったので、書き込む量を減らし、聞き逃しがないように配慮する必要があると感じた。

## III 成績評価

### 1) 成績評価の現状説明

定期テスト100点満点で評価し、65点未満を追試験対象者とした。追試者は1名おり、最終評価では全員合格となった。

### 2) 自己点検・評価

定期テストでは100点の学生はいなかった。しかし、問題によっては100%正解率の問題もあり改善する必要があると感じた。

### 3) 改善方策

定期テストとC B T問題をリンクさせながら、問題の作成を行っていく必要がある。

# 2023年度 授業の自己評価報告書

授業科目・対象学年	臨床総合講義（歯科麻酔学）	第6学年
科目責任者（記載者）	山崎 信也	

調査実施年月：2024年6月

## I 到達目標

### 1) 科目の到達目標に対する現状説明

歯科医師国家試験に合格するために、という一般目標に沿ってカリキュラムが組まれた。

### 2) 自己点検・評価

第6学年は94名でスタートし、最終的に、国家試験出願も94名であった。3回の卒業試験で平均70%以上が合格と判定され、卒業試験の合格基準に達した63名（67%）が国家試験を受験した。昨年の卒業試験合格率より10%程度多い。現役の国家試験合格者は38名（60%）で、昨年より6%低かった。私立平均が78%であることを考えると、18%足りない。

### 3) 改善方策

現在のカリキュラムは良い部分も多く、安定してきているので、このカリキュラムを更に改良し安定させ、改良すべき点は改良し、充実させていきたい。

## II 教育方法

### 1) 教育方法の現状説明

実力試験で成績不良の学生は、7限目のzoomでのフィードバック講義を義務付けてある。

### 2) 自己点検・評価

上記の方策は有効であったと思われ、継続する。

### 3) 改善方策

コロナ関係での欠席は公欠扱いににされるということから、全体として、曖昧な欠席が多くなった可能性がある。来年度は、体調不良時に関する何らかの取り決めが必要と思われる。

## III 成績評価

### 1) 成績評価の現状説明

3回の卒業試験の平均が70点以上を合格とした。

### 2) 自己点検・評価

学生に疑義による不适当問題は科目担当者の判断で全員正解としていた時期もあったが、本操作で、結果的に65点程度の合格ラインとなり、それが、国家試験合格率の低下を招いてきた。2022年度から国家試験同様に、不适当問題は削除しており、昨年はある程度の成果を上げたが、本年は全国平均から低下した。また、柴田先生のFD講義で、卒業試験でストライク問題を求めたが、簡単な問題と受け取った科目もある。

### 3) 改善方策

卒業試験疑義の不适当問題の処理は、全員正解としてはならない。全科目で必修問題の質も上げなければならないが、問題を簡単にするのではなく切り口などを変えていく必要がある。また、2024年度は、卒業試験合格基準を、3回の卒業試験の平均点を72%に引き上げる予定である。